
家庭教師ヒットマンREBORN！ 光の守護者

古泉 楓

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

家庭教師ヒットマンREBORN！ 光の守護者

【Nコード】

N4915T

【作者名】

古泉 楓

【あらすじ】

当分の間、区切りの悪い終わり方になるかと思いますが、申し訳ありません。

ボンゴリング・シモンリング

ボンゴリング・マーリング・アルコバレーノのおしゃぶりは、
アップル・ジュニパー・テ
7?とよばれている。

それぞれ属性は、

大空

嵐

雷

雨

晴

雲

霧

の7属性である。

これ以外の属性は存在していないはずだった。最もそれは、別次元での話したが。

美琴が飛ばされた世界には、これ以外にも

光

の1属性が存在していた。

大地の7属性も当然のように存在している。

大地

氷河

砂漠

山

森

沼

の6属性が存在している（残りの1つは2011年5月25日現在不明）

そして、この他にも

もう1つ存在していた。大地の7属性8つ目が。

そして、大地の7（8）属性を扱えるファミリーがシモン以外にも登場する・・・かも。まだまだ先の事なので。

登場人物（前書き）

登場人物の設定、名前は話の都合上、本編上で出てきた後に記載することになります。

なお、登場人物は追加記載されます。登場人物以外も必要なものは記載されます。また、話が進んでいくと、名称や呼称が変わる場合がありますので、ご注意ください。

ついでに、ヴァリアー編・未来編で主要キャラが揃うと、名前が出てなくてもここに記載されます。

登場人物

本城 美琴

？本編の主人公的ポジション。自室で17個のリングを発見する。そのうちの8つが大空の7属性のリングであることがわかるが、残りは全て不明。ただし、その内の1つが光のリングだと判明。10年前に事故で両親を失い、チエデフC E D E Fに拾われる。本来、元の世界の美琴とこちらの世界での美琴は異なるはずだが、どういうわけか、こちらの世界での美琴と元の世界の美琴が同化してしまったらしい。・・？意識の方は、元の世界の美琴。光の守護者。初代光の守護者に瓜二つ。

10代目/ツナ/沢田 綱吉

？次期ボンゴレ10代目候補。美琴に不良に絡まれていたところを助けられた少年。友達からは、10代目といわれて慕われている。大空のボンゴレリングを受け取る。初代ボンゴレに瓜二つ。

山本 武

？ツナの友達の1人。雨のボンゴレリングを受け取る。時雨蒼燕流を継承するため、父親と修行に入る。スクアードとの戦いの末、雨のリングを獲得した。同時に、新たな時雨蒼燕流も獲得。初代雨の守護者に瓜二つ。

獄寺 隼人

？嵐のボンゴレリングを受け取る。Dr・シヤマルから、自分に見えていなかったものはなにかを問われ、自らの命と答えた。そのうち、Dr・シヤマルと修行を開始した。ベルフェゴールとの勝負は勝利目前だったが、ツナの言葉に感化され、自陣に戻って来た。初代嵐の守護者に瓜二つ。

クローム髑髏

？ツナの霧の守護者の1人。骸がいるから生きていられ、クロームがいるから骸は存在できる。

六道骸

？ツナの霧の守護者。クロームとは文字通り、一心同体。六道（輪廻）を操る術士。初代霧の守護者に瓜二つ。

笹川了平

？ツナの晴の守護者。ルッスーリアとの戦いに於いて、自らの信念を曲げずに戦い抜いた。座右の銘と口癖は「極限」。初代晴の守護者に瓜二つ。

雲雀恭也

？ツナの雲の守護者。群れることを嫌うが何故か風紀委員会に所属する。初代雲の守護者に瓜二つ。

ランボ／大人ランボ／20年後ランボ

？ツナの雷の守護者。牛。だけど人間の子ども。ボヴィーノファミリーのヒットマン。10年後ランボは初代雷の守護者に瓜二つ。レヴィ・ア・タンに敗北を喫した。

リボーン

？ツナの家庭教師。黄色のおしゃぶriを持つ。最強の赤ん坊の1人。アルコバレーノ

Dr・シヤマル

？本城 美琴を知る人物の1人。昼間っから酒に酔っているダメな大人。かつては、獄寺の殺しの師匠でもあった。ちなみに、獄寺の髪型は、Dr・シヤマルの真似である。2世代前のヴァリアーにス

カウトされた。

家光／親方さま／家光叔父さん／沢田 家光

？門外顧問組織チエデフCEDEFの親方さま。美琴からは、叔父さんとか呼ばれており、美琴の親戚。

門外顧問組織チエデフCEDEF

？詳細は一切不明。10年前に、みなしこ孤児だった美琴を引き取ったのは、
ここの親方さまである家光。

スベルヒ

S・スクアール

？ボンゴレリングを狙う、ヴァリアーの剣士。ヴァリアー側の雨の
守護者。山本との戦いの末、鮫がいる水の中に落下し、消息を絶つ。

オレガノ

？家光を親方さまとよぶ。

ボンゴレリング

？正式にはハーフボンゴレリングという、業の深い代物。

美琴の持つリング

？大空の7属性の性質を持つリングが7つと、光属性のリングが1
つ。そして、大地属性のリングも・・・？

アルコバレーノ
最強の赤ん坊

？文字通り、最強の赤ん坊である。7人いるらしいが、8人目もい
るとかないとか。

ザンザス
XANXUS

？ボンゴレ特殊暗殺部隊ヴァリアーボス。大空のハーフボンゴレリ

ングを持つ。

レヴィ・ア・タン

？ヴァリアーレヴィ雷撃隊隊長。雷のハーフボンゴレリングを持つ。
20ランボに追いつめられたが、10年バズーカの効力が切れて、
優勢になったが、ツナにより邪魔をされた。

マーモン

？ヴァリアー所属の術師。霧のハーフボンゴレリングを持つ。骸と
の戦いに敗れ、逃走。アルコバレーノ最強の赤ん坊の1人。藍色のおしゃぶりを持
つ。

ルッスーリア

？おかま。ヴァリアー所属のムエタイを得意とする格闘家。晴のハ
ーフボンゴレリングを持つ。了平との激戦の上敗れたが、そのまま
戦おうとしてゴーラ・モスカによって戦闘不能に至らしめられた。

ベルフェゴール

？自称王子。自称天才。ヴァリアー入隊の理由は、殺しの快感が忘
れられなかったから。嵐のハーフボンゴレリングを持つ。獄寺との
戦いに勝利した。

ゴーラ・モスカ

？旧イタリア軍からボンゴレに売却された特殊兵器。死ぬ気の炎に
より動く。雲のハーフボンゴレリングを持つ。

入江正一

？ツナの家の近くに住む少年。美琴の事を知っているようだが・・・
？

デモン

D・スピード

？初代霧の守護者にして、2代目にも仕えていたボンゴレの歴史上もっとも業が深く、最も酷い裏切り者とされる。

初代ボンゴレ

？ボンゴレファミリー初代ボス。全てに染まりつつ全てを包み込み包容する大空のようだと謳われた、ボンゴレ至上最強の男。本名、ジヨット。

9代目

？ボンゴレファミリー9代目ボス。杖を用いて戦う。ボンゴレ至上最も戦いを好まぬ、穏健派。

ルーキス・クローバー

？ボンゴレ初代光の守護者。

シモン＝コザート

？シモンファミリー初代ボス。初代ボンゴレ、ボンゴレ？世ことジヨットの親友。大地の7属性を操ることができるという。

セレナード

？光のアルコバレーノ。8つ目の炎の番人であり9つ目の炎を操る。

登場人物（後書き）

オチを知ってても、知らないふりをしていて下さい。

登場人物が増えてきましたね。

標的1 パラレルワールド（前書き）

本編は一応、ヴァリアー編からなっています。なお、原作とは違った時系列、時空列となっています。が、後々百蘭に滅ぼされるのを食い止められる可能性があるという原作とは違った未来のお話をしようかと思っています（まあ、話の都合上、それに準じないと、話が作れないので、そうはしますが）。そちらの方は、あくまでも予定なので、あしからず。

標的1 パラレルワールド

「・・・まさか、本当に別世界に来てしまうなんて。（すごいわね。まさか願ったことが本当になるなんて。思ってもみなかった）」

この少女の名前は、『ほんじょう本城 みこと美琴』。この世界の住人ではなく、この世界とは別の世界つまりは、パラレルワールドの住人。常盤中学に通う、元気いっぱいの中学生。

これ以上書くと、ネタばれ感が漂うので、説明はここまで。

「それにしても、結構賑やかなトコだね、ココ」

商店街を歩いていながら、思ったことをそのまま口に出す美琴。

「ひい！」

すると、路地裏の方から、悲鳴のようなものが聞こえてきたので、声のする方へ行ってみた。すると、そこでは、同じ年くらいの男の子が不良に絡まれていた。

「（うわ）。本当に不良に絡まれてる。助けなきゃ」

意を決して、不良たちのもとへ向かっていった。

「貴方たち！ 何をやっているの？ 止めなさい！」

「なんだあ？ てめえ」

「俺たちに文句でもあんのか？」

「ん？ 強いて言うとなないけど、困っている人は見捨てられないでしょ？ それに、何か助けなきゃいけない気がしたし」

「まあ、いい。そんなら、てめえが金くれるんだろうなあ？」

お金？ そんなことで不良が一般市民を虐めてたんだ。そんなくならないことで。バカバカしい。

「ばつかじゃないの？ お金お金って、アンタ達は、そんなんだからいつまでたつても不良なのよ。お金にばかり目が行くから。お金よりも大切なものがあるでしょ！？」

美琴の気迫に臆したのか、不良たちは、美琴を一瞥して逃げるようにして一目散に退散した。

なんなの？ もう。最初っから戦う気がないのなら、ケンカ売らないでほしいわ。

「あ、ありがとう」

不良に絡まれていた少年が、お礼を言ってきた。

「そんな。お礼なんていいのに」

あれ？ この男の子、どこかで会ったことがあるような気がする。でも、一体どこでだろう。

「あ、それより、私急いでるから。じゃあね」

と、それだけを言い残して一目散に逃げるようにしてその場を後にした。

・・・それにしても、さっきの男の子、やっぱりどこかで会ったことがあるような気がするな。

「おう、嬢ちゃん。こんな時間になにやってるんだ？ 学校はいいのか？」

そんなことを考えていると、ふと後ろから声をかけられ、後ろを振り向くと、Dr・シャマルの姿があった。

標的1 パラレルワールド（後書き）

グダグダですね。

っていうか、Dr. シャマルは名前出てきてるのに、男の子の方が名前出てこないなんて。

標的2 門外顧問（前書き）

間髪入れずの第2話となります。

とはいっても、第1話投稿から時間はかなりたっていますが・・・

標的2 門外顧問

ターゲット
標的2 「門外顧問」

「あなたは、Dr・シャル！？」

「おー、おー。俺の名前を知ってるとは。俺もなかなか有名になつて来たもんだぜ。ん？ お前、よく見たら、門外顧問とこの本城じやねえか。何だつてこんなとこに居るんだ？」

門外顧問？ ていうか、Dr・シャルがいるってことは、ここはリボーンの世界？

そう確信した瞬間、頭の中に見たことも聞いたこともないような音声と映像が流れ込んできた。

これ、この世界での私の記憶・・・？ そう、か。私はこの世界では、ボンゴレファミリーの門外顧問組織C D E Fに属しているんだ。あの男の子を見たとき、会ったことがあると思つたのはこういうことだったのか。

「どうした？」

「あ、い、いや？ な、なんでも？」

「そうか？ ならいいが。それよりも、家光からきいたぜ。お前、両親がいないんだってな」

「Dr。その話は、喫茶店に行つて話しません？」

Dr・シャルを連れて、そばにあつた喫茶店に入つて行つた。

何というご都合主義。これだから小説や漫画というのは。とど。作者が作品を貶してどうする。

「Dr、先ほどの話だけど、私に両親がいないのは前からなの。10年前に、事故でね。それから、親方さまが私の面倒を見てくれているんだ。まあ、親戚っていうこともあるからなんだけどね」

「家光とお前が親戚？ ああ、そういえば言ってたな」

「今は・・・というより、今日からは、私は一人暮らしをすることになったの。叔父さんが用意してくれたんだ」

「家光がか？ あいつ、案外マメだな」

美琴は、仕事では親方さま、それ以外の時は常時叔父さんである。CEDEFでは皆が家光のことを「親方さま」と言っているからでもある。

「私が日本に帰って来た理由だけど、実はコレを渡すためなんだ」

「これは・・・マジか？」

「うん。でも、これは決して見つかることはない。それに、恐らくあと1週間程したら彼が現れるはずだから」

「そうか。まあ、頑張れよ」

それだけ言い残して、Dr・シャルは、店から出て行った。頼んだビール中ジョッキ2杯分のお金を払わずに。

ダメ人間の象徴みたいな人だね、Dr・シヤマルって。
そう文句を垂れつつ、美琴も店を後にして、家光が用意してくれた
という家に向かった。

ここが叔父さんの用意してくれた、私の住む家か。確か鍵はポスト
の下だったな。

しかし、ポストの下には何もなく、ポストの裏を見ると、そこ
に封筒に手紙と一緒に家の鍵が入っていた。

『美琴へ

手紙は苦手だから、簡潔に書く。頑張れ』

とだけ書かれていた。

家光叔父さん、何を考えてるんだか。

家の鍵を開けて、家の中に入って行った。マンガで見た、あの『リ
ング争奪戦』がもうそろそろ始まるであろうことを思いながら。

――一方その頃、虐められていた少年は――

「10代目ー!」

「ツナ! 無事だったか?」

「獄寺君、山本。うん。なんとかね」

「すみません! 10代目! 俺が付いて行きながら、こんなこと
になってしまっなんて!」

「し、仕方ないよ。と、トイレに行きたくなるなんて誰にでもあるんだから」

「しかし、右腕として10代目を守れなかった。それだけは変わりません！」

「ハハっ。スゲー忠誠心」

「山本、お前もだぞ！ 10代目を守れないなんて！」

どうであれ、2人のせいじゃないと思う。ぼーっとしていて不良に絡まれた俺が悪いわけだし。

「その通りだぞ、ツナ。お前が悪い」

「なあ！ り、リボーン！ お前、何で」

「忘れたのか？ 俺は読唇術が使えるんだぞ」

そ、そうだった。忘れてたー！

「それにしてもツナ、さっきの女は一体誰なんだ？」

「さあ。俺に聞かれても」

「気になるな。今度後でも付けてみるか」

「や、止めるよりボーン。みっともない」

「仕方ないよ、掟だもん」

どんな掟だ。そんな掟聞いたことも見たこともない。

「そんなことよりお前ら、最近勉強怠けすぎだぞ。戻ってミツチリしごいてやるからな。覚悟しろよ」

「はは。小僧が教えんのか？ スゲーな」

「ら、楽天的すぎる」

・そして、美琴はというと・

「ふう。何か今日はすごく疲れたな。そういえば、明日は並盛中に転入するんだっけ。準備しとかないとな」

明日の準備しないとな。でも、

「マンガで見たボンゴリングは7つ。でも、このハーフボンゴリングは8つ。どうということだろう」

確かに、パラレルワールドだから、8つボンゴリングが存在する可能性はある。でも、重要なのはそこじゃない。8人目の守護者がまさか・・・だったなんて。

「・・・でも、仕方ないんだよね。こうなってしまった以上は、それに従うしかないんだから」

それにしても、お腹すいたな。何か買ってくればよかった。さつきは食べ物を買って行ったみたいだからね。本当、何やってるん

だろう。

あの後も、断片的にだが、この世界における美琴の記憶が戻りつつある。いや、正確には、この世界の美琴が本来持っていたはずの記憶を、美琴に定着させている。

「それに、部屋の中から見つかったこのリング。霧のリングみたいだけど、どうしてここにあるんだろう」

部屋の引き出しの中から、藍色の石がはめ込まれているリングを発見した。どうやら、この世界の美琴がイタリアで家光と仕事しているときにある旧家から発見されたものらしい。これ以外にも、19種類のリングがあった。

「大空の7属性のそれぞれの色がついているから、大空の7属性に関係するものだとは思っけど……。それよりも気になるのは、この残りの9つのリング。1つは、光属性のリングだってわかるけど、後のは一体。大空の7属性でもないみたいだし。まさか、大地の7属性？……」

自分にそんなわけないといいきかせて、ご飯も食べずに床についた。

標的2 門外顧問（後書き）

勘の言い方はもうすでにお気づきでしょうが、はい、ネタばれしています。

私の方からは直接はいいません。気づく方は気づいています。

最後の方は「くまさか・・・だった」と書かれているところがありますが、何が入るかわかりますか？ わかりますよね。

標的3 転校生、来る！（前書き）

今回から、後書き部分に登場人物たちの会話が入ります。その内、前書きにも入れてみたいです。

標的3 転校生、来る！

ターゲット
標的3 「転校生、来る！」

え？ なに？ 上の空白。 どんだけめんどくさがりなの？ っ
てい
うか、 下もかよ。

「ん、んー。ふわぁ」

みっともない声を上げながら、午前6時に起床した。今日は転入初日。どうあっても遅れるわけにはいかないからだ。

「ねむい。まだ寝てて平気かな」

そんなわけではない。

「……さて、起きますか」

ようやく、ベッドから起きて、朝ご飯を作ろうとキッチンへ向かったが、この時美琴は気づいていなかった。自分への危険が迫っていることに。

「とと。その前に、髪整えなくちゃ」

危険回避。

「よし、完成」

どういうわけか、ポニーテールにした。いつもは常に、ロングのストレートヘアだったのに。作者の趣味ではない。

「さてと、朝ご飯、朝ご飯」

うかれながら、冷蔵庫に手をかけて、扉をあけはなしたその時、桜に危険が迫った！

「！！！！ あ、朝ご飯がない（TOT）」

危険襲来。これというのも、昨日自分が食材を買い忘れたためであり、決して他人のせいだとか、そういう細かいことはいいじゃんとかそういう問題ではない。

「仕方ない。少し早いけど、コンビニで朝ご飯でも買って食べながら学校にでも行くか」

食べ歩きは危ないので決して真似しないでね。

「あ、丁度ジャップとまんがタムきららが売ってる。読みながら行くか」

重ね重ね、食べ歩きと歩きながら本を読むのは危ないので、決して真似しないでね。

そうこうしているうちに、学校に着いてしまった。現在時刻は、午前7時。この学校の始業時間は、午前8時半のため、どう考えても早すぎる時間帯だ。さすがにこの時間には誰もいまいと思って、辺りを見回していると、1人の少年が走って学校に入って行った。

「こんな時間から学校来てるんだ。朝練かな？」

ちなみに今日の彼女の朝ご飯は、肉まん3つにタイ焼き4個に、イ

チゴ牛乳1本である。彼女曰く、いくら食べても太らないらしい。

- ツナSide -

「起きろ、ダメツナ」

げしっ。

「いてっ！ なにすんだよ、リボーン！」

「お前が起きねえからだ。そんなことより、早くしねえと、学校遅刻するぞ」

リボーンが時計を見せながら、俺にそう言った。えーと？ 今の時間、午前8時。・・・は？

「8時じい！？ ま、まずいよ。遅刻しちゃうよ」

「なら、死ぬ気で走れ」

「え？ や、やめろよりボーン」

「イツツ、死ぬ気タイム」

スガンという音と同時に、ツナの頭に死ぬ気弾が撃たれた。

「復活！。^{リ・ボーン}死ぬ気で学校に行く！ うおおおおおおお！」

死ぬ気になったら、防御力も極端に上がるらしく、1tのトラックに撥ねられても無傷でいられるほど。

「頑張れよ」

「あ、10代目。おはようござい・・・」

獄寺の言葉をスルーして、学校に向かって全速力で爆走するツナ。

「さ、さすがつす、10代目！　こんな朝早くからしかも裸で修行してるんすね。さすが10代目！　俺もお供します！」

もはやわけがわからない。

並中に到着。

皆に裸のところをみられながら、獄寺にブレザーを貸してもらい、リボンがいるであろう消火栓のもとへ向かった。

- 美琴 Side -

「何か、空白が多くなってきたくない？」

気のせいです。いや、気のせいだと思ってください。そうじゃないと、ないちゃいます。

「それにしても、自己紹介か。何言えはいんだろう」

- ツナ Side -

「おす。ツナ、獄寺」

ツナと獄寺が教室に入ると、1人の少年が挨拶をしてきた。

「ああ、山本。おはよう」

「・・・」

「そういえば、今日転校生が来るらしいぜ」

「転校生？」

「ああ。何でも、帰国子女だとか、すごくカッコイイだとか。そこらへんで噂になってるぜ」

さっきから教室が騒がしいのはそのためだったのか。

「おはよう、ツナ君」

「あ、おはよう。京子ちゃん」

今日も可愛いな、京子ちゃん。本当に太陽みたいな笑顔だ。そんな風にツナがデレデレしていると、京子が話しかけてきた。

「ねえツナ君。転校生ってどんな子だろうね」

「え？ うーん。皆は男とか女とか言ってるけど、俺はどっちでもいいかな」

「うおーい。全員席に着けー」

全員が自分の席に着いたことを確認すると、若い先生は切りだした。「既に知っているものもあるかもしれないが、転校生がいる。入れ」

「は、はい」

あれ？ あの子、昨日俺を助けてくれた子だ。へえ、転校生だったんだ。

「自己紹介」

「あ、はい。えーと、転校生の本城美琴です。よろしく願いします」

「よーし、本城の席は、山本の隣だ」

「はい」

な、なんとか自己紹介を終えたけど、1番前に座っていた獄寺に何故か睨まれた！

わき目も振らずに、一直線に山本の隣の席に向かって歩いて、着いたら、座った。

「・・・ねえ」

「ん？ 俺か？」

「この教室に、沢田 綱吉って子いる？」

昼休み

- ツナSide -

「なあ、ツナ。今日の転校生だけだよ、お前の知り合いじゃねえの？」

「何で？」

「だって、お前の事知ってるような感じだったぜ？ 朝、あの後俺にお前がうちのクラスにいるか聞かれたしな」

「にしてもあいつ、いけすかない野郎ですね」

獄寺君だけ何か論点のずれた話をしてるし。でも、本城美琴、か。うーん。でも、確かに知ってるような気はするんだけどな。でも、どこであつたんだろう。

- 美琴 Side -

「ふう、やっと質問地獄から抜け出せた」

それにしてもまさか、ツナと同じクラスになるなんてね。何かの陰謀を感じるな。でもま、良かったと言っちゃ良かったの力ナ？

そう安堵していると、ケータイが鳴っていることに気が付いた。校則によりケータイは禁止されているため、トイレへ。

「はい、本城です」

「ああ、美琴ちゃん？」

「叔父さん。どうかしたんですか？」

「いやあね。もうそろそろ帰ろうかな、と思ってね」

「そうしてあげてください。奈々さん喜びますよ」

「戻った時にはよろしくな」

「はい」

ケータイを切って、トイレから出て教室に向かって歩き始めたら、不意に後ろから声をかけられた。

標的3 転校生、来る！（後書き）

美琴「え？ なに？ この終わり方」

京子「いかにも伏線ありますみたいな終わり方だね」

美琴「っていうかこれ、ここで終わって大丈夫なのか？ 伏線、結構あるけど」

ツナ「何言ってるの？ 2人とも」

美琴「特に次話のサブタイとか」

ツナ「それは俺たちが考えることじゃないと思う」

美琴「でも、私たちも頑張らないと、物語途中で終了なんてことも」

リボ「死ぬ気で頑張ればいいだけだろ」

ツナ「リボーン、なに勝手なこといつてるんだよ」

リボ「とりあえず、続きがあるかは次をみてからだな」

？ 続く・・・？

あ、本編は続きます

標的4 家庭教師（前書き）

美琴：なんだかな。もうわけがわかんないよ。

ツナ：何が？

京子：この小説の作者、あと2つ小説を作る気らしいよ。あ。でも、もう1つ出来てるから、あと1つかな？

美琴：はい、本編へレッツゴー！

標的4 家庭教師

ターゲット
標的4 家庭教師
かてきょう

不意に後ろから声をかけられた。

「あれ？ ツナじゃん。どうしたの？」

「あ、うん。悪いんだけど、俺と君って前に会ったことがあるような気がするんだけど・・・」

何だ。そんなことか。でも、覚えてもらえてないなんて、悲しいよね。でももう8年だからね。

この世界の美琴の記憶によると、丁度「ゆりかご」が発生する1か月前に、私とツナは親方さまの仲介で会ってるみたい。

「うん。覚えてないか。じゃあ、これでどう？ えいつ（むにゅ）」

「え？ んなー！」

「あはは。顔真っ赤だよ？ ツナ。これでもまだ思い出せない？」

「と、当然だろ!？」

「あはは。冗談、冗談。これを見れば思い出せる?」

スカートのポケットから、1枚の小汚い紙を取り出して、ツナに手渡した。

「これって、俺? と・・・本城さん? ・・・あ! お、思い出した! 美琴ちゃん?」

「この年でちゃんって、何か恥ずかしいな」

「じゃあ、改めてよろしくね。ツナ。じゃあね」

「あ、うん」

駆け足でその場を後にして、教室に戻って行った。

＼ツナSide＼

「やっと放課後ですね、10代目」

「つかれた」

「そうだな」

「あれ? ツナ。今帰り?」

「み、美琴？」

「ん？ 赤ん坊？」

ふと、山本の肩に、真黒なスーツに包まれた黄色のおしゃぶりを身につけている赤ん坊がいることに気が付いた。

「え？ ああ。リボン！ 何でいるんだよ！」

「ちやおつす。お前が本城美琴か？」

「あ、うん」

「俺はツナかてきよの家庭教師のリボンだ」

「へー。こんなに小さいのにすごいんだね」

「ガン！ 山本的思考ー！」

「じゃあ、私は用があるから」

「……………。俺も用があるから先に行くぞ」

「え？ あ、リボン！」

いっちゃった。なんなんだ？ いきなり現れたと思ったら突然何も言わずに消えて。

「どうしたんでしょうね、リボンさん」

「さあ」

「俺たちも帰ろうぜ」

「あ、うん」

く美琴Sideく

「ふう〜。今日も着かれた〜」

なんだか、今日はすごくつかれた〜。

「・・・」

「・・・」

「・・・。よし、なんとか撒けたな」

あの気配は、リボン。何で私をつけてたんだろう。

「ツナSide」

「おい、ツナ」

「うわっ！ リボーン！？ どうしたんだよ」

「あの本城美琴って何者なんだ？」

「え？ ああ、俺の従姉妹だよ」

「お前の従姉妹？」

「うん。でも、どうして？」

「俺がつけてるのに気が付いて、上手く撒きやがった」

「なあー！ あ、あとをつけてたのー！？」

「何者なんだ？ あいつは。ただ者じゃねえな」

とあるビルの上から、ツナとリボーンを見つめる1つの人影があった。

「やっぱり後をつけてたのはリボーンだったのか。マズイな。何かされるんだろうな」

「！」

「ん？ どうしたんだよ、リボーン」

「殺気だ」

「さ、殺気？ ぶ、物騒なことを言っなよ、リボーン」

「消えたか。いや、気のせいだったのか？」

「……………。あぶねー。気づかれたー」

「ツナ、これからみっちりと勉強するからな」

「い、いやだー！」

しかし、とてつもない闇が動いていることはこの時、美琴を除いて、誰も知る由がなかった。

「????Side」

「……親方さま、これを渡せばいいんですね？」

「ああ、頼んだぞ」

「はい」

「……………」

「……。行つたか」

「あれ、本物なんですか？」

「いや？ 本物は既に……が持つてる。お前は……の護衛を頼みたい。だが、俺と一緒に日本に飛んでもらうぞ」

「はい」

「ツナSide」

「つ、疲れた」

「仕方ねえな。今日はここまでにしてやる」

「ほ、本当？ よかった」

「今日だけだぞ」

「
ガ
ー
ン
」

標的 4 家庭教師（後書き）

リボ子「なめないで」

ツナ「んなー！ リボ子登場したー！」

リボ子「ばおー」

ツナ「どっちかにまとめろよ！」

リボ子「老子「なめパオ」

ツナ「もはやわけわかんねー！」

？リボ子老子とツナの今後はいかに？

次回から、とうとう「ハーフボンゴレリング」登場か？

因みに、当分の間オリジナルストーリーを軸にして進めていきますが、原作ストーリーが入る場合もあります。

誤字がありましたので、訂正しました。富？飛。誤字や脱字があったら、遠慮なく言ってください。

標的5 ボンゴレリング、来る！（前書き）

原作＋オリジナルです。

前話からこれって・・・つながりがない気が。

標的5 ボンゴレリング、来る！

くくくくSide

とあるビルの屋上で、金属と金属がぶつかり合うような音が響いていた。

「？おおおい。てめえ、何で日本に来たあ。ゲロツちまわねえと、3枚におろすぞお」

「お前にこたえる義務はない」

「なら死ねやあ」

白髪のロン毛は、更にスピードを上げ、少年に切りかかっていった。

「くっ」

ロン毛の刀から小型の爆弾のようなものが出てきて、少年に向かって飛んで行った。

「うわっ！」

「？おおおい。弱ええぞおお」

「く、くそ。こんなところでやられるわけには。あっ」

少年は、ポケットから落ちそうになった写真を急いで拾い上げた。
そこには、家光・奈々と一緒にツナが映っていた。

ターゲット
標的5 ボンゴレリング、来る！

く美琴Sideく

話しは遡って、数日前

ある日の放課後、美琴は授業が終わって家に戻っていた。

「ふう。今日も疲れたく」

カチャッ

！ 殺気！

咄嗟に、腰につけている銃に手を伸ばした。

「誰だ！」

「ふっ。この殺気に気が付くとはさすがだな、本城美琴」

「なっ。リ、リボーン！」

「それより、お前に聞きたいことがある」

「なぜ、俺の事を知っている」

「え？ ああ。なぜ、最強の赤ん坊アルコバレーノについて知っているか
てこと？」

「それもだが、このおしゃぶりにしてもだ。お前は一体何者だ？」

そのリボーンの問いかけに対して、リボーンらしくないと少しながら思った。

更に数日前、美琴はリボーンが最強の赤ん坊アルコバレーノの1人であるというこ

とを知っていることをすっかりリボンにバラしてしまったのだ。

「何者って、私は、ツナの親戚なだけだけど？」

「・・・。なら、そういうことにしておくぞ」

「そう。ありがとう」

く話しは戻って、次の日、日曜日

「にしても、清々しい日っすね、10代目」

「そうだね」

「なあ、どっかに遊びに行こうぜ」

「え？ でも」

「いって。どうせ、課題の提出だけだろ？ それに、お前の親父さんが帰ってくるんだ。別にいいじゃねえか」

どういう理屈なんだろう。

朝に山本・獄寺君・美琴にこの親父が帰ってくるってことを話してからはずっとこの調子だ。

「私は、用事があるからちょっと遅れるけど、並盛ショッピングモールだよね?」

「おう」

「じゃ」

何故か知らないけど、美琴は朝っぱらから家にいて母さんの料理の手伝いもしてたし。

「美琴ちゃん、それとって」

「はい、叔母さま」

「母さん、美琴、いつまで作ってるんだよ」

「いいじゃない。せつかく、お父さんが帰ってくるんですもの」

「そうそう」

「でもなあ」

父親から送られてきた手紙には、氷で閉ざされて、ペンギンがいる写真に、「もうすぐ帰る」とだけ書かれていた。

ぽわわ〜ん。回想終了。

「楽しいね、ツナ君」

「あ、うん」

やった〜、京子ちゃんも来てくれた。

「アホどもは呼ぶなっていったのに」

「はひ！ 誰がアホですか、誰が！」

「あれ？ ランボ君がいないよ？」

ええ？ ランボが！？ まったく、京子ちゃんを心配させるなんて、なんてやつだ。
と思いながら、辺りを見回していると、ペットショップのゲージの中にランボはいた。

「確かに違和感無いけどさー！」

「困るよ、きみい」

「すみません」

あゝ、京子ちゃんの前で格好悪い。

「いいか、ランボ。もうこれからは・・・」

「ツナ、目ん玉魚雷発射」

目の前にあったランジェリーショップからブラジャーを持ってきて、そんなことをランボはいつていた。

「もうゆるして下さい！ ランボさま！」

一行は、ショッピングモールを抜けて、休憩スペースまで歩いたところ、ランボがのどが乾いたとうるさいので、休憩をとることにした。

「はー、疲れたー」

「お疲れ様、ツナ君」

「あ、ありがとう。京子ちゃん」

「よかった」

「え？ 何が？」

「ツナ君たちが、黒曜ランドに乗り込んでいったって聞いて、もっと怖い人になっちゃうんじゃないかと思ってたんだ。でも、変わってなくてよかった」

ええー！ そ、そんなこと心配してたんだ。でも、心配してくれてたんだ。嬉しい。

「ねえ、ツナ君」

ん？ なに？ 京子ちゃん。

「何の音だろう」

「え？」

「???? Side」

すると、ショッピングセンターの看板付近でドオオンという、爆発音が聞こえた。

「げほ。な、なに？」

「?おおおおい。何だあ? 野次馬がこんなにゾロゾロとお」

「き、君。大丈夫？」

ロン毛に吹っ飛ばされてきた子のもとに急いで駆けよって行った。

「す、すみません。沢田殿。つけられてしまいました」

え? 知り合いだったけ? あ、頭にあるのって、死ぬ気の炎?

「ん？ 何であいつがここにいるんだ？」

「沢田殿、こちらへ」

少年は、ツナの手をとって、物陰へと連れて行った。

「これを」

「なに？ これ」

「なにかはリボーンさん達が知ってます」

「おい、女子供は避難するぞ」

「あ、リボーンくん」

「？おおおい。そういうことかあ。だったら、黙って見てられねえなあ。んでえ？ 誰だあ？ そいつはあ」

しまった！ 奴は、沢田殿を知らなかったのか。ここはやり過ぎすべきだった。

「おい、そのお方に手をあげてみる。ただじゃおかねえぞ」

「そういつこった」

「なんだあ？ お前らあ。死にてえのか？」

「ありや剣だろ？ 俺から行くぜ」

そういうと、山本は手に持っていた”山本のバット”を変形させて、ロン毛の男に向かって行った。

ギイーン。

剣と剣がぶつかり合って、そういつた音が聞こえてきた。

「？おおおい。てめえの太刀筋、剣技を取得してねえなあ？」

「だったら、どうだってんだよ」

「ぬるいぞお」

「くっ。！」

男の剣から、爆薬が放たれ、その場で爆発した。

くツナSideく

「山本！　く。喰らえ！」

「遅え」

ドサッ。という音が同時に聞こえてきた。

「山本！　獄寺君！」

ぼさっ。

ツナの頭の上に、27と甲に書かれた手袋が落ちてきた。

「こ、これって！」

「茹だるような夏の日もこれをつけとけ」

「り、リボン！」

「行くぞ」

スガガン。という音と同時に、ツナに死ぬ気弾が撃ち込まれた。

「リ・ボーン復活！　ロン毛、死ぬ気でお前に勝つ！」

「？おおおい。なんてこった。グローブのエンブレムに、その額の炎。そうかあ、お前が聞いた日本の。なら、なおさら渡すわけにはいかなえなあ」

それから5分間の死闘が繰り広げられた。

「あ、ああ」

シュウウウ。と、死ぬ気状態がとけた。

「これで終わりだあ！」

「待て。子ども相手にそんな本気を出して恥ずかしくないのか、スヘルビS・スクアーロ」

「何だあ？　てめえは」

「み、美琴？」

「どうしてもやるってんなら、私が相手になるよ?」

腰につけていた、棒を取り出して変形させる。

「(・・・。分が悪い)ここは一旦・・・引くわけねえぞお!」

「痛たたたた」

「止める!」

ボン! 剣から爆薬を出して、煙幕を作った。

「これは返してもらっぜえ」

「ああ、ボンゴレリングが」

「ボンゴレリング?」

振り返った時、もうロン毛はいなかった。

? 続く。

標的5 ボンゴレリング、来る！（後書き）

美琴「何か、長くない？」

リボ「24日に間に合わなかったようだな」

美琴「裏話なんてどうでもいいから」

リボ「ちなみに、次回は番外編を予定してるぞ」

美琴「いよいよ、スクアーロが登場したね」

ツナ「ということは、次々回からいよいよヴァリアー編に入ってるってこと？」

リボ「そうなるな」

ツナ「なぜかしらないけど、ヴァリアー編ってすごい人気で、未だにこういった二次創作小説の題材にもされるんだよな」

美琴「この小説もそうだからね」

リボ「サブタイの割には、ボンゴレリングの登場シーンが少なかったぞ」

美琴「前話の謎のリングの正体もわかってないし」

リボ「新しいキャラも出たな」

美琴「そっだね」

？続きます

標的6 ハーフボンゴレリング

ターゲット

標的6 ハーフボンゴレリング

「ああ。ボンゴレリングが」

「ボンゴレリング？」

「遅かったか」

「ディーノさん!？」

「げっ。ディーノ」

「お、美琴もいたのか」

この男は、キャバッローネファミリー10代目ボスの、ディーノ。部下がいる前じゃないと力が出せない完全なボス体質。

「それより、バジルを病院に運ぶぞ。ロマーリオ!」

「おう」

「ボス、サツがきましたぜ」

「よし、行くぞ。廃病院を手配した」

〈中山医院〉

「どうだ？ ロマーリオ」

「気を失ってるだけだ。よく鍛えられてるぜ」

「何なの？ この子。この子もボンゴレの人間？」

「ちげーぞ。こいつは、ボンゴレの人間じゃない」

「ちなみに、さっきのロン毛はボンゴレの人間だよ？ ツナ」

「んー！ お、俺ボンゴレの人間に殺されかけたのー！？」

「とりあえず、こいつは仲間だぞ」

「ボンゴレが敵で、そうじゃない人が味方って。って、俺に味方と敵とかいないし」

「そうは言ってられない状況だぞ」

「ああ。あのリングが動き出したからな」

「あのリング？」

あのリングとは、ボンゴレファミリーに初代の時代から長く受け継がれてきた、リング。ボンゴレリングのことである。

「このリングは正式にはハーフボンゴレリングって言ってね、いわくつきなんだ」

「いわくつき？ 値段がつけられないとか？」

「確かに、価値のつけられない点ではそうかもしれないが」

「あのリングのために、どれだけの血が流れてきたかわからないんだ」

「んなー！ よ、よかったー。ロン毛の人持って行ってくれて」

そういう風にツナが安心しきっているところに、それを一気に打ち破るように、ディーノが口を開いた。

「それがなあ、ツナ」

「？」

「ここにあるんだ。ボンゴレリング」

リボーンがピクツと動いたのがわかった。

「ええ！？」

「ホラ」

「しかも何で美琴が持ってたのー!？」

「それはホラ、私が頼まれたからで」

「あー、そつだ。俺、宿題があるから、家帰んなくちゃ」

ツナは逃げるように帰って行つた。
まったく。ツナの奴・・・。

「逃げられると思つてんのか？ あいつ」

「どうだろうね」

「バジルは囧だったんだな」

「恐らく、本人にも伝えられていないと思つよ。私ならそつする」

「あの人もそうとうきつい決断だったと思つぜ」

「そついえば、親方さまはもう来てるの?」

「ああ。俺と一緒に帰つて来たぜ」

「そうか。帰って来たのか。帰るぞ、美琴」

「え？ あ、うん」

リボーンSide

帰って来たか。家光。お前がこのタイミングで息子にリングを託すとは、向こうでとんでもねーことがおこってんのだな

「ありゃー。家光叔父さんすごい寝相だね」

「そうだな」

「さーて。私は家に帰るか」

標的6 ハーフボングレリング（後書き）

いかがだったでしょうか。次回から、本格的にヴァリアー編に入ります。

パオリボ「ぱおーん。なめないで」

美 琴「リボーン。何言ってるの？」

パオリボ「ちょっと工夫してみたぞ」

ツ ナ「だから、どっちかにまとめろよ」

美 琴「いよいよ、原作に近くなってきたね」

リボーン「そうだな。気になるところだな」

ツ ナ「なんなんだよ。いつの間にか、元に戻ってるし」

リボパオ「こっちの方がいいのか？」

美 琴「どっちでもいいけど」

？わけがわからないので、次回に続く。

標的7 雨と嵐の守護者

ターゲット

標的7 雨と嵐の守護者

リボーンSide

帰って来たか、家光。今この時期に息子にボンゴレリングを託すとは、向こうでとんでもないことがおこってたな。

美琴Side

「光のボンゴレリング、か」

「おーす、美琴。朝飯でも釣りに行かねーか？」

「え？ い、いい。・・・あ、待つて。私も行きます。例のアレ^{ボンゴレリング}を届けに行くんですよ？」

「ああ。お前も行くか？」

「はい」

・
・
・
・
・

「さて、次で最後だな」

「あう。私は苦手です。あの人は」

「まあ、そういうな。さあ、行くぞ」

「は、はい」

・
・
・
・
・

「あゝ、緊張したー」

「頑張ったじゃねーか。後は、ツナに大空のボンゴレリングを渡せ」

「ばいだけだ」

「そっちはお任せします。私は既にこうして光のリングは持つてますから」

「そうか」

「では、おやすみなさい」

「おう」

この時家光は、美琴に大きな炎を感じた。今まで見たことのないようなとてつもない大きな炎を。そう最強の赤ん坊アルコバレーノと同じような大きな炎を。

「ツナSide」

「おい、起きろ。ツナ！」

げしつ。と、リボーンの蹴りがツナのお腹にクリティカルヒットした。

「いてっ！」

「何すんだよ！ リボーン！」

「高い高い」

「ぐびゃっ！ うわぁ〜ん！」

「おっと、スマンな。ホラ、ケガが早く治る薬だぞー」

「なっ！」

ツナは部屋のドアを思い切り開け放ち、ドタドタと階段を駆け下りていった。

「と、父さん！ ランボに酒飲ますなよ！」

「おう、ツナ。早かったなー。父さん帰ってきててもツナ寝てるからブロークンハートだったぞ」

「と、父さんが帰ってきてからずっと寝てるからだろー！？」

「それより学校はどうだ？ 算数だっけ？ あれ笑っちゃうだろ？」

必死に会話を会わせようとしてるー！　そして、ちょっと会話がズレてるー！？

「そうだ、ツナ。父さん今回はなー、すごくためになることたくさんメモしてきたぞー」

「い、いいよ。父さんの話なんて、どうせロクなものじゃないだろ！？」

「なんだーツナ？ ネットレスなんかしちゃって、色気ついてんな

「

「んなー！　これって、ボンゴレリングとかいう恐ろしいーやつー
！」

「どうした？　ツナー。何か悩み事があるなら、父さんに話してみ
る」

「いいよ。どうせ父さんに話したところで無駄なんだから」

それだけ言い放ち、ツナはリボーンに事情を聞くべく、部屋に向か
って猛ダッシュした。

「リボーン！　これはいったいどういうことだよ」

「？　何の話だ？」

「このボンゴレリングのことだよ」

「それは俺じゃねーぞ。それに、アイツから何も聞いてねーのか？」

「アイツって・・・？ あ、それよりも、バジル君の様子を見に行かないと。リボーン、帰ってきたら、事情を説明しろよ！」

ツナは家を飛び出して、中山医院へ向かって走り出した。

「どうだー、友よ。あれが俺のせがれだぜ」

「知ってるぞ。俺が1年半面倒を見てきたんだからな。それよりも、自分の正体をバラさねーのか？」

「んー。タイミング逃しちゃったしなー。自分で配るもん配っちゃまつたし。奈ター、朝飯ー」

〈中山医院〉

「あ、10代目！ おはようございますー！」

「おう、ツナ。おはよう」

「あ、獄寺君！ 山本！」

「それよりさ、コレなんだか知ってるか？ 朝起きたら、ポストの中に入れてさ」

「あ、自分もそうです」

「んなー！ それって、ボンゴレリング！」

山本と獄寺が取り出した、変な形をしているリングをみて、ツナはボンゴレリングだとすぐに気がついた。

「お、やっぱり知ってんのか」

「山本のは雨のリングだな。獄寺のは嵐のリングだ」

「ん？ そうなのか？」

「雨とか嵐とか、天気みたいだね」

「そ、そういえば」

「ボンゴリングは、ツナの持つ大空のリング、獄寺の持つ嵐のリング、山本の持つ雨のリングと、晴のリング、雲のリング、雷のリング、霧のリングとそして、光のリングの8種類があるんだ。それぞれのリングには、初代守護者の特徴が刻まれてるっていわれてるんだ」

「わりいけど、俺は野球やるから指輪はつけらんねーな」

「そうだよ、それが正しいよ！ そんなの持ってたら、昨日のロン毛がまた襲ってくんだよー！」

「「！！！」」

ツナのその言葉を聞いた瞬間、山本と獄寺の表情が一変した。

「そう、なのか。これ、俺のだよな。貰ってくわ」

「10代目、俺も失礼します」

「ええ!？」

「やるなー、ツナ。2人を本気にさせるなんて」

「デイ、ディーノさん!？ お、俺は別に本気になんて」

「それよりツナ、今から守護者がもう1人来るよ。晴の守護者がね」

「え？」

「パオパオ老子ー!」

「俺に修行をつけてくれるというのは本当かー!？」

？次回に続く

標的7 雨と嵐の守護者（後書き）

ハ ル「ハルのハルハルインタビュー！」

美 琴「ハルは今のところ、セリフが1行ぐらいしかないけど？」

ハ ル「はひっ！ そうでした！ どうしましょう」

リボーン「話し方でわかるからいいだろ」

ツ ナ「おい、ハル！ 本文でやるんだから、ここでやらなくてもいいだろ！」

ハ ル「はひっ？ そうだったんですか！？」

リボーン「そんなわけで、今回はこの企画をやるからな」

？マジでやる・・・かも。

Aパート標的8 晴の守護者／Bパート ハルのハルハルインタビューでんじゅ

Aパート

ターゲット
標的8 晴の守護者

前回の後書に「ハルのハルハルインタビュー」をやると書きましたので、やろうと思います。所謂Bパートで。

「パオパオ老子ー！ 俺に修行をつけてくれるというのは本当かー！」

「ああ。本当だぞ。但し、修行は俺がつけるわけじゃねえーぞ」

「え？」

その時、リボーンのおしゃぶりが光出した。アルコバレーノのおしゃぶりが光るということは、近くに別のアルコバレーノがいるというあかしである。

「おしゃぶりが光った」

「お待たせ。リボーン」

「ん？ 何でお前がいんだ？」

「あれ？」？大方理解した。

「・・・」

「あ、うん。アレを連れて来たんだ」

美琴が後ろを指差した。

「待たせたな！ コラ！」

「こ、コロネロ！」

そこにいたのは、アルコバレーノコロネロだった。

「おせーぞ」

「お前が勝手に場所を変えるからだろ！ コラ！」

リボーンとコロネロがお互いに頭突きを始め、部屋にはゴッ、ゴッ、ゴッ、という音が響く。

「まあ、いいんじゃない？ コロネロ」

「リボーン、今回はこいつに免じて特別に許してやるぜ！ コラ！」

「何なのだ？ この赤ん坊は」

「おい、リボーン。俺の修行を受ける笹川了平っていうのはどいつだ？」

「極限に俺だー！」

確かに笹川先輩って、晴っぱいよね。ドッピーカンだし。

「ふむ」

コロネロがライフルを使って、了平の体を調べ始めた。

「こいつ、本当にそんなに弱いのか？」

「ああ。選ばれたファミリーの中では最弱の部類に入るぞ」

「ぶくくく」

「こ、コロネロが笑った・・・」

「おいっ！ 俺の修行についてこられたら、他の7人を追い抜くなんて簡単だからな。ついてこい！」

「（まあ、美琴は無理だろうがな。あいつに修行して勝てる奴なんて今の時代にはいねーかもしれねーな）」

「おうっ！ 師匠！」

？とりあえず、次話に続く。

Bパート ハルのハルハルインタビューでんじやらす

ハル「ハルのハルハルインタビューでんじやらす！ 第1回は第8話のBパートですっ！」

リボーン「何でBパートなんだ？」

ハ　ル「スペースがないからだそうです」

リボーン「早く始めろ」

ハ　ル「は、はい。えーと。今回のゲストは、西城美琴さんです！」

美　琴「わ、私がゲスト・・・？」

リボーン「どうした？」

美　琴「う、うん。ちょっと恥ずかしいかな」

ハ　ル「恥ずかしがる必要なんてありません！」

美　琴「う、うん」

ハ　ル「では、1つ目の質問です！　生年月日と血液型を教えてください」

美　琴「7月15日、O型」

ハ　ル「得意科目と不得意科目を」

美　琴「え？　うーん。一応、全部そつなくこなせるけど」

リボーン「料理の腕前も天下一品だぞ」

ハ　ル「はひっ！？　そうなんですか！？　今度ハルにもお料理を教えてください！」

美 琴「う、うん」

ハ ル「では、尊敬する人を教えてください」

美 琴「尊敬する人、か。うゝん。家光叔父さんかな」

リボーン「珍しいな」

ハ ル「はひっ？ そうなんですか？」

美 琴「あ、家光叔父さんっていうのは、ツナのお父さんで・・・」

ハ ル「はひっ！？ 美琴さん、ツナさんのお父さんに会ったことあるんですか！？」

リボーン「会ったことがあるどころか、つい最近まで一緒に暮らしてたんだぞ」

ハ ル「はひゝ。許されざる恋ですね」

美 琴「ねえ、ハル壊れてきてない？」

リボーン「心配ねえぞ。何時も通りだ」

美 琴「そ、そうなの？」

ハ ル「はひっ！ トリップしていました。ああ！ 気づいたら残り少ないです！」

リボーン「今回はここまでだな」

ハル「はひゝ。では、ハルのハルハルインタビューでんじゃらす！ また次回。シーユー、アツゲインです！」

リボーン「じゃあな。次があつたらまた会おうぜ」

？本編は第9話に続く。ハルのハルハルインタビューでんじゃらすは不定期。

夜 空「出張！」

美 琴「誰？」

リボーン「同じ作者の別の作品から来た、ボンゴレ闇の守護者だぞ」

夜 空「本編の方であまり出番がないので、こっちに来ました」

美 琴「は、はあ。でも、こっちに来ててもそんなに変わんないと思うけど。本編に出られないことにはかわりないんだし」

夜 空「いいんです！ 最近は、向こうの方は後書も縮小されてきてますし」

リボーン「要するに、『向こうの方で、本編にも後書にも出番があまりないから、こっちに出させる』っていうことだぞ」

美 琴「ぶっちゃけすぎ」

夜 空「それにしても、貴女がこっちの世界の光の守護者ですか。レイとは似ても似つかないね」

リボーン「お楽しみのところ悪いが、もうそろそろ時間だぞ」

美 琴「では、また次回」

夜 空「ええ！ まだ話し足りないのに！」

？夜空は居座るのか！？

Aパート ハルのハルハルインタビューでんじゅらす Bパート 標的9 修行

今回は、

ハルのハルハルインタビュー でんじゅらす！

がAパート

標的9がBパートですっ！

第2回 ハルのハルハルインタビュー でんじやらす

ハ ル「第2回ですっ！ 祝！ 2回連続！」

リボーン「大丈夫か？ この作者」

とりあえず、短いので読んでやってください。

ハ ル「さて、今回のゲストは、前回に引き続き西城美琴さんです！」

美 琴「え？ また？」

ハ ル「はいっ！」

リボーン「オリジナルキャラが今のところお前しかいねえからな」

美 琴「ああ、なるほど。でも、それならやらなければいいだけの気が」

そこは、いつちやいけないんだよ。

美 琴「で？ なにを聞きたいの？ ハル」

ハ ル「はいっ！ 実は、あれから考えたんですが、苦手なものと聞いてませんでした」

美 琴「苦手なものか。そうだな。とりあえず、特にはないかな」

ハ ル「はひい、そうですか。では、身長は」

美 琴「え？ えと、確か・・・、157だったと思うけど」

リボン「おい、もうそろそろ時間がねえぞ」

ハ ル「はひっ！？ もうですか！？ それでは、最後に、得意料理を教えてください！」

美 琴「うん。トムヤムクンかな」

ハ　ル「はひっ！？　すごいです！」

リボーン「時間切れだぞ」

ハ　ル「シーユアッゲインです。まだ話し足りないです」

リボーン「じゃあな。次はあるかどうかマジでわかんねえからな」

？Bパートに入ります。

ターゲット
標的9　修行開始

「ツッナ」

美琴は思い切り、ツナに抱きついた。

「どうしたの？　ツナ」

「う、うん」

「おい、ボーっとしてる場合じゃねえぞ。お前も修行を始めるんだ

「からな」

「え、でも、獄寺君や山本は？」

「あの2人なら心配はないよ。ピッタリかてきよーの家庭教師を見つけるはずだから」

「行くぞ、ツナ」

リボーンは、ツナの額に死ぬ気弾を撃ち込んだ。

「リ・ボーン復活！ 死ぬ気で修行をする！」

ツナはどこかに走っていつてしまった。

「さて、私たちも行こう。リボーン。ディーノは彼のところでしょ？」

「ああ。手のつけらんねー暴れん坊だつてきいてるぜ。お前も襲われたらしいな」

「あはは。ディーノなら、大丈夫でしょ」

「いつてくれるじゃねーか」

「行くぞ」

「あ、うん」

く少し前く

「さて、確か応接室はこっちだったと思ったけど・・・」

美琴は、ボンゴレリングをある人物に届けるために、並中の応接室に来ている。

「あ、あつた。いるかな？」

静かに応接室の扉を開けて、中に入っていた。

「・・・。いた。本当に応接室で寝てるよ・・・。」

さて、バレないようにリングをおいて早めにおいとましないとな。
かみ殺されるから。

しかし、時はすでに遅かった。

「ねえ、応接室^{こくご}で何やってるの？」

「あ、あれ？ 起きてる」

あ、そういえば、葉っぱの落ちる音でも目を覚ますっていったっけ。

「ん？ 君は。赤ん坊の知り合いかい？」

「赤ん坊って、リボーンのこと？ うん。知り合いだけど・・・。」

ここまでいって、しまったと思った。

「へえ、赤ん坊と知り合いなんだ。なら、強いよね？」

「・・・今は戦ってる場合じゃないんだけど」

「逃げるのかい？ 逃がさないけど」

何かイラつくのは私だけでしょうか。

「はあ。いいよ。わかった。相手したげる。但し、5分間だけね。それ以上はムリ」

「いいよ。それで。構えなよ」

「・・・」

スツット、雲雀はトンファーをかまえて、美琴にそういったため、美琴もトンファーをかまえた。

「どういつつもり？」

「そのまんま。これで十分だよ」

「へえ」

ビュツッと、トンファーで攻撃をしてきた。

「……。ねえ、当たらないの？ 雲雀。そんなものなんだ」

「……。ねえ、僕を本気にさせたいの？」

「それもいいけど、もう時間だからね。私からも一発！」

ドカッ。雲雀の懷にクリティカルヒットして、扉の所から、窓際まで吹っ飛んだ。

「じゃ」

ということがあったため、その後あってないが、なぜか恨まれていると思う美琴だった。

く並盛町北山く

シューくと、ツナの額の炎が消えた。

「ん？ って、なにこれー！」

なぜか崖につかまっていた。

「お前の超直感がここがいいと判断したんだぞ」

「いつとくけど、ここ下りきらなければ、お昼はなしだから」

「そんな！」

その後、10分かけて下りきったツナ。

「よし、修行続行だぞ」

リボーンは、再びツナに死ぬ気弾を撃った。

「死ぬ気で寝る！」

「そうそう。それが大事なんだ」

＼山本Side＼

「ん？ どうした、武」

「なあ、オヤジ。俺に剣の稽古つけてくんねーか？」

「・・・。いいぜ。こっちに来な」

「・・・山本、修行に入るのか。頑張つて」

〔獄寺Side〕

「ん？ 隼人じゃねーか。どうしたんだ？」

「な、なあ。俺を弟子にとってみねーか？」

「・・・。やなことだ。そういうことならお断りだぜ。帰った帰った」

「・・・獄寺・・・」

？いよいよ本格的に修行に入りますね。

ターゲット
標的10 「それぞれの修行」 に続く

夜 空「出張！」

・
・
・
・
・

夜 空「あれ？」

美 琴「また来たの？」

リボーン「お前、いい加減帰れ」

夜 空「暇なんだもん！」

リボーン「知るか」

美 琴「みんな心配してるんじゃないの？」

夜 空「私は、復讐者につかまっただってことになってるから、自分の間出番はないの！」

美 琴「次回に続く」

リボーン「んじゃまたな」

夜 空「ああ！ また終わらされた！」

標的10 それぞれの修行

ターゲット
標的10 それぞれの修行

山本Side

父親に、道場へ連れてこられた山本。かつて、自分と同じように友を助けるために始めた剣道、時雨蒼燕流を受け継いだ場所に。

「へー、こんなところに道場なんてあったんだな。オヤジが剣道するのは知ってたけどよ、今でも来たりしてんのか？」

「武、防具をつけな」

「おう」

山本は、父親が出してきた防具を、付け方を教わりながら、防具をつけ始めた。胴をつけたところで、父親はなにもせずに、ただ待っていることに気が付いた。

「あれ？ オヤジは、防具はつけねーのか？」

「父ちゃんはな、防具はいらねーんだ」

「ムリすんなよ、オヤジ」

「ムリしちやいねーさ。行くぞ、武！ 父ちゃんの剣道は、お前の野球と同じ、遊びじゃねーんだ！」

すさまじい気迫が、山本を襲った。今まで感じたことのない、普段は優しい父親から、すさまじいまでの殺気を感じた。

「！！」

「面！」

「ぐあっ！」

父親に面をうたれて、後ろに吹っ飛んだ山本。

「す、スゲーな。オヤジの気迫」

「当り前よ。お前が覚えようとしてんのは、このすさまじい気迫と一流の剣技を必要とし、才あるものが途絶えた時、消えるのも余儀ないとした人殺しの剣よ」

「ひ、人殺しって、大袈裟な」

「大袈裟じゃねーよ。その剣の名を、時雨蒼燕流」

時雨蒼燕流・・・？ 聞いたことねーな、そんな流派。

「わかったぜ、オヤジ。俺も本気で行くぜ」

山本の目つきが変わった。いつも、野球をやっている時の山本の目になった。

「・・・よしよし。ここまでは順調そうだな」

くツナSideく

「ツナ、早く登りやがれ！」

「む、ムリだよー!」

「ツナ、無理じゃないよ。ホラ、頑張って」

「ひ、他人事だと思って・・・」

しかし、その声援も空しく、ツナは崖からまっさかさまに川に落ちてしまった。

「へっぷし」

「大丈夫?」

「へ、平気だよ」

「嘘つくな」

げしっ。リボーンの容赦ない愛のツッコミがツナの鳩尾みぞおちにクリティカルヒットした。

「ツナさん！」

突然、女子の声がした。それも、かなり聞き覚えのあるような声が。

「は、ハル！？ な、何やってるんだよ！」

「た、助けてください！ 降りられなくなっちゃって」

仕方ないので、ハルを助けてあげた。

「な、なにやってるんだよ！（パンツ見えちゃったし）」

「ツ、ツナさんが修行をしてるって聞いて、差し入れを持って来ただんです」

2人して赤面しながらハルはツナに弁当を手渡し、ツナはハルから弁当を受け取った。

ス、スカートで来なきゃいいのに・・・。

「そっいえば、獄寺さんを見かけましたよ。1人で何やってるんで

しょうか」

「ええ！？ 獄寺君、1人なの！？」

「獄寺は、シャマルに断られたんだよ」

「っていつか、獄寺君の家庭教師^{かてきよー}って、Dr・シャマルだったの！
？」

「うん」

「うわわ、大変だ！ 早く行かないと！」

「え？ ツナ、自分の修行は？」

「そんなことより、獄寺君の方が大切だよ」

「全く。あんなこと言ってるけど？ リボーン」

「仕方ねーな。俺も心配だからな、行くぞ」

「うん」

美琴とリボーンは、ツナの後を追って、獄寺の近くまで来た。

「獄寺君！」

「待て」

そんなツナを止めたのは、Dr・シャルその人だった。

「Dr・シャル！　どうして獄寺君の修行を見てあげないんですか！？」

「あいつには見えてねーからだよ」

「え？」

（獄寺Side）

くそっ！　なんで出来ねーんだよ！　あの技が。

？ここから回想シーン

「なあなあ、Dr・シャマル。トライデント・モスキート俺にも教えてくれよ」

「髪型の次は、殺しの技まで真似しよーっていつのか？」

子供のころの獄寺は、すごく目がいきいきしているようだった。ど
ういう技を教えてくれるのかすごく期待していたようだ。

「たく。お前にやあ、これがピッタシだよ」

「爆弾じゃねーか。かつこ悪いの」

「バーカ。お前には中遠距離支援の渋さがわかってねーのか？」

「オラ、紙飛行機飛ばしてみな」

「撃ち落とすの？　ムリだね」

「見てろよ」

ビュッ。シャルは、火をつけたダイナマイトを紙飛行機に向かって投げつけた。

ドゴォーン。

「す、スゲー！」

く時は流れく

「見ろよ、シャル！ 名誉の負傷だぜ。ダイナマイト持って突っ込んで行ったら、あいつらビビって逃げてやがんの」

「隼人、お前に教えることはもう何もねえ」

「え？ おい、シャル。シャル！」

ぼわわわん。回想終了。

クソッ。一体どうやったら。

そんなことを考えていたら、獄寺の目の前で、1つのダイナマイトが爆発した。

ドサッ！

「ん？ あれ？」

「んなー！？ 父さん！？」

「（こりやまたえれーのが出てきたな）」

「なあ、小僧。若いうちは死ぬのは怖くねーかもしれないねえが、あんま無駄するものじゃねーぜ。お前が死んで悲しむものもいるんだ。それを忘れるなよ。工事現場のオッサンからの忠告だ」

「お、おい」

獄寺の声が届いていないフリをして、家光（？）は歩いて、どこかへ行ってしまった。

「獄寺君！」

「じ、10代目！ ま、まさか。自分を心配して？」

「う、うん」

「あ、ありがたき幸せです！」

「おい、隼人。お前に何が見えてなかったのかわかったか？」

「ああ。俺に見えてなかったのは、自分の命だ」

「来い。修行をつけてやる」

「これで獄寺は大丈夫かな？ ね、親方さま」

「ああ」

く了平Sideく

「なあ、師匠。こうして寝ているのが修行なのか？」

「ああ、そうだぜ。コラッ！」

「俺は極限に体を動かしたいぞ！」

「いいや。今はその必要はねーぜ。黙って寝てろ！ コラッ！」

「さすが、コロネロ。晴の守護者に大切なことがわかったか」

〈美琴 Side〉

「親方さま、至急お話したいことが」

「なんだ？」

「実は・・・」

「なに？」

「可能性はあります」

「しかし、そうなる」と

「それに、恐らく奴らももつそろそろであれに気が付く頃かと」

「バカな。早すぎる」

「・・・の超直感、かもしれませんよ」

「よし、わかった。今すぐイタリアへ飛ぶ。あとのことは任せたぞ」

「はい！」

「イタリア・ボンゴレ本部」

「XANXUS様。もつそろそろ、スクアーロがリングを持って帰ってくる頃かと」

「ああ？」

XANXUSと呼ばれた厳つい奴は、しかめっ面をしながら、仲間の方を向いた。

ターゲット
？標的11 晴と光に続く

標的10 それぞれの修行（後書き）

美 琴「あれ？ あの子はここにはいないんだ」

リボーン「帰ったんじゃないか？」

????「不不不。まだいますよ」

美 琴「いい加減に帰ったら？」

夜 空「出番がないので嫌です！」

作者注：もうそろそろ出番があるかも。

美 琴「ホラ」

夜 空「じゃあ、1話前になったら呼んで！」

リボーン「いい加減に帰れ。つか、時間がないからここまでだぞ」

美 琴「では、また次回」

標的11 晴と光

ターゲット
標的11 晴と光

イタリア

「?おおおおい! クソボス! 持ってきてやったぜ! ハーフ
ボンゴレリングを!」

「そこに置いてとつと失せろ。カスザメ」

「?おおおおい! クソボス! てめえ!」

「スクアーロ。ボスの前です。下がってください」

「ちっ」

ハーフボンゴレリングがどうやら、XANXUSのもとへ届けられたようだ。

く日本・並盛北山く

修行開始から3日目

「師匠！ いよいよ修行を始めるのだな！」

「そうだな！ コラ！ 細胞もいい具合に休めさせられたからな！」

「うおー！ 極限に元気いっぱいだー！」

「絶好調そうだな。了平。じゃあ、修行内容を説明するぜ！ コラ！ いいか。見てろよ！」

コロネロがライフルを巨大な岩に向けて、静かに佇んだ。

そして、カッと目を見開いて、

「今だぜ！ ショット！」

ズガガガン！ 巨大な岩が、一瞬で粉々になった。

「極限にすごいぞ！ 師匠！」

「さあ、了平もやってみろ！ コラ！」

「よし、師匠。ライフルを」

「これは俺のだぜ！ コラ！」

「な！ それなら俺はどうすればいいのだ！」

「決まってるぜ！ お前の拳で砕くんだ！」

「む、無理に決まっているであろう!」

当然の話である。大きさは平のおおよそ50倍ぐらいで、重さも2tを超えているであろう。

「わかっているぜ! だから、お前に俺の全てを伝授するぜ! コ
ラ!」

「ど、どういことだ!? 師匠!」

「行くぜ! ショット!」

「ぬおー!」

コロネロが平に向かって、特殊弾を撃った。

「ぬう。し、死ぬところだったぞ。師匠」

「だが、生きてるではないか！ コラ！」

「・・・何かをつかんだ気がするぞ」

「やってみる！ あの岩に向かって、決めてみるんだぜ！ コラ！」

「おう！
マキシマム・キャノン
極限太陽！」

了平は、巨大な岩に向かって、
マキシマム・キャノン
極限太陽を放った。

ドガーン！ 巨大な岩は、大きな音を立てて、崩れ落ちた。

「おお！ すごいぞ！ 師匠！」

「よし！ あとは仕上げだぞ！ コラ！」

「……ふむ。あとは了平の頑張り次第か」

だが、アルコバレーノの特殊弾には死の危険性もある。それを耐えた了平もすごいが、了平を認めたコロネロもなかなか。

アルコバレーノは特殊弾に、技の記憶を付加させて相手に伝えることができるのだ。

く並盛町北山く

「ふうく。……。あれ？ ツナ、やっと登れたんだ」

「うく。うん。体が軋むけどね」

「ありやりや。大丈夫？」

「うん。なんとかね」

「おい、あんまりツナを甘やかすなよ」

「わかったって。それより、今日から本格的な修行に入るんでしょ？」

「ああ。死ぬ気弾を使つての修行だぞ」

死ぬ気弾をつかつての修行、か。そういえば、レオンが一昨日死ぬ気弾を大量に作り出してたっけ。

「・・・バジル。君に代わって、私がツナの相手をする」

「ええ！？　大丈夫なんですか？　美琴殿。修行の方は」

「順調♪」

美琴は、全員にニカッと笑って見せた。

「さ、リボーン」

「ああ。行くぞ、ツナ」

「ええ、ちょっとまってよ」

「問答無用！」

スガガン！ リボーンが容赦なくツナに向かって死ぬ気弾を撃った。

「リ・ボーン復活！ 死ぬ気で美琴に勝つ！」

「やってみなよ」

美琴が不敵に笑った。まるで、こうなることを知っていたかのように。否、まるでこうなることを望んでいたかのように。

それから5分間の修行が続いた。

「……ここまで。私はもう行くから。バジル。後は頼んだよ」

「は、はい！」

〈美琴の家〉

「……こんなじゃダメだ。ツナも、私も。もっと強くなんなくちや。そのためには、やっぱり、リングの力を引き出すしか」

机の上においてある、19個のリングを見てそう呟いていた。リングの力……。それがまだこの時代にないということを知っているために、使えないでいたのだ。特に、霧系ステルスリングや霧系力モフラージュリングは、死ぬ気の炎を練りこんで使うから、どうしても炎が必要となるのだ。

「覚悟を炎に、か」

美琴は覚悟ができていた。というよりは、覚悟をしていると言った方が適切かもしれない。

すると、指につけていた霧系カモフラージュリングと霧系ステルスリングから藍色の炎が出た。

「これが死ぬ気の炎。でも」

なんで霧の炎？ そりゃ、霧系リングつけてるから当たり前かもしれないけど……。本来波動というのは1人につき1人のはずだからな。あ、でも。獄寺もD・スピードも2つ以上使えたっけ。

要するに美琴は2つ以上の波動が流れていることである。

「光と霧、か。他にも出せるのかな」

残り全ての大空の7属性のリングを試してみたら、全て出来たという。

「……もうわけが分かんないよ」

「なるほど、それがお前の言っていたリングか」

「そうだよ。リボーン。でもさ、勝手に人の家にあがらないでくれる？」

「鍵が開いていたぞ」

「嘘。リボーン？　ちゃんと閉めたんだから、開いてるわけないでしょ？」

「さすがだな。実際は、レオンがお前の家のカギになって開けたんだぞ」

「何でもありだね」

少し呆れがちにリボーンと話を進めていく美琴。

「そうか。家光は本国に飛んだか」

「うん。？世が心配だからね」

「ところで、さっきのリングのことだが」

「ああ。あれ？ あれは、イタリアから持ち帰ったものだよ」

「本国からか？」

「うん」

「で？ さっきの炎はなんだ？」

「どうやら、リングの炎をリボーンは見ていたようだ。」

「マズイ。マズイよマズイよ。この時代ではリングの炎はまだ発見されただけだから、知ってる人は少ないのに・・・。」

「う、うん。実はね、リングの炎何だ」

「リングの炎だと？」

「うん。まあ、それ以外のなにものでもないけどね」

「・・・。そうか。ところで、明日以降もツナの特訓に付き合ってもらっぞ」

「うん」

「イタリア」

「？おおおい。何か用か！ クソボス！ リングの礼なら貰うぜえ」

スクアーロは、XANXUSに呼ばれて来たらしい。が、

「がつ」

頭を掴まれて机に叩きつけられた。

「クソボス！ 何をしゃがる！」

そしてXANXUSはリングを外し、持ってきたハーフボンゴレリングが偽物と言った。

「^{フェイク}
偽物だ」

「なに!？」

辺りがザワザワしだした。

「家光……。日本へ飛ぶ」

？いいところで次回に続く

標的11 晴と光（後書き）

夜 空「出張！　ところで、引きこもりって知ってます？」

美 琴「あんた退場」

夜 空「ええ！？」

リボーン「あたりめーだろ。言っていいことと言っちゃ悪いことがあるんだぞ」

夜 空「引きこもりって悪い言葉なんですか」

美 琴「いや、そういうわけじゃないと思うけど」

リボーン「んじゃあ、またな」

夜 空「ああ、また終わらされた。もしかして私って、邪魔者？」

美琴&リボーン（やっと気が付いたか）

標的12 雨と嵐

「山本の道場」

「・・・これで剣道の基礎修行は終了だ」

「よし、オヤジ。その時雨蒼燕流ってやつを教えてください」

「ああ。よく見ておけ。時雨蒼燕流8つの型を」

時雨蒼燕流、攻式一の型・車軸の雨

時雨蒼燕流、守式二の型・逆巻く雨

時雨蒼燕流、攻式三の型・遣らずの雨

時雨蒼燕流、守式四の型・五風十雨

時雨蒼燕流、攻式五の型・五月雨

時雨蒼燕流、守式七の型・繁吹き雨

時雨蒼燕流、攻式八の型・篠突く雨

「・・・武。やってみろ」

「おう」

山本は、父親の見せてくれた時雨蒼燕流を見よう見まねで全ての技を試してみた。

「次、七の型・繁吹き雨」

「次、八の型・篠突く雨」

「ふう」

「おしめえーだ」

「なあ。一度型を見せてもらってそれを真似てみただけだろ!？」

「時雨蒼燕流はなあ、『滅びの剣』といわれてるんだ。師から弟子への継承は一度つきりだ」

「まじかよ。間違えて覚えてたら大変だな」

「武！ お前にその剣を本気で継ごうと言う気迫があるなら、忘れちゃいねーはずだ」

「それもそうだな。オヤジ！」

山本が、大きな声を出して、道場から出て行くとした父親を引きとめた。

「ありがとうございました！」

「お、おう」

山本の父親は、呆氣にとられているようだ。

「今日の晩飯はちらし寿司だからな」

「お、楽しみにしてるぜ。そういえば、何で俺が剣道を始めようとしたかって教えたっけ？」

「はっ。父ちゃんもお前と同じような年の時、師匠から教わったんだ。それぐらい考えつかあ」

それだけ言い残すと、山本の父親は道場を後にして、家に帰って行った。

「・・・。あとは、山本の鍛錬次第、か」

く並盛山く

ツナたちが修行している場所から数キロほど離れた場所では、ボンゴレ嵐の守護者、獄寺隼人がDr・シヤマルとともに修行をしている。

ビュッ！ ドガン！

「はっずれ」

「くっそー。何であたんねーんだよ」

「お前がエレガントじゃないからさ」

「うっせー！ お前にだけは言われたくねー！」

「仕方ねーな。1つだけヒントをやる。この紙ヒコーキはかわいい子ちゃん。ダイナマイトはお前だ。さあ、どつ口説き落とす？」

「はあ？」

「ツナの修行」

「ツナ、そこまで死ぬ気にならなくていいんだ」

「うおおお！」

ツナは、美琴の攻撃で真後ろに吹っ飛ばされた。

「終わりだね」

「ううう。もっと手加減してくれてもいいのに」

「ツナ、修行の第一段階は終了だぞ。今から第二段階に入るからな」

「なつ。ち、ちょっとは休ませてくれよ！」

「ダメだぞ」

ぐううう。

リボーンのお腹が盛大になった。

「帰るぞ」

「お前の腹優先かよー！」

く並盛町く

「親方さま？」

「はい。拙者の日本語や、洗濯、掃除もその親方さまが教えて下さいました」

「へ」

バジル君には悪いけど、悪いイメージしかないんだよね。だって、

リング持ってきた人でしょ？ 嫌なオヤジなんだろうな。

「・・・」

「その親方さまも食べにくるからな」

そのまま家に着いた一行は、ツナの意向でバジル・美琴も一緒にご飯を食べることになった。

「おう、お帰り」

「と、父さん」

「ん？ どうかしたの？ 叔父さん」

「ああ。どうやら、招いていない客が思ったより早く来てな」

「！ 親方さま！ 拙者もお供します」

「親方さま!？」

「そう。親方さま」

「んなー！」

「悪いがツナ、ゆっくり話してる時間はないんだ。美琴！」

「はい」

「お前とツナ、リボーンで他の守護者の保護に向かってくれ」

「はい！」

美琴はその支持を受けると、すぐさま沢田家を出て守護者の保護に

向かった。

「ツナ、行くぞ」

「あ、うん」

ツナ&リボンも守護者の保護に向かった。

標的12 雨と嵐（後書き）

美 琴「あれ？ あの子はいなくなったの？」

リボーン「もう1つの方でやっと出番が来たからな」

美 琴「なるほど」

リボーン「ところで、お前はどこに向かったんだ？」

美 琴「え？ さあ」

リボーン「ダメダメだな」

美 琴「ええ！？」

リボーン「んじゃ次回に続くぞ」

お詫び：一昨日の更新を予定していましたが、2日連続で寝落ちしてしまい、更新ができませんでした。申し訳ありません。

標的13 ヴァリアー、来る！

ターゲット
標的13 ヴァリアー、来る

並盛町のとあるビルの屋上に、1人の赤ん坊と4人の男がいた。

「マーモン、念写を頼めるか」

「ツケでいいよ、レヴィ・ア・タン」

マーモンと呼ばれた赤ん坊は、服の下から、トイレットペーパーみたいなものを取り出した。

息を吸い込んで、トイレットペーパーらしきものに・・・

「粘写！」

「いつ見ても汚いな」

「むっ。出たよ。ここから200mの位置だよ」

「よし、レヴィ雷撃隊。行くぞ」

「道」

「ッナ！　どうやら、来ているのは先遣隊のレヴィ雷撃隊みたいだよ」

「まずいな」

「どういふことだよ、リボーン」

「こちら側の雷の守護者は、まだ幼くてね」

「？」

「早い話がランボなんだよ。雷の守護者は」

ツナの顔がすぐくひきつった。

「な、なんでだよ!? ランボってそもそもボヴィーノファミリ
だろ!？」

「ボスが泣いて喜んでたよ」

「だからなんで美琴が知ってるんだよ!？」

「ツナ君!」

後ろから、京子ちゃんの声が聞こえてきたので、すぐに振り返った。

「き、京子ちゃん!？」

「ふう太君達知らない? 途中ではぐれちゃって」

「俺たちも探してるんだ。帰ってくるのが遅いから」

「うん。ねえ、ツナ君。お願いしてもいい？」

「うん。任せてよ」

もう遅くなるから、と、京子ちゃんと黒川花を先に家に帰した。

「道」

「丁度このあたりです」

「・・・道・・・。探し出せ。このあたりに雷のリングを持っているやつがいるはずだ」

「はっ」

レヴィ雷撃隊は、レヴィの指示で三方に散った。

「こちら01。^{ウーノ}・・・レヴィ様、子供を発見しました。どこから見てもただの子供です」

「01^{ウーノ}はガキをバラせ」

「はっ」

01^{ウーノ}は剣をもって、ランボ達に攻撃をしかけに行った。

ドカツ。

「ぐあ」

「ボンゴレファミリー晴の守護者、笹川了平、推参！」

「お、お兄さん！」

「こちら02。^{ドゥーレ}01^{ウーノ}が何者かにやられました」

ビュッ。^{ドゥーレ}02めがけてダイナマイトが飛んできた。

「ぐあ」

「03^{トゥレ}援護に向かいます」

ビシッ。今度は、剣撃が03^{トゥレ}に当たった。

「なんとか間に合った見てーだな」

「たく。何でこんなアホ牛がリングをもってやがんだ」

「それにしても、手ごたえのない奴らだったな」

「ああ。これなら簡単だな」

「あめーぞ。こいつらは下っ端だぞ」

「！ ああ、そう言えばそうだったな。なんつーか、アイツは別格だったからな」

「そう言えば、美琴さんはどうしたんですか？」

「あれ！？」

今更、美琴がいないことに気が付いた一同。

く一方の美琴く

「お待たせしました。西城様。ボンゴレ？世（い）からの勅書をお持ちしました」

「御苦労さま」

「・・・ボンゴレの死炎印・・・本物か。だとしたら、ボンゴレ？世（い）は無事だっということなのか・・・？」

「ねえ、ウエルティ。これ、本物だよね」

「はい。確かに、？世（い）からお預かりしてきましたが」

「ならいいけど。さて、行くか。ウエルティ、行くよ」

「はい」

く並盛町の曲がり角く

皆が集まっているところに、レヴィがやって来た。

「俺の雷のリングを持っているのは、パーマのガキか」

「まてえ！」

その後ろから、他のメンバーがやって来た。

「1人で狩っちゃいやよ」

「！スクアーロ！」

「？お、おおおい！ 雨のリングを持ってるのはどいつだあ」

「俺だ」

「てめえかぁ！ 3秒だ。3秒で掻っ捌いてやる！」

「私の相手は、あらん。あの坊やね」

「どけ」

「！ ちっ」

「・・・のけ」

「お前は関係ねえだろぉ！」

すごい殺気を持つ男が他のメンバーを押しつけて前に出てきた。

「ひっ！」

ツナがとてつもなくひるんだ。

「消えろ」

「まさかボス、アレをやるつもりなの!？」

「ぐっ。俺たちも殺す気か！」

「そこまでだ！ XANXUS！」

そこから対となる場所から大きな声が聞こえてきたのと同時に、死ぬ気の炎を帯びた巨大な鶴橋が飛んできた。

「！ てめえ」

「！ お前は、西城美琴！」

「XANXUS、お前の部下は門外顧問である私に武器を向けるの

か？」

「うるせえ。家光と同様、逃げることしか能のない奴が」

「XANXUS！ 親方さまの悪口はゆるさないぞ！」

「黙れ！ かつ消えろ！」

キユオオオオという音と同時に、巨大な炎が美琴を襲った。

「美琴さま！」

「XANXUS、貴様の力はこの程度か？」

美琴の額に白桃色の死ぬ気の炎が灯っていて、XANXUSの炎を炎の球体にして手に持っていた。

「なに・・・!？」

そして、手で握りつぶした。

「それに、私は逃げ回っていたわけじゃない。9代目からの回答を待っていたんだ。そして、その回答と思われる勅書を手に入れた」

「な、何言ってるの!？」

「門外顧問。それが、家光と美琴のボンゴレでの立場だ。ボンゴレであってボンゴレでないもの。そして家光は、ボスに次ぐ権限を発動できる、実質No.2だ」

「と、父さんがNo.2!？」

「さ、沢田殿。これを」

ツナが勅書を広げると、一番上のボンゴレマークの部分にオレンジ色の死ぬ気の炎が灯った。

「それは死炎印。間違いなく本物だね」

「うわ。イタリア語で書いてあるよ」

「ツナ。それにはこう書いてあるんだ。『私は今まで次期ボンゴレに相応しいのは家光の息子だと思って、そうするように仕向けてきた。しかし、最近死期が近いせいか、私の直感は冴えわたり、他に相応しい人を見つけた。それは、我が息子、XANXUSである』」

「んなー！ あの人、9代目の息子だったのー！？」

「『この変更について不服のある者もいるだろう。家光もXANXUSへのリング継承を拒んだ。そこで私は、皆が納得するボンゴレ公認の決闘を行うことにした』。つまり、こういうこと。ボンゴレ公認の1対1のガチンコバトルを開催する。最後に、詳しい指示を待てとある」

「お待たせしました」

ヴァリアーの更に後ろから、2人の女の人たちがやって来た。

「我々は、9代目直属のチェルベツ口機関です。今回のリング争奪

戦は我々が取り仕切るようになりました。依存はありませんね、X
ANXUS様。・・・ありがとうございます」

「待つて。チエルベツ口機関なんて聞いたことがない。そんな奴ら
には審判は任せられない」
ジャツジ

「あなたの指示には従えません。我々はあなたに仕えているのでは
なく、9代目に仕えているのです」

「では、明晩のバトルカードを発表します。明晩は、晴の守護者同
士の戦いになります」

「それでは、明晩11時、並盛中でお待ちしております」

チエルベツ口とヴァリアーはその場から姿を消した。

標的13 ヴァリアー、来る！（後書き）

美 琴「ところでどうして私が門外顧問の代表になってるの？」

リボーン「家光があの後どっかいつちまったからだ」

ツ ナ「でも、父さんが門外顧問でボンゴレの一員だったなんて」

美 琴「あれ？ 言っていなかったっけ？」

ツ ナ「言っていないよ！」

リボーン「なら分かってよかったじゃないか」

ツ ナ「良かったのかな」

美 琴「よかったんじゃない？」

標的14 晴の守護者

く沢田家く

「うゝん。うゝん。うゝん。はっ！」

お約束な展開で申し訳ない。が、ツナは夢にうなされて目を覚ました。

「ガハハハ―」

「あれ？ あ、ランボ！ 美琴や父さんは？」

「知らないもんね」

「知らない？ あ、リングの事全てが夢だったんじゃない？」

「んなわけない」

リボーンが壁にかかっている額縁を手にとって、ツナに見せた。

「9代目の勅書額に入ってるー!？」

「あ、ツナ。やっと起きた」

「美琴!？」

「ん？　どうかした？」

「い、いや」

ツナが凄く不思議そうな顔をしている。どうしたんだろう。

「ところで、今日は晴の守護者同士の戦いだけど、遅れちゃだめだよ」

「あ。うん、うん」

「それから、学校には行けよ」

「え？ あ、リボーン！」

「さ、行こう。ツナ」

「うん、うん」

少し震えているツナをお構いなしに外に連れ出し、学校に向かった。

（道）

「山本！」

「おす。ツナ。昨日は眠れたか？」

「俺はすごく緊張してな」

「山本も？」

「ああ。俺はあの時まであのロン毛に勝つことだけしか考えてなかったけど、あの時になって、俺一人の戦いじゃないってわかってな」

「あたりめーだ。これは、10代目が次期ボスになれるかどうかの戦いだぞ」

獄寺が、大きい段ボールを持って現れた。

「なに？　これ」

「ああ、開けないください！　美琴さん！」

「ああ、修行で使っちゃたね」

「ええ。これから山にこもって修行なんスよ」

「頑張つて。獄寺」

「はい！」

そういうと、獄寺は意気揚々に段ボールを持って山に向かって行つた。

く並盛中く

「おいツナ。風邪で休みだつて本当か？　またずる休みなんじゃねーのか？」

「え？ あ、うん。風邪を引いてたんだ」

そういえば、休みの間はずっと父さんが風邪にしていたんだっけ。

「ツナ君」

「京子ちゃん」

「昨日はふう太君たちとはぐれちゃってごめんね」

「ああ。あれはあの子たちが悪いだけだよ」

「うん。それに、大丈夫だよ」

「それならいいけど。あ、それより、お兄ちゃんが最近ボクシング以外の事に夢中になってるみたいなの。何か知らない？」

風邪で休んでいたはずのツナにそういう質問をしてきた京子。

「あ、ごめんね。風邪で休んだものね。わかるわけないよね」

……。ハッキリ言わなくちゃいけないんじゃないんだろうか。京子ちゃんをここまで心配させて、命がけの戦いなんて言えないよ。

「相撲大会だ」

「お兄ちゃん!？」

「なあ、沢田、西城」

「え？ あ、うん」

京子を相撲大会と言ってごまかした3人ぐみ。

そして、午後11時。

「本当に並中でよかったのかな」

「まだ誰も来ておらんぞ」

「とつくにスタンバイしていますよ」

校舎の屋上から女性の声がした。

「こちらへどうぞ」

チエルベツロに中庭に案内されたのでついて行くと、中庭にリングが置いてあった。

「なにこれ、リング？」

「晴の守護者はだれかしらん」

「俺だ」

「あら〜ん。好みだわ〜」

「へ〜。滅多にないよ。ルッスーリアのお眼鏡にかなうやつなんて」

「ああ。これでやつは死んだね」

「ヴァリアー連中が凄く恐ろしいことが言ってる気がする。」

「では、リングが本物かどうかを確認いたします。おふた方は中央に来てください」

「・・・。リングが本物と確認できました。それでは、リング争奪戦を開始します」

「それでは、晴の守護者同士の対決、ルツスーリアVS・笹川了平。バトルスタート」

こうして晴の守護者同士の戦いが始まった。

カッ！ バトルリングが太陽ほど眩い光に包まれた。

「な、何これ。眩しい！」

「これは晴の守護者の使命を表したものです」

「使命・・・？」

「うん。晴の守護者の使命は、『ファミリーに襲いかかる逆境を自らの肉体で碎き、ファミリーを明るく照らす日輪となること』」

「その通りです。そしてこれは、『日輪コロシウム』」

なるほどね。晴の守護者の使命、か。

「ぬう。これでは何も見えぬ」

「おほほ。アタシは全て見えるわよ」

「！ヴァリアー側の晴の守護者はサングラス掛けてる！」

「ぬおおおお！
マキシмумキャノン
極限太陽！」

ドガッ！ 了平の攻撃がルッスーリアにブレイクした。

「当たった！」

「ルッスーリア、本当に遊んでるね」

「ししし。ああ。当たったんじゃないくて、当たりに行ったんだよ」

「今の感触、奴は空中！
マキシマムキャノン 極限太陽！」

バキヤツ！ 骨が碎けるような嫌な音が聞こえた。

「グアア」

く並中入口く

ドシヤ。

「やはり、並中は9代目の手のものによって封鎖されてますね」

「うん。でも、観覧だけはさせてもらおうとするか」

く日輪コロシウムく

「私の左ひざには、メタル・ニーが入っているのよ。全ての攻撃を防いでしまうね」

「そんなことは知らん！」

そんなことを言って、了平はルッスーリアに向かって行った。

「え？」

バキッ。

「ふゝ。クリーンヒットしてたら危なかったわ」

「いや。確かにあてたぞ」

すると、上にあった照明が割れて、下に落ちてきた。

「!？」

「うおおおおー！」

ビュッビュッビュッ！ バリーン！

「これでやっとイーブンに戦えそうだな！ 活目！」

「目を開けようと閉じていようと関係ないわ。むしろ私が驚いたのは照明を割るほどのパンチよ」

「ルッスーリア。あいつの体を見てみなよ」

「な！ 塩ですって!？」

「今更氣がついても遅いわ！」

「ふう。別にこれぐらいじゃ驚かないわよ。私は、風圧で照明を割ったと思ったから驚いただけよ。それに、それぐらいの猿芸なら私にもできるわ」

そういつてルッスーリアが猛ダッシュしてきて了平の頭をかすめながら同じ技をやってみせた。

「いや。違うぞ。よけながらの同じ技だからな。了平がやったのより、高度だぞ。さすがヴァリアークオリティーだな」

「ヴァリアークオリティー？」

「到底人がやるには不可能とされるミッションをやったのけるところから、人々が畏怖の念を込めてヴァリアークオリティーとよぶんだ」

「行くぞ！
マキシмумキャノン
極限太陽！！」

バキヤツ！

「ぐあ！」

「・・・（まだ細胞伝達率は90%っていうところか！　だが今の修行じゃこれ以上は）」

「お兄ちゃん！」

「京子ちゃん!？」

「京子たちがコロネ口を探してたんで、エスコートしてみた」

「美琴!？」

「お兄ちゃん！　もう止めて！　喧嘩はもうしないって約束したでしょ！」

京子はこれを見てもなお喧嘩だと思っている。

「止めなよ。京子。なんかヤバそうだよ」

「あらーん。あなたのお兄ちゃんはねえ。殺されるのよ。私との戦いに敗れて」

「京子。あの時言っただはずだ。もう喧嘩はせんと。だがな、俺も男だ。もしかしたら戦わなければならないときが来るかもしれん。だが、こうも言っただはずだ。その時は、もう、負けんと！」

了平がたちあがって、そう宣言した。

「行くぞ！
マキシмумキャノン
極限太陽！」

了平の拳が光って、ルッスーリアのメタル・ニーにクリーンヒットした。

「ぎゃあー！」

「笑かしてくれるよな。あの変態」

「これでルッスーリアにはあのパンチを防ぐ術はなくなったね」

「まだよ。まだ私は戦えるわ！」

「すごい執念」

違う。執念じゃない。恐れているんだ。

「ルツスーリアは恐れているんだ」

「え？」

ドンッ！

「」「」「！！！」

「な、なに！？」

ゴーラ・モスカの弾丸がルツスーリアに命中した。

「お、おい大丈夫か！」

「近付かないでください」

「ルッスーリアは戦闘不能とみなされました。よって、勝者は笹川了平とします」

「・・・」

周りが静寂に包まれた。

「！」

モスカがルッスーリアのリングを了平に弾いて渡してきた。

「では、明晩の対戦カードを発表します。明晩は、雷の守護者同士の対決とします」

それだけ言い残すと、チエルベツロとヴァリアーはこの場から姿を消した。

「沢田。このカケラを1つに合わせるんだな」

カチッ。という音で完全なるボンゴレリングが完成した。

「ツナ。リングボックスだよ」

「あ、うん」

ツナは、美琴からリングボックスを、了平から晴のボンゴレリングを受け取って、リングボックスに収めた。

「1つ・・・埋まった」

「さ、行こう。ツナ」

「う、うん」

「お兄ちゃん！ ツナ君！ 本当のことを教えて！ 一体何をしてたの！？」

「『『『相撲大会だぜ』『』『』」

「最近、静かなブームなんだぜ」

「・・・。そうなんだ」

こうして晴の守護者同士の対決が終わった。

「ところで、あの指輪はなあに？」

「景品だ」

「（なんなの？ こいつら。怪しすぎるわ）」

標的14 晴の守護者（後書き）

ツ ナ「ようやく終わった」

リボーン「まだまだ先は長いぞ」

ツ ナ「わかってるよ！」

美 琴「ランボ、戦えるのかな」

リボーン「たたかえるんじゃないのか？」

美 琴「戦ってくれないと困るよね」

ツ ナ「そうだな」

標的15 ツナの修行

ターゲット
標的15 ツナの修行

「リボーン！」

「あれ？ どうしたの？ ツナ」

「あれ？ リボーンは？」

ツナがひどく息を切らせながら、教室に入ってきた。

「？ リボーン？ 来てないけど・・・」

「あれー？ 来てるって聞いたのに」

誰にだろう。そもそも、リボーンのことを知ってるのは、獄寺、了平、山本、ツナ、雲雀、そして私の5人だけのはずだけど・・・

キーン・コーン・カーン・コーン

「あ、チャイム。ホラ、席につきなよ」

「う、うん」

「よし、授業を始めるぞ」

次の授業は数学だから、担当の先生が入ってくるはずだったんだけど……。

「リボーン!？」

「ちっ。まだあの先公いやがったのか」

「私語は慎みたまえ」

リボーンがチョークを超剛速球で私語をしていた男子生徒に投げつけた。

パカン。

チョークは、粉々になり、男子生徒は気を失ってしまった。

「今日は担当の先生が不幸に遭ったから、俺が代わりに教えるぞ。因みに答えられなかったら、お仕置きがまってるからな」

再びリボ山が恐怖で教室を支配した。

「あはは」

ここは笑うしかないのが現状。

そしてとくになにか起こることもなく、放課後。

「ツナ。修行行くよ」

「あ、うん」

「おい、美琴」

「なあに？ リボン」

「おめー、自分の修行はいいのか？」

リボンは、いきなり核心を突いてくるような質問をしてきた。

「あ、うん。ツナと修行をするのが、私の修行にもなるから」

「そうか。ツナ、いつもの時間に修行を開始するぞ」

「う、うん」

く並盛町北山く

並盛町には、北山と南山の2つの山があり、別名、双子山と言われている。

「あ、ツナ。待ってたよ」

「美琴・・・！？ 早いね」

「うん。それより、早く^{ハイパー}超化できるといいね」

「そのための修行だぞ」

「あはは。わかってる。さ、ツナ。早く死ぬ気モードになってよ」

「う、うん」

美琴は、リボンからあるものを受け取った。美琴専用ともなる、死ぬ気の炎で編まれたツナのXグローブと同様のグローブである。

「美琴！ 死ぬ気でお前を倒す！」

「そうこなくっちゃ。それじゃあ、私も死ぬ気になろっかな」

美琴は、常備していた死ぬ気丸で死ぬ気になった。

「さ、始めよう」

グローブに白桃色の炎を灯らせ、美琴はツナにそう言った。

「うおおおおお！」

「ツナ、死ぬ気になりすぎ！死ぬ気になるのはほんの一瞬でいいんだよ」

「！」

踵落としが、ツナの頭に直撃した。

「ぐあ」

・・・死ぬ気をコントロールした・・・？ 一気に防御力を高め
て、ダメージを軽減したのか。そんなことは教えてないし、考えら
れるとしたら、ツナのボンゴレ^{ブラッド・オブ・ボンゴレ}の血か。

「はぁー！」

今度は、何もないところからツナに衝撃波が来た。

「！」

「驚いてるね。一念動力（テレキネシス／サイコキネシス）だよ」

少なくとも、今までの私ならこんな攻撃はできなかった。やっぱり、
大地属性のリングのおかげ、なのかな。

「どうしたの？ もう終わり？」

「うぉー！」

ツナが美琴に突進ってきて、腰に抱きついた。

「え？　ち、ちょっと！」

美琴は照れている！　ツナはバックドロップを決めようとした！

「な、なんだってー！？」

ドガッ！

「いったーい！」

「お前、いくらなんでも頑丈すぎるだろ」

「鍛えてるからね」

「根拠がそれか」

「あ、ご、ごめん。美琴」

ツナの死ぬ気がとけて、美琴に謝りに来た。

「あ、ううん。油断していた私も悪かったんだもん。今回は、ツナの勝ちだよ」

「え？」

「さーて。私は自分の修行でもするかな」

それだけ言つと、美琴はその場を離れ、別の場所に向かった。

く???く

「んっ」

ボウッ！ 美琴のグローブに、白桃色の炎が灯った。それは、光属性の死ぬ気の炎だった。

光の炎が激しく燃える。

「・・・。ロレンツイ、ありがたく使わせてもらっよ」

懐から、小さな箱のようなものを取り出した。

「・・・^{ボックス}匣開匣！」

ドシュッ！

^{ドラム・ティ・ルーチェ}
光龍！！！！

光属性の死ぬ気の炎を纏った、ドラゴンが現れた。

「大空属性に並ぶ繊細さを持つ光属性の匣兵器。お願い・・・間に合って」

「夜・並中」

「雨なんて降ってきましたね」

「うん。予報によれば、今日はずっと雷雲らしいよ」

「本当ですか・・・!？」

「うん」

「皆さま、既にヴァリアーは2時間前からお待ちです。こちらへ」

チエルベツロに案内されるままに、学校の屋上に来た。

「・・・。大きい」

「こちらが、雷の守護者のバトルフィールド、エレットウリコ・サ

「キットです」

「今日が雷が来るってわかっててやったのか」

「では、両名とも、フィールド中央に集まってください」

ランボをフィールド中央に向かわせた。

「・・・。リングが本物であると確認できました」

「それでは只今より、雷の守護者の対決、レヴィ・ア・タンVS・ランボ。バトル・スタート！」

標的15 ツナ修行（後書き）

表示されるサブタイトルに誤植がありましたので、訂正しました。

標的16 ランボVS・レヴィ・ア・タン

ターゲット
標的16 ランボVS・レヴィ・ア・タン

今日は生憎と、雨が降っていた。そんな中で開始された、リング争奪戦第2回戦。ランボVS・レヴィ・ア・タン。

ピシャーン。雷が、エレットウリコ・サーキットに設置されている避雷針に直撃した。

「ぐぴゃ！」

「おいアホ牛！　んなところに乗ったらあぶねーぞ！」

（5分前）

「それでは、雷の守護者同士の対決、ランボVS・レヴィ・ア・タン。バトルスタート」

「あ、待つて」

「なんでしょうか」

「うん。ちょっとランボに話がしたくて」

「わかりました。では、5分間のみとします」

「ありがとう」

ツナはチエルベッロにお礼を言ってから、ランボのもとへ向かって、ランボを連れてきた。

「ランボ、怖かったら行かなくていいんだぞ。もしかしたら死んじやうかもしれないからな」

「あらら、ツナ。知らないの？ ランボさんはね、不死身なんだよ」

「おい、アホ牛。オラ。これ持ってきてやがれ」

獄寺がアホ牛と書いた角をランボに渡した。

「ぐぴゃー！」

くもつーつの屋上く

「・・・」

「・・・。行きましょう」

「はい」

く美琴Sideく

「はあ、はあ、はあ」

「あなたの力はその程度ですか？」

「……私を殺すことなんていつだってできるでしょ？ 理由を
聞かせてよ。何で、この時代にいるの？ D・スピード」
デイモン

「クフフ。あなたに答える義務はありません。それにあなただって
気づいているのでしょうか？ 私は幻覚だと」

「……有幻覚」

「おやおや。やはりご存じでしたか」

「幻覚……有幻覚。幻覚に潜む有幻覚。有幻覚から生れる幻覚。
真実の中に潜む嘘。嘘の中に潜む幻覚」

今後、骸が言うであろうこのセリフ。

「じゃあ、D、聞きたいんだけどさ、あなたが戦っている私って、
本物だと思う？」
デイモン

「！ どういうことですか？」

「そのまんまの意味だよ。それに悪いけど、しばらくの間勝手に動き回られては困るからね。ちょっと細工させてもらったよ」

その瞬間、デイモンDと美琴の周りの霧が晴れた。

「！ こ、これは」

ス「ロベンドラ・ヌーヴォーラ
「雲ムカデ」

「クフフ。なるほど。これは逃げられそうもありませんね」

「・・・。言つとくけど、それ、抜け出すことは叶わないし、逃げることもできないよ」

「・・・。なら、これではどうでしょう。・・・。」

デモン
Dがその場から実体化をといて離脱しようとしたが、出来なかった。

「無駄だよ」

「しかし、いいのですか？　今は、雷の守護者の戦いのはずですよ？」

デモン
なぜDがそのことを知っているのかは分からないが、とりあえずは、ツナがいるからランボが殺される心配はない。

「心配ないよ」

「クフフ。素晴らしい信頼関係ですね」

「……」とは言ったものの、やっぱり心配ではあるよね（「

あ、出来るじゃん。よくよく考えたら、ここにいるのって幻覚じゃ

ん。本体は学校の屋上にいるんだし。でも、こいつをどうにかしないと。

すると、ものすごく冷たい冷気が降り注いできた。

「！
ウィンディチェ
復讐者！」

「ヌフツ！？
ウィンディチェ
復讐者・・・！？」

「デモン
D・スピード。オマエヲ、初代光ノ守護者トノ盟約ニヨリ、ワレ
ワレノ牢獄へ幽閉スル」

「・・・え？」

こうしてわけのわからないまま、デモン
D・スピードはウィンディチェ
復讐者に連れて行かれた。

「初代光の守護者との盟約・・・？」

ま、いっか。というような感じで、実体化を解いて、ツナたちのもとへ急いで向かった。

↓学校の屋上↓

「ぐぴゃ！」

ビシャーン。ランボがエレットウリコ・サーキットに乗っているときに、避雷針に雷が落ちた。

「ああ！」

「ふん」

「お待ちください。生死の確認を・・・」

「その必要はない。奴は死んだ」

「待つてよ。レヴィ。まだ早いよ」

皆が驚いたような顔をして、美琴の方をみた。

「見てみなよ」

「う、うわーん！ 痛いよー！」

そして頭のもじゃもじゃ（アフロ）から10年バズーカを取り出して、中に入ってしまった。

「なぬっ！？」

「ど、どういこと!？」

「ランボは昔からずっと雷に打たれてきたからね。だから、それに対する対抗ができてるんだ。そうだね、エレットウリコ・クオイオ雷皮膚だね」

「なあ!？」

ドンッ！ 10年バズーカが発射され、中から大人ランボが出てきた。

「やれやれ。餃子が最後の晩餐になるなんて」

「んん？ おいおい。部外者がフィールド内にいるぜ」

「あれは、10年バズーカにより10年後から召喚された、ランボです」

「やれやれ。行くぜ！サンダーセット！！」

ビシャーン！！ 避雷針を無視して、角に電気を呼んだ。

「なぬっ！？ 避雷針を無視して雷を呼ぶとは」

「行くぜ！！
エレットツウ「・コルナータ 雷の角！！！！」

「お前、俺より目立ちすぎだぞ！」

「ぐっ」

「あの技は、エレットウリ・クオイオ
雷皮膚ががあつて初めて成功するんだ」

「あれって、そんなに高度な技だったの・・・？」

ランボにパラボラの傘が一本刺さった。

「喰らえ！ レヴィ・ボルタ！！！」

8つあるパラボラの傘を広げて、空中に放った。

「死ね！」

「ぐっ！」

「アホ牛！」

「う、うわ〜ん！」

「なにっ!？」

さすがランボ。エレットウリコ・クオイオ雷皮膚あつてのランボって感じだよね。

「しかし、アホ牛が何で雷の守護者なんスか？」

「それは、ランボの雷皮膚が理由だよ。エレットウリコ・クオイオランボはウザい奴だけど、彼ほど雷の守護者の使命を体現しているのは他にはいないんだ」

「雷の守護者の使命は、雷電となるだけでなく、ファミリーへのダメージを一手に引き受け、消し去る避雷針となること」

「なるほど」

「痛いよー!」

ランボの手元にあった、10年バズーカを手を取った。

「あ、あれって！」

「アホ牛の10年バズーカっすね」

10年バズーカにもう一度はいった。

「な！ もう1度10年バズーカに！？」

ドンッ！

「ぬっ？ 妙な威圧感が」

「やれやれ。この感じ、夢でないとすれば、また10年バズーカで過去に来たのか・・・？」

「あ、あれって！」

標的16 ランボVS・レヴィ・ア・タン（後書き）

美 琴「さて、ここで一旦終わりです」

リボーン「今回は、雷戦後半だぞ」

美 琴「今回が前半戦だったからね」

ツ ナ「ランボ、大丈夫かな」

リボーン「さあな」

美 琴「たぶん、大丈夫なんじゃない？」

ツ ナ「あ、それよりもさ、途中で変なのが入ったけど・・・」

美 琴「さて、次回にお楽しみ」

リボーン「すごいごまかし方だな」

美 琴「え？ 何の話？」

ツナリボ「・・・」

標的17 激しき雷電

ターゲット
標的17 激しき雷電

10年後ランボがいた場所に、どこか10年後ランボの面影が残っている、大人が現れた。

「……20年後ランボ」

「ええ!？」

「やれやれ。厳ついのがこっちを見ているな。！ おお、懐かしい。なんと懐かしい面々だ」

「……(やっぱり、未来では……)」

「ぬう。お前、俺より目立ちすぎだぞ」

「……。過去の俺はかなり手こずっていたらしいな」

確かに、過去のランボ達はかなり手こずっていた。

「ふん。どんなに姿かたちが変わろうとも、俺のレヴィ・ボルタからは逃げられん！ 死角はなしだ！」

「やってみろよ」

「レヴィ・ボルタ！」

20年後ランボに、レヴィ・ボルタが直撃した。

「ふつ。奴は死んだ」

その場から離れようとするレヴィ・ア・タン。

「やれやれ。どこへ行く」

「！」

「見てみな。エレットウリコ・リバーズ！」

地面に手をついて、自分の体に帯電していた電気を全て校舎に放出した。

「なに！？」

「おいおい。まじかよ。これ、鉄筋の校舎だぜ」

「それだけ、あいつの力がすごいってことさ」

「しじ。何にしても、これじゃあれヴィはあいつには勝てねーな」

「そうだね」

「電気は俺にとっては子猫ちゃんみたいなもんなんだぜ」

「んなー！ ランボって、そういうところだけ大人ー！？」

ツナが驚いているのを尻目に、話を続けるランボ

「死ね！」

「！ あれは・・・」

ランボが何かに気が付き、地面に転がっていた変な角を拾った。

「やれやれ。どこに行ったのかと思っていたのに。1週間前に警察に捜索願いまで出したのに」

レヴィの攻撃が角に直撃し、角に張られたニスがはがれた。

「ニスがはがれて懐かしいのが顔を出した。幼少のころ、獄寺氏に書かれた屈辱的な文字が」

「ああ！ あれって、さっき俺が書いた！」

「ああ、あの角って、20年後ランボのものなんだ。この前、健在のボヴィーノファミリーのボスが持たせてくれたんだ。20年後ランボを呼び出すためにね。気が付かなかったけど、ま、結果オーライかな」

「ふむ。やはり、スピアの角よりしっくりくるな。行くぜ！ サンダーセットオオオオ！！！！」

再び避雷針を無視して、角に雷の電気を帯電させた。

「ぬう。しかし、残念だったな。その技には致命的な弱点がある！」

「致命的な弱点？」

「リーチが短けーんだ」

「そういえばそうでしたー！」

「昔の話さ」

そういつと、エレットウリコ・コルナータの雷が伸びて、レヴィに直撃した。

「ぬおおおお」

バチバチいいながら、ランボの攻撃を必死にガードするレヴィ。

「ぼ、ボス。俺を・・・俺をもう一度褒めてくれ！」

「もう剣を引きな。俺とおまえとでは経験に差がありすぎる」

そこまで言いきったところで、ランボの姿が元に戻った。

「な、なんで！？ まだ１０分経ってないよ！？」

「どうやら、最初に１０年バズーカに１０年バズーカに当たってから１０分間らしいな」

「そ、そんな！」

「？ ツナ、どこに行くんだ？」

ツナがフィールド内に立ち入ろうとしていたのをリボーンが止めた。

「俺、仲間が殺されるのを見たくないんだ」

すると、リボーンの口元が緩んだ。

「……ぬう。よくも俺をコケにしてくれたな！ 牛ガキ！ 死ね！ ぬっ！？」

ズズーン。エレットウリコ・サーキットに設置されていた避雷針が全て倒れた。

「……風じゃなさそうだね」

「ああ。あの曲がり方、熱によって解けたんだ」

「エレットウリコ・サーキット全体が熱を帯びている・・・？」

「これは・・・熱伝導」

ボウッ！

「！ 誰がいるぞ！」

「目の前で仲間に死なれたら、死んでも死にきれねえ！」

ハイパー化したツナが、エレットウリコ・サーキットの最外殻にあった部分を持って、必死に熱を送っていた。

「なに？ あれ。あんな炎が出せるなんて聞いてないよ？」

「（どうなってやがる。この間とは別人じゃねえか）」

「邪魔立てすれば貴様も消す！」

「お待ちください。雷戦の勝者が決定しました」

チエルベツロがそう言った時、ツナのハイパーモードがとけた。

「雷戦の勝者は、レヴィ・ア・タンです」

「な、なに！？」

「そして、大空のリングも共に没収させていただきます」

そういうと、非情にもツナの首に下がっていた、大空のハーフボンゴレリングが取られてしまった。

「待て！ 沢田殿は、フィールド内に入っていないはず！」

「意見は認められません。我々がルールです」

「くっ」

「XANXUS様。大空のハーフボンゴレリングです」

「よくやったぞ、女」

チエルベツロがXANXUSに大空のハーフボンゴレリングを手渡した。

「フハハハ。これがここにあるのは当然だ！」

「ボス。雷のリングだ。収めてくれ」

「いらん。次に醜態をさらしてみろ」

「はっ。死にます」

「それでは、明晩の対戦カードをお知らせします」

「明晩は、嵐の守護者同士の対決です」

「では、明晩。またお会いしましょう」

XANXUSの手の光球が大きくなり、ヴァリアーとチエルベツロがその場から消えた。

「ランボ！」

「・・・大丈夫。気を失ってるだけだから」

「美琴!!」

「・・・さ、ランボを病院に連れて行こう」

ツナたちは、傷つき倒れたランボを病院に連れて行った。

そして・・・。

「・・・」

・・・はぁ。私が助けに行けばよかったかな。

「おい」

「なに？ リボン」

「おめー、こうなること知ってただろ」

「・・・。だったら？ 知ってたところで、試合を中止することはできないんだよ」

「・・・。確かにそうだな。だが、教えることは可能だったはずだぞ」

「ランボは聞く耳を持ちやしないよ」

それじゃ、と言って、美琴は家に帰って行った。

くイタリア本国く

「！ 親方さま！ いつお戻りに？」

「明後日には戻る」

「わかりました。では、親方さまがお戻りになるのをお待ちします」

「すまん。オレガノ」

「いえ。これも我々の仕事ですから」

標的17 激しき雷電（後書き）

2日連続での投稿です。

すみません。今週は何かとドタバタしそうなので、今週は、出来ても3回だけです。投稿は。

話しは変わりますが、ドラクエの主人公の名前って、なにがいいですかね。

では、また次回。

標的18 それぞれの修行

ターゲット
標的18 それぞれの修行

〈回想〉

〈中山医院〉

「え、今は言うことができないってどういふこと？」

「ごめん、母さん。今はただ、何も聞かずにランボを見ていてほしいんだ」

奈々は、ツナたちの心情を察したのか、ツナたちに言った。

「……。わかったわ。母さん、あなたたちの言うことを信じるわ」

「ごめん」

回想終了！

奈々の手には、家光から届いた手紙が握られていて、手紙には、

『黙ってツナたちの力になってくれ』

とだけ書かれていた。

「まったく。こんな大変な時に、あの人ったらどこ行っちゃったのかしら。帰ってきたら、こっぴどく怒らなくちゃ」

すると、廊下から足音が聞こえてきた。

「ランボ君！」

「ランボちゃん！」

「あら、ハルちゃん、京子ちゃん」

京子とハルがやってきた。

「ランボ君がケガをしたって本当ですか!？」

「うん。雷が、傘に落ちたんですって」

「かわいいそうなランボちゃんです」

「おばさん、私とハルちゃんで見ますから、休憩してください」

「ありがとう、2人とも」

く並盛山く

「どうしようっ」

ツナがすごく焦っていた。

「もうどうしようもできないでしょ？ 過ぎ去ってしまったことはいつまでクヨクヨしてたって、何も変わらないんだから」

「美琴の言うとおりだぞ、ツナ。そんなんじゃ修行にも身がはいんねーぞ」

「死を伴うんだから、集中しなきゃ」

「で、でも」

「うっせー、ダメツナが」

げしっ。ツナの鳩尾にリボーンの土踏まずがフィットした。

「いてっ！ 何すんだよ！ リボーン！」

「ツナ、大空のリングがとられてしまったのは仕方がないこと。それを取り戻すのはツナのやることじゃないの？」

「そ、それは・・・」

「沢田殿、修行を始めましょう」

3人がツナを慰めている。

「さ、再開するよ」

こうしてツナの修行が開始された。

く並中・保健室く

「
おら

「
なんだよ、コレ

「
見てわかんねーのか？ 紙だよ紙

「
どれぐらい、見てわかるってーの！

「
んじゃ、修行を始めんぞ

〈5分後〉

「おい、シャマル。できたぞ。どうすんだ？」

「ん？ お前、何やってんだ？ 全部紙ヒコーキにしちまったのか？」

「修行を始めるっつーから」

「あのなあ。まあいいか。いいか、お前の技には圧倒的に足りないものがある。それがなんなのかわかるか？ わかんねーって顔だな。ホラ、もう一度紙やつから、もう紙ヒコーキつくんじゃねーぞ」

「こ、これメモ用紙だったのか」

く並盛北山く

ツナたちは、南山で修行をしている。

「さて、修行を始めますか」

今ここには美琴しかない。

「！」

美琴は悪寒を感じた。前にも感じたことがある。

「……ヴァンディチエ復讐者……」

「デモンD・スピードニ逃ゲラレタ。ドウイウコトダ」

「どうもこうも、あんたたちがへましたんでしょ？」

ワインディチェ
復讐者に強気で行く美琴。

「マアイイ。アイツハシバラク動ケナイハズダ」

「そう。ありがとう。はい、これ。お礼」

美琴は、そういうとポケットから財布を取り出した。

「コレハ」

「初代ボンゴレの遺品。いや、初代ボンゴレと初代シモン、ジョットとシモン＝コザートの友情の証かな？」

「・・・」

「全部で7つある。これがその1つ目。残りはどこにあるのかは知らないけど、いずれ必要になるから。知ってるでしょ？ その場にしたんだから」

「・・・。オマエハナニモノダ？」

「やだな、
復讐者^{ヴァインディチェ}」

美琴が笑顔を作って、少し笑いながら言った。

「ボンゴレとシモンに所縁^{ゆかり}のある家系に生まれし者、だよ」

「……ボンゴレトシモンニユカリノアルモノ……」

「そう。私は……」

く並中く

「ううう、寒い」

「お待ちしております。こちらへ」

チエルベツロに導かれて、校舎内に入っていた。

「く、これは……!」

「ただの校舎じゃねーか」

「獄寺氏は」

「しし。逃げ出したんじゃねーの？」

「（シャマルのことだから、恐らく自信のない戦いに自分の弟子は送り出したくないんだろうな）」

「11時までに来なかった場合、獄寺氏を危険と見做し、ベルフェゴールを勝者とします」

そして、チエルベツロによるカウント・ダウンが開始された。

そして、残り1秒になった時、時計に向かって爆弾が飛んできた。

「お待たせしました、10代目。獄寺隼人、行けます」

？次回に続く。

標的18 それぞれの修行（後書き）

リボーン「今回は、嵐戦だな」

ツ ナ「大丈夫かな？ また無茶しなきゃいいんだけど」

美 琴「どうだろうね、獄寺のことだから、無茶しちゃうかも」

ツ ナ「そんな」

リボーン「ま、お前次第だな」

ツ ナ「なんで!？」

標的19 嵐戦 獄寺隼人VS・ベルフェゴール

ターゲット
標的19 嵐戦 獄寺隼人VS・ベルフェゴール

「お待たせしました、10代目。獄寺隼人、いけます」

「獄寺君！」

チエルベツロの2人はお互いに顔を見合わせ、頷いた。

「時間に間に合いましたので、参加を認めます」

「それでは、今回の嵐戦のルールを説明します」

「今宵の戦闘フィールドは、校舎の3階全てです。勿論、ここと繋がっている東棟も含みます」

「また、今回は、廊下だけではなく、教室等も戦闘フィールドとなります」

「（よし、俺の好きな遮蔽物のあるフィールドだ）」

獄寺がそう心で思っていると、チェルベッロは再び説明を再開した。

「但し・・・」

ゴウッ！ バリーン！ 強烈な突風が吹いてきて、窓ガラスを木端微塵に破壊した。

「な、なんだ!？」

「フィールドのあらゆる場所に、このようなハリケーントービンを設置させてもらいます」

「ハリケーントービン？」

「はい。ハリケーントービンには4つの噴き出し口があり4方向にランダムに強力な突風を発生させる嵐の装置です」

「め、滅茶苦茶だぜ」

「そして、今回は制限時間をもつけさせてもらいます」

「制限時間？」

「試合開始から15分経つまでにどちらかが嵐のボンゴレリングを完成させ、所持しなければ、ハリケーントービンに仕掛けられた爆

弾が順に爆発していき、この階を壊滅させます」

「そ、そんな！ それじゃあ、完成できなかったら2人は」

「死ぬでしょう。2人とも守護者には相応しくはないということですよ」

チエルベツロが2人を気にせず、淡々と説明をした。

「（XANXUS・・・。どうでもいいと思ってるのかな？ 守護者のリングは）」

「なんだ？ 今のガラスの音は。けが人はいないか？」

Dr・シャルマルがそんなことを言いながらチエルベツロの胸をもんだ。

「！」

「シャル！」

「！！！！」

ヴァリアー全員が驚いた。

「トライデント・シャル……。噂では、2世代前のヴァリアーにスカウトされそれを断ったほどの男」

「なにしてんだよ！ てめーは！」

「いやだってホラ、バリーンで音がしたからな。けが人がいねーか確認にな。お前の勝負の冷やかしを兼ねてな」

「けっ」

「つーわけで、俺こっち側につくから。よろしくな、喪服の連中―！」

「へえ。シャマルがあいつらとね」

「コロネロにディーノにシャマル。これほどの人材がどうして集まる。どうなってやがる……」

「それもこれもあのチビの……」

「ま、これで楽しめんじゃん」

「今回は、フィールドが広大のため、各部屋に取り付けられたカメラで校舎端の観覧席に勝負の様子を中継します」

「また、妨害行為がないよう観覧席とフィールドの間に赤外線感知式のレーザーを設置しました」

嵐戦の準備が着々と進められた。

「爆弾使ったって？　って、見りゃわかるか。肩に力が入りすぎじゃね？」

ベルフェゴールが獄寺の肩をたたいた。

「（ぜってー負けねえ）」

「それでは、嵐のリング、獄寺隼人VS・ベルフェゴール。試合開始」

バトルスタ

こうして、嵐のリング戦が開始された。

標的19 嵐戦 獄寺隼人VS・ベルフェゴール（後書き）

次回は嵐戦です。

今回、美琴の出番が一切ありませんでした。セリフもありませんでした。

標的20 天才

ターゲット
標的20 天才

「^トそれでは、嵐のリング、獄寺隼人VS・ベルフェゴール。
^ト始」
バトル・スタ
勝負開

「（行くぜ）」

獄寺は、途轍もなく短い導火線のダイナマイトを様子見てベルフェ
ゴールに投げた。

「導火線短かつ」

ドーン！

「（まずは様子見だぜ。さあ、どーする？　！？）」

空中で何かが光っているのを見つけた。

「（なにっ！？）」

空中でナイフが大量に円をかいて空中に浮いていた。

「な、ナイフ！？　くっ」

カカカツ。獄寺のいた位置に全てのナイフが突き刺さった。

「ちょこざいなことすんのやめとけて。誰相手にしてるかわかってんの？」

「ヴァリアークオリティーとはよく言ったもんだぜ。余裕ぶっこいている暇はねーぞ」

「（こうなりや出し惜しみはなしだ）喰らえ。3倍ボム！」

「ん？」

通常のボムの数の3倍の数をベルフェゴールに向かって投げた。

「すごい！ 完成してたんだ！」

「あれが獄寺殿の新技！」

しかし、ベルフェゴールはよけようとせず、一歩下がっただけだった。

「（何故よけねえ！）」

それと同時に、突然突風が吹いてきた。

「！」

ドドドドーン！ 爆弾が爆発した。

「この風、あの機械か！」

「風には敏感なんだよね。嵐の守護者だから」

「くそっ」

ガタガタという音がしてからすぐに激しい突風が吹いてきた。

「くっ！ め、滅茶苦茶だぜ！」

「ああ。ランダムに突風が！ これじゃあボムが使えないよ！」

「それはお互い様だぞ」

しかし、ベルフェゴールのナイフが獄寺に向かって一直線に飛んできた。

「！（嘘だろ・・・？）」

キュッ。獄寺はすんでのところで避けたが、窓ガラスを破って、教室に入ってしまった。

「どうなってやがる。まぐれか？」

「王子にまぐれとかないから」

「！！」

「死ぬほど簡単な話さ。吹き荒れる気流を読んで、目標線上にそっとナイフを添える」

突風の中を一本のナイフが、獄寺めがけて飛んできた。

カツ！

「！」

「なに！？」

「気流の流れを読むなんて、そんなこと・・・」

「この圧倒的不利な状況を逆に利用して人間離れたことをやってのけちまうんだ。認めるしかねえな。奴は本物の天才だ」

「3分経過しました」

「（気流の流れを読むだ？）」

「嵐の守護者の使命って知ってる？ 常に攻撃の核となり休むことのない怒涛の嵐。俺にはできるけど、お前にはできないね」

「何つつたつてやがる！ 隼人！」

シャルルの忠告も聞こえるわけない。

しかし、自分に迫ってきているナイフに気が付きよけた。

「くっ。！」

カカカツ！

「これじゃあ攻撃に移れねえ！！」

「スキのない流れるようなナイフさばきで相手の一切の攻撃を封じる」

「この風の中でこんなことができるのはベルぐらいだよ」

「はんっ！」

三者三様の反応をするヴァリアー。

「くそっ！（ここは一旦退くしかねえ。奴の攻撃の届かないところ

るに！）」

ドンッ！

「爆風に乗じて隠れてつもりかよ」

「あのナイフと正面向いてやりあうのは分が悪い……。トラップはって死角からからチャンスを狙うしか」

ビュッ。カカカツ。どこからともなく、ベルフェゴールのナイフが飛んできて、獄寺のダイナマイトを切り落とした。

「！？　どっからきやがった！」

「ベルって人まだ廊下にいるよ！」

「では相手が見えていないのに!？」

「かくれんぼ好きっていったじゃん。俺王子だからさ、お前らパチモンとは出来が違うんだよね」

「ぐ」

「獄寺君！」

再びベルフェゴールのナイフが獄寺に突き刺さった。

「うしし。これでもう終わり？ 嵐の守護者がこれじゃあボスも知れてんな」

「俺のせいで10代目が！（ぜってー負けらんねえ！ しかし、奴の攻撃をどうにかしねーと。考えろ、どうして死角から来る）」

「そーだ。それでいい。どんな天才でも、タネと仕掛けはある」

「（焦るな、落ち着け……。試合前に何があつた……。？……。肩……。？！！！！）」

「怒濤の攻めの最後は、ハリセンボンにしてやるよ。バイバイ」

ベルフェゴールが大量のナイフを再び投げた。

標的20 天才（後書き）

さて、今回も美琴の出番が一切ありませんでしたね。それ以前に、ここにいるのかも不明です・・・

標的21 怒涛の攻め

ターゲット
標的21 怒涛の攻め

ガシャーン！ 人影が窓ガラスを破って、廊下に飛び出てこようとした。

「しし。サボテン一丁上がり」

「ああ！」

「待て、ツナ。落胆するのはまだはえーぞ」

「え？」

廊下に飛び出て来たのは、獄寺ではなく、人体模型だった。

「な、何アレ。人体模型・・・？」

「ああ。みてーだな」

「・・・」

何も言わず、美琴はその場から姿を消した。

「ねえ、美琴。あれって・・・。あれ？」

「どうした」

「美琴がない」

「！」

「ほ、本当です！ 西城殿がいなくなっています！」

「（・・・。いつてーどういうことだ？）」

困惑するツナ側を無視するかのように嵐戦は粛々と続けられた。

ズズズ。人体模型が不気味に動いた。

「ひい！ 人体模型が！」

「よく見てみる！。何か首についてるぞ」

「え？」

確かによくみると、人体模型の首に細い糸のようなものが付いていた。

「これが、これがお前の技の正体だ」

獄寺がその糸を持ち上げ、ベルフェゴールに向かってそう言った。

「・・・」

「お前は、試合が始まる前に俺の型に触れ、この目視しにくい糸を俺の肩につけたんだ。それもご丁寧に重量を感じないように局部麻酔まで打つてな」

「そ、そうだったんだ」

「つかさ、お前、こんなんで得意げになるのは勝手だけどさ」

ガシャーン！ 再び2人を激しい風を襲った。

「こんな風の中でお前の攻撃当たると思ってたの？」

バツ！ 獄寺がダイナマイトを取り出して構えた。

「ぼ、ボム！？」

「だから当たanneーつの」

「当たらねーボムを当てるようにするためにナンパ返上で付き合ってたんだ」

シャルがツナの耳元で言った。

「え？」

「果てろ！」

「バカすぎて王子あんぐり」

嵐の中にダイナマイトが飛んでいった。

「（行け）」

ドシュドシュドシュ！ ダイナマイトに仕掛けられた小型の発火装置に火が付いて、嵐の中ベルフェゴールの元へダイナマイトが飛んでいった。

「!?!」

「俺が下手打って10代目に恥をかかすわけにはいかねーんだよ」

「す、すごい!」

「ボムが曲がった! あれも獄寺君の新技!？」

「ロケットボム……。これこそがアイツが6日間で完成させた新技だ。ボムという武器の性質上、やつに最も足りていなかったのは機動力だ。」

そこで、機動力そのものをあげたってわけだ。奴は、俺のトライデント・モスキートを見て自分で思いつきやがった。

マニュアル
手動^{マニュアル}なだけにテクニックを要するが、2度曲がれば戦略はグッと広がる。何より、奴が生き残るために編み出した技だ。そういう技は、しぶとく決まる」

「・・・ベルの奴、無傷ではいられまい」

「そうだね。やっと始まるよ」

「あゝあ。あいつがプリンス・ザ・リッパーと呼ばれている由縁がなあゝ」

突然、校舎の壁が崩れ落ちた。まるで、途轍もなく鋭利な刃物で切られたように。

「!!--!」

「あゝああ! 流しちゃったよ。王族の血を!!--!」

「(なんだ!?! こいつは)」

「自分の血を見てから始まるのさ」

「あゝ ああゝ！！！！」

「わ、笑ってるよ」

ベルフェゴールが気味悪く笑い始めた。まるで、狂ったかのように。

「あいつの奇行……。相変わらず理解できねえぜ」

「あの表情、無邪気でむきだしの残虐性がよみがえってる」

「り、理解できないよ」

「俺にもあれは理解できねーな」

珍しくツナとリボーンの考えが一致した。

「イタリア某所」

「……ようこそ。お待ちしております」

「……」

「……。黙っていないで、何か話したら？」

「ボス、俺は……」

「あらあら。あなたって、相変わらずね」

2人の女性と1人の男がテーブルを囲んでいた。

「……しかし、まさかあんたの方からアポをとるとはな」

「……それは、お互い様ではありませんか？ あなた方も、私とは決して会いたがらない」

「そりゃ当り前だろーな」

「2人とも、そんなに睨みあいしないで、何か食べましょうよ。何か持ってこさせるわよ」

「結構です……」

あら、残念ね。みたいな顔をしながら女性は笑った。

「・・・。そういえば前から聞きたかったのですが、なぜあなたはそんなに笑っていられるのですか？」

「ああ、これ？ 祖母からの教えなのよ。悲しい時こそ笑いなさいって」

「・・・（なるほど。だから、か）」

「どうしたの？」

「あ、いえ」

「何か用事があったんじゃないのか？」

男が思い出したかのように女性に問いかけた。

「ええ。あなたは、未来がわかってますよね？ これから起こるこ

とが」

「ええ。わかってるわ。これが、変えられない未来であることもね」

「ボス、何の話だ？」

「あなたには関係ありません」

「なに！」

男がガタツと、思い切り立ちあがった。

「落ち着きなさい」

「ちっ」

女の人に宥められ、席についた。

「でも、そんな話をしに来たの？」

「いえ。違います。その後の話です」

それから数十分間、話は続いた。

「では、これで」

女の方は、その場から姿を消した。

（並中）

「果てろ！」

獄寺がロケットボムをベルフェゴールに投げつけた。

ドーン！

「ししし」

「なに！？」

「よ、よけた！」

「いや、ただ避けただけじゃねー。あの無駄のない動き・・・」

「いよいよ奴らしくなってきたな」

「ああ。キレてこそ、ベルの天賦の才能は冴えわたる」

「しし」

ビュッ！
ベルフェゴールが嵐の中ナイフを獄寺に向かって投げつけてきた。

「！！（焦る必要はねー。この風ん中で狙いがでたらめだ）」

しかし。

ブシュ！
獄寺の頬が突然切れた。

「（なに・・・！？）」

「え!？」

「どーなっただよ! ナイフには触れてねーぞ!」

「まるでカマイタチだな」

「ドカーン」

ベルフェゴールがナイフを片手に獄寺に突っ込んできた。

「くそっ!」

ドーン! チビボムを目の前で爆発させて、ベルフェゴールの攻撃を回避した。

「げげげほ」

「肉を切らせて骨を守る。いい判断だなあ、爆弾小僧」

「あはあゝあゝ。もっと血だゝ!!!」

「や、やばいよ。あの人」

「くつ。この距離はマズイ」

「待ちなよ!」

ビュビュツッ! ベルフェゴールがナイフを投げつけてきたが、全てそれた。しかし、獄寺の太ももが切れた。

「くつ。まただ」

「あと6分でハリケーントービンが爆発します」

「時間もねーのかよ！」

標的 21 怒涛の攻め（後書き）

お久しぶりです。長くなったので、ここまでです。本当は昨日の内に更新したかったけど、パソコンがちょっとアレ的な感じになったので、今日になりました。

標的22 天才VS・凡才

ターゲット
標的22 天才VS・凡才

「くそっ！」

ビュビュビュ！ ベルフェゴールのナイフが獄寺のもとに飛んできた。

「ししし。また鬼ごっこ？」

獄寺が曲がり角を曲がり、ベルフェゴールがその後をついて行ったが、誰もいなかった。

「（さあ、来い。ここは壁ばかりだからな。俺にとっては絶好の場所だぜ）」

ベルフェゴールのナイフが獄寺に向かって飛んできた。

「！！！！（来たか）」

「ししし。見つけ。袋のねずみ」

ビュビュビュ！ 再び獄寺めがけてナイフが飛んでいった。

「くっ。果てる！」

負けじとボムで反撃するが、ナイフが飛んでくるだけでけがをする

ため、迂闊に動けないでいた。

「これで仕上げ」

ベルフェゴールがナイフをもう一度獄寺に投げつけた。

「!!!!」

「ご、獄寺君！」

「隼人のやつ、何止まってやがるんだ！」

「ちげーぞ。動かねえんじゃねえ。動けねえんだ」

「え？」

「見てみる」

リボーンがそうだったので、モニターに注目した。

すると、獄寺の周りに視認しにくい細い糸のようなものが見えた。

「あれは……。ワイヤー！」

「そうだぞ」

「なるほどな。ワイヤーか……」

「!?」

「どうした？ スクアーロ」

「いや。何でもねえ」

「フィールド」

「ん？ こんな状況なのにまだあきらめないの？」

「当たり前ーだ」

ドドン！

「！」

「時間になりましたので、ハリケーンタービンが爆発を開始しました」

「へっ（行け！）」

ジジジ。ドーン！ベルフェゴールの周りにある本棚の後ろが爆発して、本棚がベルフェゴールの方向に倒れた。

「さしものベルでもあれでは」

「うむ」

「や、やった！」

「隼人、早く帰ってこい」

「ああ（10代目、勝ちましたよ）」

獄寺がベルフェゴールの首からかかっている嵐のハーフボンゴレリングに手を触れた瞬間！

「俺の勝ち」

ガッ！ ベルフェゴールが獄寺のリングに手をかけた。

「！！！！」

「ああ！」

すると、近くまで爆発が迫ってきていることに気付いた。

「間もなく、図書室が爆破されます」

「隼人、もういい！ 早く戻れ！」

「そういうわけにはいかねえんだよ！ 俺がここで負けると、もう

後がねえ！　ここ勝たねえと、右腕として名折れなんだよ！」

（並中屋上）

「（・・・）。相変わらずだな。やはり、あいつに似ている」

「・・・。どうした？　アイツが気になるのか？」

「（ああ。気になると言えば気になるな。何せ、アイツに似ているからな。性格は違うが・・・）」

「ふ。そうか」

しかし、相変わらず何を考えているのかわからない奴だな。

くツナSideく

「ふざけるな！」

「ツナ・・・？」

「10代目・・・」

「右腕だとか、リングだとか、勝ち負けだとか。そんなことのためにこれ以上君が傷つくのはもう見た

くないんだ！ そんなもののためにいつまでも固執しなくてもいいんだ！ 俺は、君と笑ったり、バカ

しあったり、花火を見たり、雪合戦したいんだ！ だから、だから、戻ってきて！ 獄寺君！」

「10代目・・・」

その瞬間、獄寺達がいた図書室が大爆発した。

「そ、そんな」

「・・・。バカが」

皆の気持ちが沈んでいるところで、獄寺が地を這って戻って来た。

「10代目、花火見たさに戻ってきました」

「獄寺君！」

すると、モニターを覆っていた煙がはれて、図書室の様子が映し出された。

「あゝ、リング〜」

「！！！！ 生きてやがる。化け物か？ あいつは」

「嵐のリングはベルフェゴールのものとなりました」

「それでは、明晩の・・・」

「れ、レヴィ様！」

皆が解放され、階段前に集まっていると、ヴァリアーの1人「（レ

ヴィ雷撃隊）がやって来た。

「どうした？」

「し、侵入者です！」

「「「「！！！！！！」」」」

「侵入者が、こっちに向かってきています！」

「なに・・・！？」

階段の下から1人の男が登って来た。

「ねえ」

その男は・・・。

「君たち、僕の学校で何やってるの？」

「ひ、雲雀さん！」

雲雀恭也。ツナたちの最強の守護者。

「あなたは、沢田氏側の守護者ですか？ それなら、ここで暴れるのは」

「奴は、ただの侵入者だ！ 俺がヤル！」

レヴィが武器を構えて雲雀に向かって来た。

スッ。その攻撃をスッとよけ、足を引っ掛けた。

「ぬお！」

「あの身のこなし・・・」

「ああ。レヴィはケガをしているが、それを差し引いてもスゴイね」

「出ていかないと、噛殺すよ」

雲雀がチャッとトンファーを構えた。

「ひい！」

「うゝ おおおおい！ てめえ！ 俺が相手してやる！」

「待て」

2人の間を誰かが割って入った。

「雲雀、もう少しの間がまんしろ。ツナたちが勝てば、そのあと誰とでも好きなだけ戦えるぞ」

「ふうん。本当かい？ 赤ん坊」

「ああ。本当だぞ」

スッとトンファーを降ろした。

「校舎の破損は元に戻るの？」

「はい。それは我々が責任を持って」

「ならいいよ」

それだけ言い残して、雲雀はその場を後にした。

「では、明晩の対戦カードを発表します。明晩は、光の守護者同士の戦いです。それでは、明晩。同時刻でお会いしましょう」

「では」

その場からチエルベッコとヴァリアーが消えた。

標的22 天才VS・凡才（後書き）

そういえば、この小説ではありませんが、高校時代の女友達に「オリジナルキャラの設定画書いてくれない？」と頼んだところ、ムリと言われたことがありましたね。

ちなみに、美琴は「とある」の美琴とは全く違う容姿風貌なので。

って、誰も聞いてませんよね。あゝあ。誰か書いてくれないかな。

ついでに、髪の色は、青で、目は紫です。

23話じゃなくて、22話でしたね。すみません。

標的23 光のアルコバレーノ

ターゲット
標的23 光のアルコバレーノ

「大丈夫？ 獄寺君」

「すみません、10代目。俺が不甲斐ないばかりに・・・」

「ううん。生きて帰ってきてくれただけまだいいよ」

「じ、10代目・・・」

獄寺は目を潤ませながら、ツナに感謝していた。

「さて、次はおめーの番だな。美琴」

「うん」

「修行の方はもう大丈夫なのですか？」

「うん」

「聞いてんのか？」

「うん」

「死ね」

「うん」

「「「「・・・」」」」

どうやら、放心状態にあるらしく、周りの声はおろか、音や風景すらも目に入っていないようだ。

「おい」

げしっ。リボンが回し蹴りを美琴に入れた。

「いた！ な、なに！？ り、リボン！ なんなの！？」

「おめーが人の話をきかねーからだ」

「あ、じ、ごめん」

「自信はあんのか？」

「なくはないけど……。まあ、程々に頑張るよ」

「期待してるからな」

「ツナ！」

皆で話しているところに、ディーノが部下数名を引き連れてやってきた。

「こっちに恭也来なかったか？」

「え？ ええ。来ましたよ」

「そっかー。やっぱり来たのか」

デイーノが若干呆れたかのような顔をしながらそんなような声で言った。

「あれ？　そういえば、デイーノさんて、雲雀さんと修行してたんですよね？」

「ああ。そうだけ。なんつか、まあ。大変だったな。もっと大変そうなお奴もいるみてーだけだな」

デイーノが獄寺を見てそう言った。

「おい、ロマーリオ」

「へい。ボス」

「獄寺を手当てしてやれ」

「へい」

ガシッ。ダダダー！　ロマーリオが獄寺を抱えてどこかへ走り去っていった。

「お、おい！　離せ！」

「あれ？　美琴は？」

「そういえば、いつの間にかいなくなっていますね」

皆美琴がいなくなっていることに気が付いた。

く美琴Sideく

並盛北山

「・・・くっ」

ドーン！ 美琴を中心として、爆発が起きた。

「くっ。はあはあはあ。（だめだ。これじゃあ、勝てる気がしない・
・。）」

「くすくすくす」

どこからともなく、怪しげな笑い声が聞こえてきた。

「ねえ、マフィアの掟って知ってる？ 私は知ってるよ？ だって、掟の番人だもの」

「！！！！
復讐者……か……？」
ヴァインディチェ

「そうとも言えば、違うとも言つ。私は、復讐者であり、復讐者でないもの。いや。あえて言えば私は、虹」
ヴァインディチェ
アルコバレーノ

「アルコバレーノ……」

声のした方を向くと、1人の赤ん坊が立っていた。真っ白いおしゃぶriを持つ赤ん坊が。

「ねえ。あなた、力を求めているの？」

「……違う。私が欲しいのは……」

「違うんでしょ？ あなたは、力を求めてる。私にはわかる。でも残念ね。いくらあなたが修行をしたところで、あなたの対戦相手には決して勝てない」

「……。それを何とかするのが、あなたたち最強の赤ん坊でしょ？
？」

「勘違いしないで。私たち最強の赤ん坊は、^{アルコバレーノ}7?の監視者であり、
8つ目の炎の番人」

「……」

「でも……。面白そうね、あなた。他の人間とは違うにおいがある。……そうね……。いいわ。私自ら修行をつけてあげる。こ

の修行についてこれたらあなたは、より強力な力を得られるわ。ただし、途中で少しでも挫けたら、大変なことになるわよ」

「構わない」

「……そう。まさか即答するとは思わなかったわ。まあ、いいわ。それなら、ついてきなさい。あなたを、特別なある場所、ある時代に誘^{いさな}ってあげる」

赤ん坊が振り返り、歩き始めたので、美琴はその後について行った。

- ??? -

「ここは……？」

「特別な場所。私につかまりなさい」

言われた通りに、赤ん坊につかまったら、変な呪文らしきものを唱え始めた。

「・・・。この者を、かの時代に誘いたまえ」

その瞬間、美琴は体が宙に浮いたような感覚にとらわれた。

標的23 光のアルコバレーノ（後書き）

さて、久しぶりです。何か、インターネットに繋がらなくなったので、遅くなりました。

本編は一体どういう方向に進んでいくのでしょうかね。

さて、予告です。次回は早くて金曜日の更新となるかと思います。
では。

標的24 初代

ターゲット
標的24 初代

「ん。ん？　ここは・・・？」

目を覚ますと、美琴は見たことのないような場所に立っていた。

「いや。正確には、見たことがあるような気がする場所。かな」

しかし、ここは一体どこなんだろ。見たことあるような気がするけど、私が見たものを忘れるわけないし・・・。

「誰だ！」

後ろから、若い男の声がした。

「え．．．？」

「！　あなたは．．．」

「！　いや。スマン」

「あなたがいるってことは、ここは．．．」

「どうした？」

そして、そのあとからもう一人、若い男がやってきた。

「・・・。。G・・・」

「ん？ こいつぁ・・・。驚いたな。生きていたのか・・・」

「いや。見た目こそ同じだが、違うな」

「・・・自己紹介をしたほうがいいですか・・・？」

「ああ。頼む」

ブロンドヘアの男が肯定した。

「私の名前は、西城美琴。．．．未来から．．．来ました」

「未来から．．．？」

「俺は．．．」

「知ってます。ボンゴレの創始者であり、初代ボンゴレである、ボンゴレ？世ごとジョット」

「！」

？世は驚きを隠せないようだ。目を見開いて、驚いている。

「で。あなたが、荒々しき吹き荒れる疾風のようにだと謳われた初代嵐の守護者、G」

「じゃあ、俺は知ってるか？」

「ええ。知ってますよ。初代シモン。シモン＝コザアート」

「それで？ お前はなぜこの時代に来たんだ？」

「それは、私が知りたいですよ」

初代たちがあきれていた。

「気が付いたら、ここにいたんですもの」

「・・・。折角、初代たちと合わせてあげてるのに・・・」

「！　あなたは・・・。一体どこにいったの？」

「お前は！
ヴァインディチェ
復讐者！」

そういえば、この時代からすでにいたんだっけ。この人たち。

「ジョット君。稽古をつけてあげてくれないかい？」

「稽古・・・？」

「そう。彼女に」

謎の赤ん坊は、美琴を指さしてそういった。

「・・・。何をたくらんでいる」

「なにも・・・」

「ジヨット。信じてあげようぜ」

「・・・いいだろう。付いて来い」

そして、初代達と美琴の稽古が始まった。

↓この時代での3日後↓

「ん？ 終わったみたいだね」

「できるだけのことはやったつもりだ」

「頑張ってくるのでござるよ。美琴殿」

「ありがとうございます。朝利雨月さん」

「ま、俺たちが稽古つけてやったんだから、勝ってもらわないとな」

「じゃあ、戻るよ」

「うん」

「究極に頑張るのだぞ！」

「はい！　じゃあ、いいよ」

「わかった」

赤ん坊は、もう一度謎の呪文を唱えた。

そして再び、美琴は宙に浮かぶような感覚に襲われた。

く並盛町く

「今は何時？」

「10時半」

「……よし。行きますか」

振り返ると、そこにはすでに赤ん坊はいなかった。

「結局名前を聞いてなかった気がする……。まあ、いいか」

美琴は両手に光属性の炎を灯して、並盛中に向かった。

「初代達は」

「しかし。似てたね」

「そつでいねるな」

「ああ。似ていたな。初代光の守護者・・・、ルーキス・クローバーに」

「しかし、あんなに似ているとはな」

「ヌッフ。さすがの私も驚きましたよ」

「興味ないね」

「祈ってるぞ。我らが子孫が、リングを継承できることを」

標的24 初代（後書き）

さて、早いものですね。

今回は、いよいよ光の守護者同士の対決（予定）です。

標的25 光の守護者の使命

ターゲット
標的25 光の守護者の使命

「お待ちしておりました」

美琴が並中に着くと、チェルベッロが待っていた。

「皆は・・・?」

「既に集まっています」

「こちらです」

チエルベツロに案内されて、会場に向かった。

く光のフィールドく

「あ、美琴さん！」

「美琴！」

「み、皆。もう来てたの？」

「あたりめーだろ。おめーが負けたら、もう終わりなんだからよ」

「り、リボーン！」

「では、御二方、フィールドの中央に来てください」

チエルベツロに促され、2人の守護者がフィールド場上がった。

「あんだ、門外顧問なんだって？」

「・・・」

「・・・だんまりかよ」

「リングが本物と判明しましたので、今回のフィールドについて改めて説明します」

チエルベツロが光のフィールドについて説明を始めた。

「今回、光のフィールドには一切障害物は存在しません」

「何で？」

「光の守護者の使命は、『ファミリーを明るく照らし、時にはファミリーを導く明るき光』だからだ。わかんねーって顔をしてんな」

「沢田殿。つまり、光の守護者の使命が『ファミリーを明るく照らし、時にはファミリーを導く明るき光』だからこそ、遮蔽物が全く必要ないのです。そもそも、守護者の使命自体が、初代ファミリーの中で最も争いを好まなかったとされる初代光の守護者の様相をありありと映しているとされています」

「それって・・・」

「ああ。元来、光の守護者は、戦うことを目的としたものではなく、ファミリーを導くものだったってわけだ」

だが、初代以外に光の守護者を置いた歴代ボスは1人もいなかった
そうだがな。恐らく、誰かがいらなかったんだろーが・・・。
何か引かかるな。

「それでは、光の守護者、西城美琴VS・ルーベルト・ネイリス」

「じゃあ、行くぜ！」

ネイリスが特攻をしかけてきて、美琴が吹っ飛ばされた。

「・・・」

「こんなもん？」

「ああ！」

「何やってんの？」

「「「「！！！！」」」」

ネイリスの真後ろにいつのまにか美琴が立っていた。

「なに・・・！？」

「り、リボーン。あれって」

「・・・。ツナ。大空の使命って知ってるか？」

「え・・・？」

唐突にリボーンがツナにそう問いかけた。

「???」

「沢田殿。大空たるボスの使命は、『全てに染まりつつ全てを包み込み包容する大空』です」

「それが一体・・・」

「光の守護者も同じなんだ。だからこそ、初代ボンゴレは、光の守護者を重宝したと言われている」

「それじゃあ、光の守護者の使命って、1つじゃないてこと?」

「ああ。そうだぞ」

リボンとツナがフィールドの方へ目をやった。

「喰らえ!」

ネイリスがナイフを100本美琴に投げつけてきた。

「あれって!」

「ああ。ベルフェゴールの技だぞ」

「効かないね」

「なに！？」

ナイフがあたった美琴の体が透けて、消えていった。

「うゝお おおい。あれはあ幻覚じゃねえのかあ？」

「その通りだよ。スクアール。あれは、霧の守護者が最も得意としている、幻覚さ」

スクアールの疑問にマーモンが答えた。

くツナSideく

「幻覚だつて!？」

「ああ。そーだぞ」

〈美琴Side〉

「くつ。ククク。ヌハハハハハ！ やりますね」

「!!! この気配……。D・スピード……。
デイモン

「どういづつもりだ」

「いえ。私が稽古をつけたあなたが、一体どれほど強いのか、一度戦ってみたくありませんか」

幸い、周りの奴らは誰も気が付いていない。ならば。

ドンッ！ 美琴が思い切り炎圧をあげ、空高く昇って行った。

「逃がしませんよ」

デモン
Dも負けじと美琴の後を追いかけて行った。

くヴァリアーSideく

「やるね。2人とも」

「ぬう。しかし、あれだと見えぬぞ」

「ゴーラ・モスカ」

マーモンに呼ばれて、空中の様子を映し出した。

くツナSideく

「す、すごい」

「あれが、美琴殿の本気」

「いや。ちげーぞ。まだ本気を出してねーな」

リボーンがレオンを双眼鏡に変えて、空中の様子を見ていた。

「どづいつことですか？ リボーンさん」

「勘だ」

「か、勘ですか」

リボーンの答えに戸惑う獄寺。

く美琴Sideく

「^{デイモン}D」体どういっつもりだ・・・？」

「ヌフフ。どういっつもりも何も、言ったではないですか。あなたと戦いたいと」

「・・・。今さらお前がなぜ生きているなどという質問はしない」

「光栄ですね」

「知っているからね」

「……！」

「さあ、D。^{デimon} どうする？　すぐそこまで復讐者^{ヴァインデイチエ}が来ているみたいだよ」

「当然、戦いますよ」

そして、Dと美琴^{デimon}の戦いが始まった。

標的25 光の守護者の使命（後書き）

美 琴「お久しぶりです」

リボーン「復活だぞ」

ツ ナ「そんなわけで、次回から、俺たち3人と毎回ゲストを交えてのトークを行います。お楽しみに」

美 琴「とりあえず今回はこれで終了ね」

リボーン「じゃあな」

標的26 プロトタイプ

ターゲット
標的26 プロトタイプ

くツナSideく

「……み、見えない」

「……。（どーなつてやがる。美琴だけじゃねえ。ネイリスの雰囲気も変わりやがった）」

く美琴Sideく

「どうした？」
D デイモン

「貴方こそどうしました？ 手負いの体ではこれ以上は戦えませんか？」

「！
Dデイモン・・・」

美琴が炎圧をあげて、Dデイモンに突っ込んだ。

「ヌフフ。その程度ではあなたは私に傷一つつけられませんよ」

「くっ・・・！」

「どうしました？ 悔しいですか？」

「・・・D・・・！」
デモン

「貴方に1つだけ問いましょう。なぜあなたは戦うのです？」

「・・・なぜ戦うのか・・・だと？」

「その通りです。あの時から思っていました。貴方は戦いが嫌い
なはず。それなのになぜ」

「・・・戦う理由・・・。」

確かに私は戦いが嫌い。でも、何で戦うのか、と聞かれると、答え
られない。答えられないのかな。

「ヌフフ。どうかしましたか？」

「……。わからない」

「……」

「……。なぜ戦うのか、それはわからない。けど、1つだけわかってることがある。ツナを守りたい。ツナと一緒にいたい」

「やはりボンゴレには不要な軟弱な思考ですね。誰かを守るための力など、私はいらない。ボンゴレの後継者とは認めない！」

デイモン
D・スピードが、武器に霧の炎を纏わせて美琴に突っ込んできた。

「くっ！」

ブシュッ！

「ヌフフ。さっきまでの威勢はどうしました？」

「・・・黙れ！」

ゴッ！ ドーン！ 美琴の踵落としがDに直撃して、デイモン地面にたたき落とした。

くツナSideく

「す、すごい・・・」

「やるじゃねーか」

く美琴Sideく

「はあ、はあ、はあ」

「くっ……。結構酷いことしますね。しかし、今ので力を使いきったようですね」

「はあ、はあ、はあ」

美琴の額の炎が消えかかっていた。

「おやおや。ヌッフ。今すぐ止めをさしてあげますよ」

しかし、美琴は立ちあがることができない。

「それでは、さようなら」

「・・・くっ・・・」

ドスッ！

「「「「！！！！」」」」

美琴にDの持つていたヤリが突き刺さった。
デイモン

「ヌフフ」

ピンッ。Dの手には光のハーフボンゴレリングが握られていた。
デイモン

「・・・。あれ？」

「！！！！（また変わりやがった。何なんだ？）」

「・・・。これで、俺たちの勝ち・・・。」

美琴の倒れている前でネイリスがボンゴレリングを完成させようとしていた。

「ああ！」

「しし。当然」

「・・・さ・・・ない」

「ん？」

「させ・・・ない」

「なに!?!」

「「「「!?!」」」」

胸を貫かれたはずの美琴が立っていた。

「・・・そう、か。なるほどね。咄嗟に実態と幻覚を入れ替えたか。さすがだな」

「うゝお おおおおい! どういうことだあ!」

「幻覚と実態を咄嗟に入れ替えたのさ」

「でも、もう戦う力は残ってないようだな。立っているのもやっとみたいだしな」

「くっ・・・」

ダメだ。目がくらむ。炎が尽きたのか・・・。こんなところで負けるわけには、いかないのに・・・。でも、ネイリスの言とおりに立っているのもやっとの状況。ど、どうすれば・・・。

「！！！」

こ、これは・・・。

美琴は胸のふくらみに気が付いた。

ふと目をやってみると、^{ボックス}匣が入っていた。

え・・・？　これって、^{ボックス}匣兵器・・・？　何でこんなものが

でも・・・。これなら・・・。だけど、この時代ではまだ存在してないから、バレないように。

ボウッ！　隠し持っていた大空のリングに死ぬ気の炎を灯した。

！！！！　小さい・・・。でも・・・。やってみるしかない！

カチッ！　キュオオオオオオ！

ボウッ！　これって・・・。

「どうした？ 降参するのか？」

「・・・」

ポウッ！ 美琴の額に、再び死ぬ気の炎が灯った。

「なにっ！？」

「み、美琴の額に死ぬ気の炎が！」

「ネイリス！ リングは返してもらっ」

美琴の手には、ネイリスが持っていたはずの光のハーフボンゴレリングが2つ握られていた。

「なっ！　いつの間に！」

「スクアーロ。今の見たかい？」

「いいや。見えなかった」

「しし。さすがの王子でも見られなかった」

標的26 プロトタイプ（後書き）

美 琴「さて、本日のゲストは、リボーンです！」

リボーン「ちゃおっす。しかし、何で俺なんだ？」

美 琴「面倒くさかったから」

ツ ナ「ガーン」

美 琴「えゝ、時間もないことですので、質問です」

リボーン「唐突だな」

美 琴「コスプレの衣裳はいつも自分で作ってるのですか」

リボーン「その通りだぞ。こう見えて、何でもできるからな」

ツ ナ「ガーン」

リボーン「ツナ、ガーンしか言ってねーぞ」

ツ ナ「ガーン」

グダグダ。

標的27 動き

ターゲット
標的27 動き

「今の動きは・・・」

「構えろ。ネイリス」

「・・・。いや。もういい」

「なに・・・？」

「これ以上やって、この後の計画に響いても困るからな」

ネイリスが何かを呟いた。

「・・・。わかった。チェルベッロ！」

「はい」

「光のボンゴレリングは西城美琴のものとなりましたので、この試合、沢田綱吉氏側の勝ちとします」

「やった！」

「それでは、明晩の対戦カードを発表します」

「明日は、雨の守護者同士の対決です。それでは」

それだけ言い残して、チェルベッロとヴァリアーがその場から消えた。

「・・・（この後の予定・・・だと？）」

「美琴！」

「ツナ・・・」

「どうしたんだ？」

「リボン。・・・いや。何でもない」

そして、美琴がその場に倒れ込んだ。

「美琴！」

「美琴さん！」

「大丈夫か！？」

皆は、美琴を自宅に運んで、寝かせた。

「・・・。どうやら、疲れがたまっていた見てーだな」

「疲れ？」

「ああ。そうだぞ。とりあえず、一日休めば安心だぞ」

「よかったー」

「んじゃ帰るぞ」

「え？ 看病はしなくていいの？」

リボーンがこいつ何言ってるんだ？ 的な顔でツナをマジマジと見る。

「おめーは、寝ている女子の部屋に一日中いるつもりか？」

「え？ あ！」

ツナが何を言いたいのかわかったようで、赤面した。

「帰りましょう、10代目」

「うん」

くヴァリアーSideく

「？お おおおい！ てめえ！ なぜ止めたあ！」

「勝てないと思ったからだ。悪いか？ S・^{スベルビ}スクアーロ」

「ちっ」

スクアーロは、舌打ちをしながら部屋を出て行った。

くツナSideく

「何はともあれ、勝てたからよかった」

「そうだな。これで了平・美琴と勝って、ランボ・獄寺・ツナと負けたことになるな」

「そうそう。それで聞きたいことがあるんだよ、リボーン」

「何だ？」

「山本と雲雀さん、霧の守護者が勝った場合、俺たちの勝ち越しになるだろ？」

「ああ」

「でも、3人のうち2人が勝てば勝ち越しなんじゃないの？」

ああ、そんな話か。というような顔をするリボーン。

「大空のリングは、2勝分の扱いらしい」

「それだと、ヴァリアーが4勝。で、オレたちが2勝ってことか？」

「そうだぞこれから先、誰か1人が負ければ、俺たちの完敗だぞ」

「じゃあ、皆に頑張ってもらわないと」

「確かにな。だが、気になることがある」

リボーンが珍しく深刻な顔をしていた。

「気になること？」

「いや。何でもねえ。それより、明日、零地点突破を完成させるぞ」

「うん」

く 翌日・並盛山 く

「よし。行くぞ！」

「うん」

キユオオオオオオオオ！ ドーン！

「
いてて
」

「何やってんだ。オメー。死ぬ気でやらなきゃマジで死ぬぞ。ツナ」

「わ、わかってるよ」

「なら真面目に・・・」

「でも、心配で」

「おめーが心配したところで何もできねーだろ」

「でも・・・」

リボーンが殺気を感じて、後ろの森に銃を向けた。

「誰だ」

「危ないね、リボーン」

「美琴！」

「もう動いていいのか？」

「うん。なんとかね」

「……嘘をついてんじゃないぞ。どう見ても辛そーじゃないか」

美琴の顔色の悪さを一瞬で見破った。

「は。さすがリボン。やっぱりリボンには嘘はつけないね」

「どうしたんだ？」

「うん。修行はどうなってるかなって」

「なるほどな」

いボーンが呆れた声で言った。

「まあまあだな」

「そっか。本当は私が修行をつけてあげられればいいんだけど、こんな状況だからね」

「心配はねーぞ。俺が修行をつけてるからな」

「そっか。頑張って。3人とも」

「うん」

「ああ」

「はい」

「じゃあ、行こうか。皆」

「うん」

「ああ」

「はい」

〔並盛中〕

「みんな。お待たせ」

「お待ちしておりました。それでは、ご案内します」

標的28 山本武VS・S・スクアーロ

ターゲット
標的28 山本武VS・S・スクアーロ

「な、なんじゃこりゃ」

山本が校舎のドアを開けると、中が壊滅状態だった。

「すげえな、これ」

「お待ちしておりました」

どこからともなく、チエルベツロが現れた。

「！！ チェルベツロ！」

「バトルフィールド 今宵の戦闘場所は、このアクアリウムです」

「アクアリウム・・・？」

「はい。バトルフィールド 雨の守護者に相応しい戦闘場所となっています」

「なるほどな。ん？ スクアーロは？」

「あちらにいらっやいます」

チェルベツロが校舎（？）の三階を指差した。

「ん？ あ、あんなところに・・・」

三階の壊れた部分に、スクアーロが立っていた。

「？お、おおおおおい！ 逃げ出さずに来たかあ！」

「ああ。逃げるわけにはいかなーからな」

「はん！ その勇気だけはほめてやる！」

「それでは、雨の守護者以外は、校舎から退避して下さい」

チエルベツロの指示により、山本とスクアーロ以外の全員が屋外へ移動した。

「雨の守護者戦は、校舎の壁に設置した、巨大スクリーンに映し出されます」

すると、アクアリウムと化した校舎の壁に、山本達が映し出された。

「また、規定水位に達すると、獰猛な生物が放出されます」

「獰猛な生物？」

「校舎屋上」

「山本武……。なんとか勝って、我々のもとへつないでもらうぞ」

謎の人物の影があった。

く第二校舎屋上く

「皆殺しにすれば早いのに」

雲雀が眠そうにそう言った。

くバトル・フィールドく

「……。両名が所定の位置に着きました」

「それでは、雨のリング、山本武VS・S・スクアード、試合開始
バトル・スタート
！」

「？お、おおおおおい！行くぞお！」

剣を構えて、スクアーロが山本に突進してきた。

「お、お？　えと、確かこういう時は・・・」

山本が剣先を水の中につけて、水を巻き上げた。

「す、すごい！」

「ちっ」

（観覧席Side）

「リボン、あれは？」

「時雨蒼燕流だよ、ツナ」

「え？」

ツナが声をした方を見ると。

「み、美琴殿！」

「や、元気？」

「元気も何も、美琴殿は帰られたのではないのですか!？」

「いや。心配になってね」

「そ、それだけの理由で」

「・・・あれは、時雨蒼燕流守式一の型、逆巻く雨」

「何で美琴が知ってるの？」

「それは、私が協力してあげたから」

なるほど、という風に納得するツナ。

本当に単純だな、ツナは。

く
アクアリウムSide
く

「！ 次が来る！」

「？お おおおおおい！」

スクアーロが再び剣を振り回しながら、山本に突進してきた。

「次は……。時雨蒼燕流守式七の型 繁吹き雨！」

刀で水を回転するように巻き上げ攻撃を防いだ。

「！！！！（この型……。やはり。いや、もう一度試してみるかあ）」

「行くぜ！」

山本が前に出た。

「山本がはじめて前に出た！」

「行くぜ！ 時雨蒼燕流攻式五の型五月雨！」

通常の剣術で言うところの中斬りを放ちながら刀を素早く持ち替え、相手の守りのタイミングを狂わせる変幻自在の斬撃を放った。

「ぐあ！」

「やった！」

「いや、まだまだよ」

「え？」

「見てればわかるよ」

倒れていたスクアーロが立ちあがった。

「あ、あれ？」

「？お、おおおおい！ この程度かあ！」

「そ、そんな！」

「見切っていたんだよ」

「み、見切った!？」

「うん。反射というにはレベルが高すぎる。恐らく、スクアーロは時雨蒼燕流を・・・知ってる」

「し、時雨蒼燕流を知ってる!？」

そう。スクアーロは知っている。いや、知っていなければこの動きはムリだ。

「?お、おおおおおい! どうしたあ! もう終わりかあ!」

スクアーロが何処か余裕な表情をしていた。

標的28 山本武VS・S・スクアール（後書き）

お久しぶりです。やっとテストが終わりました。

標的29 時雨蒼燕流（前書き）

今さらですが、基本的にオリジナル展開です。ていうか、若干設定が変更になってるところがあります。

標的29 時雨蒼燕流

ターゲット
標的29 時雨蒼燕流

「？お おおおい。どうしたあ」

「・・・。すごいね、スクアール・・・」

「？お おおおおい！ てめえ、腑に落ちねえことがある」

「なに・・・？」

「なぜ刃じゃなくミネを使ったあ」

！！！！ 観客席に衝撃が走った。

「は、刃じゃなくて、ミネを使った・・・？」

「はは。当たり前ーだろ？ 俺たちは殺しあうために戦ってんじやねーからな」

「あめーぞお。死になあ！」

ズア！ スクアーロが剣を前でふりまわしながら水を巻き上げて突っ込んできた。

「！」

「……スコントロ・ディ・スクアール 鮫特攻。さすがだね、スクアール」

ガキッ！ それに圧されて、壁が壊れて、山本に飛んでいった。

「！」

キイイイン。山本が壁の破片を刀で防いだ。

「あつぶねー」

「……（防いだと……？）」

「行くぜ」

再び山本が剣を構えて前に出た。

「？おゝおおおい！　ぬるいぞお！」

ガキイイイン！

「！」

ドガッ！

「くっ」

自分の右腕に刀の柄で打撃を与えた。

「・・・。
アタック・デイ・スクアール
鯨衝撃。強烈な打撃で相手の神経をマヒさせる技。でも、やるね、山本。自分の刀を使って、その硬直を解くなんて」

「・・・。あいつ、これで当分右腕は使えないね」

「・・・。くつ。！」

ガツ。山本の目に柱の破片が刺さった。

「！ 山本！」

「（・・・一回目は避けられたけど、二回目はさすがに気がつかなかったな。いや、正確には変わったというべきか・・・？）」

「いっつー。！」

ドガッ！ スクアーロの攻撃が山本に直撃し、山本が吹き飛ばされた。

「ぐあ」

「ああ！」

「？お　おおおい。残念なお知らせだあ」

「残念なお知らせ・・・？」

スクアーロが勝ち誇ったような顔で山本を見た。

「お前の使うその技は知ってる」

「なに・・・？」

（美琴 Side）

「どういうこと？ スクアードが時雨蒼燕流を知ってる？」

「スクアードは以前、ヴァリアー内で最もヴァリアーのボスに最も近い男だと言われていたんだよ」

「え？ どういうこと？」

「スクアードは、ヴァリアーに入隊する時、当時のヴァリアーのボスだった剣帝と呼ばれた、テュールと戦うことを条件にしたんだ」

「どうして？」

「スクアーロが剣を極めるためだったんだよ」

「剣を極める……？」

「そ。スクアーロの剣技は当時完成されていなかったんだ。それをテュールとの戦いで完成した。それも2日間の死闘の末にね」

「す、すごい」

「そして、剣帝を倒した後、更にそれを完璧なものにするために旅に出たんだ。そして、日本で細々と続いているある剣流の噂をスクアーロは手に入れたんだ」

「！　それが、時雨蒼燕流！」

」
「そう」

く 山本 Side く

「そして、そいつは、最後に八の型を放って俺に敗れたあ」

「
・・・
」

「さあ、放ってみろお！ 八の型・秋雨を！」

・・・秋雨・・・？ どういうことだよ、オヤジ。俺が習ったのは、
篠突く雨だぜ？ ・・・。そうか。そういうことかよ、オヤジ。

山本が立ちあがり、八の型を構えた。

「……行くぜ、時雨蒼燕流……」

ダッ。山本が走ってスクアーロに向かって行った。

【時雨蒼燕流攻式八の型・篠突く雨】

ガッ！

「なに……？」

ドサ。スクアーロがその場に倒れ込んだ。

「てめえ、時雨蒼燕流以外の型も放てるのか！」

「いいや。違うぜ。今のも時雨蒼燕流だぜ。それも、俺の親父が作ったな」

「・・・。だから八代八つの型なんだな」

「そういうことが」

「く、くそお！」

「行くぜ、時雨蒼燕流九の型」

山本が野球のバッターの構えをとった。

「なに・・・？ 野球でもするつもりかあ！」

「生憎、これしか取り柄がないんでね」

「山本の奴、自分の新しい型を放つつもりだぞ」

「で、でも。山本のあの刀は」

「要するに、あの刀を変形できなければ、山本が時雨蒼燕流を継承する刺客がないってことなんだよ」

「だからこそ、常に流派を超える流派なんだよ。時雨蒼燕流は」

「負けねえ！」

ゴッ！ 再びスコントロ・ディ・スクアード鯨特攻を放った。

ズア。水を巻き上げ、姿を隠した。

「！　ちっ！」

スクアーロの後ろの水に山本の姿が映った。

「俺の剣に、死角はねえ！」

スクアーロの剣が後ろの方向に曲がった。

ズサアー。その水が流れ落ち、そこから山本が消えた。

「なに！？」

「こっちだ。スクアーロ」

「!?!」

「攻式九の型・うつし雨」

「な・・・に・・・?」

ドサ。

「これが・・・敗北・・・」

標的30 惑いし光

ターゲット
標的30 惑いし光

「ぶわーはっは！ ざまあねえな！」

「はあ、はあ、はあ。勝ったぜ」

スクアールからとった雨のハーフリングの欠片を併せて、完全なものにした。

「やった！」

「今アクアリウムに入るのは危険です」

「え？」

「規定水位に達したため、獰猛な生物が放たれました」

「！　おいおい。スクアーロはどうすんだよ」

「スクアーロは敗れたため、命の保証はしません」

冷酷に言い放った。

「仕方ねえな。よつと」

山本は倒れているスクアーロを抱え上げた。

「？お おおおい。てめえ、どういつつもりだあ」

「ほっとけないだろ？」

「俺の剣士としての誇りを汚すなあ！」

ドガッ。ガラガラガラ。山本達が乗っている場所が崩れ始めた。

ザザザ。すると、すぐ近くまで、獰猛な生物（鮫）が近付いてきていた。

「げっ。マジで？」

「ちっ」

ドグッ。

「ぐあ
」

山本が蹴りあげられて、上の階に移動した。

「！ スクアーロ！」

「俺の事は気にするなあ！」

ガラガラガラ。スクアーロの乗っていた部分が完全に崩れ落ちた。

「スクアーロ！」

辺りがシーンとし始めた。

「美琴Side」

本当は、大丈夫だって言っただけだ……。

「では、明晩の対戦カードをお知らせします」

「明晩は、霧の守護者同士の対決です」

「それでは、明晩。お待ちしております」

淡々といい、どこかに消え去った。

「ヴァリアーの連中も消えたな」

「あいつら、仲間の事なんかどうでもいいと考えてるんじゃないか」

「？ ツナ、どうした？」

「いや。美琴がいないなーって」

「そういえば見かけませんね。いつもいつも直ぐに何処かに消えま
すよね」

く並盛神社く

「クフフ。やはりここでしたか」

「・・・骸・・・。何故ここに？」

「いえ。あなたに少し頼みたいことがありますね」

「・・・頼みたいこと・・・？」

「ええ。クロームにより強力な幻術を教えてあげてほしいのですよ」

骸らしくないことを言うな、と思いながらも骸を見続ける。

「どうして？ 幻覚なら、貴方が教えているはずでしょ？」

「いえ。事情がありましたね」

「・・・ふうん。いいけど。クロームの体から出ないと、教えられないけど？」

「クフフ。それでは・・・」

妙な笑い声とともに骸の姿からクロームの姿に変わっていった。

「とと」

ポス。クロームが美琴の方へ倒れこんできた。

「・・・。クローム？　大丈夫？」

「ん・・・。え・・・？　・・・誰・・・？」

「初めまして、クローム。私は、ボンゴレ光の守護者、西城美琴」

「あ・・・私は・・・」

「知ってる。ボンゴレ霧の守護者、クローム髑髏」

「・・・どうして？」

「骸から聞いたんだよ」

「・・・骸さま・・・から？」

「そう。それで、君に修行をつけて欲しいって」

「修行・・・。それが骸さまの命令なら」

今さらで思ったけど、この子、何でも命令聞いてくれそうだなね。

はっ！ いけない！ コアなファンがつくかと思った。

「？」

「・・・さて、修行を始めようか。修行は簡単。霧の幻術を強化する」

クロームが静かに頷いた。

「じゃあ、行くよ！」

クロームと美琴の霧の修行が始まった。

標的31 真実

ターゲット
標的31 真実

「はは。どうしたんだい？ 君の力はこの程度かい？ 綱吉くん」

「くっ・・・」

「沢田さん！」

「大丈夫だ」

「で、でも！」

「心配するな。お前は、俺が守る！」

「沢田・・・さん・・・」

「はっ！」

く夢落ちく

「ゆ、夢か。でも、今のつて・・・」

うつん。今考えてても仕方ないか。・・・そろそろ、ツナたちの
もとに行くか。

く並盛山く

「くっ」

キィィィン。ツナのグローブにバジルの武器が当たった。

「お。やってるね」

「美琴か。どうした？」

「ん？ 何が？」

「……いや、何でもねえ」

ふうん。

「にしてもツナ、真面目にやんねーと死ぬぞ」

「だ、だけど。気になって。ねえ、いい加減教えてよ！ 一体霧の守護者って誰なの？」

「仕方ねーな。とりあえず、飲み物買ってこい。俺はコーヒーな」

「あ、拙者は烏龍茶で」

「私はミルクティーね」

「はいはい」

3人にパシられてツナは麓まで飲み物を買に行った。

「ふう」

「そういえば、美琴殿のご両親は何をなさっているんですか？」

「おいバジル」

「はい、何でしょうか」

「いいよ。リボーン」

リボーンが何をしたいのかを察し、制止した。

「私のお父さんとお母さんは、ボンゴレの門外顧問CEDEFに所属していたんだ」

「・・・え？」

「お父さんは家光叔父さんの右腕だったんだ」

「え、でも。だっ たって一体」

「死んだんだよ。7年前にね」

「7年前というと・・・」

「ゆりかご」

「ゆりかご」。7年前に起きた、ボンゴレ至上最悪のクーデター事件。

「その「ゆりかご」の時、9代目の安全確認及び保護のためにお父さんとお母さんはかりだされたんだ。でも、9代目は無事に帰って来たのに、お父さんとお母さんは帰って来なかった」

「・・・」

「別に私は9代目を恨んではないし、家光叔父さんも恨んではない。でも、なぜお父さんとお母さんが死んだのかは話してくれない」

「それは・・・！」

「分かってる。何故死んだのかは分かってる。でも、ちゃんと話してほしい。ただそれだけ。・・・。ごめん、話が逸れたね」

「いえ」

「さて、ちょっとツナを迎えに行ってくるね」

そう言うと、美琴は麓に走って向かって行った。

「リボーンさん、今の話」

「本当だぞ。あいつは話さなかったが、「ゆりかご」が起こり、それが収束した後、あいつはボンゴレの孤児院に入ったんだ」

「孤児院、ですか」

「ああ。そうだぞ。それからしばらく孤児院で過ごしていたんだが、「ゆりかご」から丁度1ヶ月後、あいつは孤児院から姿を消したんだ」

「それって一体」

「あいつがいなくなっていた期間、アイツが何をしていたのか、どこに行っていたのか知るものはいねえ。そして4年前、あいつはボンゴレに戻ってきて、C E D E Fに入ったんだ」

「4年前、ですか」

「ああ。そうだぞ。C E D E Fに戻って来たアイツは、今までのアイツとは少し雰囲気が変わっていたらしい」

「え？　どういことですか？」

「さあな。俺やお前は、”今の”アイツしか知らねーからな。変わったと言われてもピンとこねえ」

「麓」

「あ、やっとあつたー」

「うはっ。うまそつだぴょん」

「はあ。メンドイけど、箱と貰っよ」

うわ、凄い。お菓子を箱買いかよ。でも、こんなところに中学生？
あれ？ あの制服、黒曜中の？

「ん？ 何見てるびょん！」

「ひっ！ あ、お、お前は！」

「んあ？ 今すぐ消えねーと、かみつくびょん！」

「ひー！」

ドサ。

「全く、なさけないね、ツナ」

「んあ？ あ、てめーは！」

「ボンゴレ門外顧問C E D E Fの西城美琴・・・」

「や、久しぶりだね。犬、千種」

目の前にいたのは、かつてツナたちが戦った、黒曜中の人たちである。

「それにしても、そうしてるとただの嫌な中学生だね」

「てめー。調子乗ってつとぶっ刺すぞ」

「お、出たな。カバチャネル」

あ、リボーン。

「なんらと！ これはサイチャネルら！ これ、ツノら！」

「犬。黙ってて。話がややこしくなる」

「なんらと！ もっさり眼鏡！」

「犬。怒るよ」

「まあまあ。それよりも、アイツはどうしたの？」

アイツと言われて、犬と千種はお互いに顔を見合わせた。

「……。雲雀恭也を見に行った」

「アイツがか？ 大丈夫なのか？」

「さあね」

く並盛町く

「クフフ。また一段と強くなったようですね」

「！・・・。」

気のせいか、という風にまた前を向いて歩き始めた。

標的31 真実（後書き）

さて、次回から暫くの間、オリジナルキャラの初期設定とかを暴露して行こうと思います。お楽しみに。

それと、何か質問がありましたら、どうぞ。

標的32 超能力（前書き）

さて、久々のオリジナルストーリーです。

標的32 超能力

ターゲット
標的32 超能力

「う……。はっ！」

「あ、やっと目を覚まされたか、沢田殿」

「バジル君」

「10代目！」

「獄寺君……。そういえば、ここは？」

「何言ってるんすか。並中の体育館です」

「あ、そうか。今日は霧戦の日か。あれ？ 美琴は？」

ここでツナは、美琴がいないことに気が付き、バジルに質問した。

「美琴殿ですか？」

「うん」

「用事があると言って、イタリアへ行きました」

「ええ！？ い、イタリアへ！？」

「はい」

「そ、そっか。大丈夫かな」

「美琴殿の事です。大丈夫なはずです」

そ、そうだよ。美琴だもんね。大丈夫だよ。

心の中ではそうは思いながらも、やはり美琴の事が心配なツナ。

「イタリア・アテネ国際空港」

「ふう。やっと着いたか。時間かかるな」

・・・さて、行きますか。

「イタリア某所・シモンファミリアジト跡」

「……ここにいるはずんだけど」

「ふふ。来るころだと思ったよ。西城美琴さん？」

「やっぱりここにいたか。光のアルコバレーノ」

「……改めて自己紹介をするよ。私は、光のアルコバレーノ、リヒテット」

リヒテットと名乗ったアルコバレーノは、以前あったような姿ではなく、帽子を深々とかぶり、目が見えずそして、真っ白いおしゃぶりを身に着けていた。

「……で？ 私に用事って何なの？」

「これから起こることだよ」

「……知ってる。ツナたちが10年バズーカに当たって未来に

飛ばされるんでしょう？」

「よく知ってるね」

「当然でしょ？」

勝ち誇ったような表情を見せる美琴。

「別世界から来たから？」

「・・・そう、だね。私のこの精神は別世界から来たけど、この体はこの世界のもの」

「そうだったね。貴方は完全に特異な存在。いわば、特異点」

「で？ アンタの用事って、そんなつまらない内容なの？」

「いいや。もう一つ。^{デイモン}D・スピードの事に関してだよ」

「・・・^{デイモン}D・スピード・・・」

「まさか今でもアイツが絡んでくるなんて思わないよね」

「いいや。私は分かった。^{デイモン}Dの事だもの。アイツは、自分の望むボンゴレを作るまで死なないからね」

「厄介な奴だよ。^{デイモン}D・スピードは」

「そんなこと言って、嬉しそうだよ？ 口調が」

「さすが、^{テレパス}精神感應能力者だね。ははは」

「あら。貴方だって、あそこから私を狙ってる弓矢はなかなかのも

のだと思うよ？ 念動能力者^{サイコキ}としては。ふふふ」

お互いに顔を見合つて、睨み合いながら笑つ2人。

「それよりさ」

「あら。貴方も気づいていたの？」

「当然。99.9999999999%の殺気を消しているのはさすがだ
と思うけど、0.000000001%の殺気をあの茂みから感じるね」

「誰？ 出てきたら？」

「そうか……。それなら、貴様らの命、頂戴いたす！」

いつの時代の人間だ！

まさに忍者の格好をして、1人の男が茂みから飛び出してきた。

「・・・忍者・・・？」

「お主たちが、我々のファミリーを滅ぼしたということは分かっている！」

「ファミリー・・・？」

「何のじゃ？」

「とぼけるな！」

「いや。とぼけてないんだけど」

「なら、嫌でも思い出してもらおう。我が、ファミリーの名は、ジェッソファミリー！」

「！！ ジェッソファミリー・・・だと？ この時代にジェッソは存在していないはず。それなのに、どうしてこの時代にジェッソが・・・？」

「死ね！」

「え？ あ、うわ！」

「むむむ。不意打ちとは卑怯だな」

「黙れ！ 我がファミリ―も」

「不意打ちで滅ぼされたのだ！ 貴様らボンゴレの人間に！」

「待て。私はボンゴレじゃないぞ」

当然の反論。

「え？ だ、だって。ボンゴレ守護者と一緒にいるじゃないか！」

「これが見えないの？」

そう言って、真っ白いおしゃぶりを指差した。

「そ、それは！！！」

「そう、私は・・・」

「何だ？」

2人がズツこけた。

「は！？ 知らないの！？」

「・・・。私、頭痛くなつたから帰る」

「ああ。待つて、美琴」

「ていうか、貴方、キャラ変わってない？」

「・・・何の話・・・？」

くっ。ものすごい勢いで知らんぷりされた。

「まあ。気を取り直して、これは、おしゃぶり。最強の赤ん坊アルコバレーノつて聞いたことない？」

「なに！？ 貴様、最強の赤ん坊アルコバレーノだというのか！？」

「そうだけど・・・」

「くっ。覚えてろ！」

ええー！？

「えい」

「ぬお！？」

「喰らえ。ランビ・アン・フルミネ電光の雷撃」

「ぎゃあああああ！」

真黒になって地面に落っこちた。

エレクトロマスター サイコネシス
電撃使いと念動能力の併用である。因みに、お忘れかと思いますが、
美琴は、霧の幻覚も使えます。

「さて、帰ろう」

「・・・大丈夫なの？ あれ」

「ああ。真黒になってるから？ それなら心配ないよ。幻覚だから」

「ああ。なるほど」

それでは次回に続く。

標的32 超能力（後書き）

初期設定→美琴編→

元々の名前は、白井黒子でした。

それだとパクリだと言われたので（友達に）、試行錯誤の末、西城美琴に決まりました。因みに、美琴は超電磁砲や禁書目録レールガン
インデックスに出てくる、御坂美琴が元ネタではありません。

では、また次回

標的33 霧戦、クローム髑髏VS・マーモン

ターゲット
標的33 霧戦、クローム髑髏VS・マーモン

「そういえば、この体育館って、あんまり仕掛けがないよね」

「その通りだぞ。霧の守護者は、その性質ゆえに障害物は不要なんだ」

「それでは、沢田綱吉氏側の霧の守護者とヴァリアー側の霧の守護者は、中央に集まってください」

「あ！ そういえば、こっちの霧の守護者って誰なの！？」

「おめーらがよく知っているやつだぞ」

皆は知らないという顔をしたが、このあとすぐに、誰なのが明らかになるのだった。

「!?!」

「そうしました？ 10代目」

「あいつだ。あいつが来る」

「アイツって、誰の事ですか？」

「六道骸が来るんだよ!」

「クフフフ。Lo ne go・Il mio nome ?
Chro me・Chro me 骸骨・（否。我が名はクローム
クローム骸骨）」

「え・・・？ 違う。骸じゃ・・・ない・・・？」

ツナが来ると思っていた骸ではなく、女の子が現れたので、驚いていた。

「いいえ。見てください。あの左目の眼帯。あれはどう考えても、骸の目を隠しているんです」

「・・・。いや。違うよ。この子は骸じゃない」

「いつ！？ し、正気ですか！？ 10代目！」

「うん。何か、そんな感じがするんだ」

「なんらてめー！ 文句あつか？」

「くっ。じ、10代目がそういつなら」

「ツナ」

「な、なに？」

背後から不意に声をかけられて、後ろを振り返ったツナの目に映ったのは、イタリアにいるはずの守護者、美琴の姿だった。

「み、美琴！？ イタリアにいるんじゃないの！？」

「・・・。うん、細かいことは気にしないで」

ええー！？

「クローム。大丈夫？」

「うん」

クロームが縦に少し頷いた。

「ボス」

「・・・うん。美琴が認めているなら、俺は何も言わない。よろしく、クローム」

「うん」

頷くと、クロームは振り返らずに真っすぐ体育館の中央に向かって行った。

「それでは、両者ともに本物のハーフリングと確認しました」

「では、霧のリング、クローム髑髏VS・マーモン。勝負開始」
バトルスタート

「むむむ。女の術者か。女だからって手加減しないよ」

「・・・。こつちも赤ん坊だからって手加減しない」

トン。

トライデント
三叉槍の柄の先を地面に軽くつけた。

ビキビキビキ。床が割れ始めた。

「うわ！ 床が」

「バカツナが。お前はこの技を知ってるぞ」

「え？」

「こんな子供だましじゃボクから金とはれないよ」

マーモンのフードの下からツタのようなものが出てきてクロームの首を締め始めた。

「ああ！」

「そんな！」

「弱すぎるね。こんなんじゃ見世物にもなりやしない」

「誰に話してるの？」「こっち・・・」

マーモンに締め付けられていたクロームはボールカートになった。

「！ 女がバスケットボールになったぞ！」

「・・・。あれこそ幻覚」

「幻覚って前にも・・・」

「忘れたの？ 六道骸の地獄道でしょ？」

「！！！」

「骸の地獄道・・・。あ、そういえば、さっき言ってたある性質ってなんなの？」

「霧の守護者の使命は知ってるか？」

「え？」

「無いものを在るものとし在るものを無いものとする事で敵を惑わしファミリーの実態をつかませないまやかしの幻影。それが霧の守護者だぞ」

「そしてそれが霧」

「よかったよ。ある程度の相手で。これで思う存分アレが使える。あのマヌケチビ2人の前でね」

バキン。マーモンの隊服の下から鈍い音が聞こえた。

ジャラララ。すると、謎の鎖が落ちてきた。

「ファンタズマ、いこう」

マーモンの頭の上に乗っていたカエルが姿を変えていった。

「か、カエルが！」

コオオオオオオオ！ マーモンの服の下から藍色のおしゃぶりが出てきて光っていた。

「あの巻きガエルと藍色のおしゃぶり。生きてやがったのか。・・・
・・・コラ！」

「やはりな。ヤツの正体は、アルコバレーノ、バイパー」

「と、飛んでる！ あいつもアルコバレーノ！？」

「ああ。ヤツも最強の虹の1人だぜ」
アルコバレーノ

「藍色のおしゃぶりのバイパー。アルコバレーノーのサイキック能力をもつとも言われている術者だ」

「サイキックって・・・超能力じゃないっすか。そんなオカルトな」

「獄寺。私も超能力者だけど？」

美琴の爆弾発言。

「な、なんですって！？ 美琴さんが超能力者！？」

「うん」

「その話はまた後だ」

「アイツは戦いの最中行方不明になったと聞いていたがまさか生きていたとはな」

「誰だろうと・・・負けない！」

「あのバカチビ相手じゃ並の術者じゃ勝てないぜ」

タツ。クロームが走って三叉槍トライデントを振りかざし、攻撃をした。

「けなげな攻撃だね」

ヒュンヒュンヒュン。マーマンバイパーの周囲に突如多量の大蛇が現れた。

「ムム。この大蛇、幻覚ではないのか」

ドサ。マーマンバイパーが大蛇の重みに負けて、床に落ちた。

「あれは！ 骸の畜生道！」

「10代目！ やはりあの女、骸に憑依されてますよ！」

「ただ、あの子からは自分の意志を感じるんだ。骸に憑依されてい
るなら、感じないはずなのに。」

「バツ！ おしゃぶりが光り、大蛇が飛び散った。」

「！」

「僕もそろそろ力を解放するよ。君の正体はその後でゆっくりと暴
こう」

クロームは三叉槍^{トライデント}を振りかざし、再び柄の部分を地面につけた。

カッ！ ドドドド。地面を突き破って、火柱が現れた。

「うおおっ」

「あち」

「うわ！」

ズボ。マーモンバイパーは火柱から抜け出てきた。

「確かに君の幻覚は一級品だ。一瞬でも火柱にリアリティを感じれば焼け焦げてしまうほどにね。それ故に弱点もまた幻覚」

ブアッ！ マーモンバイパーから発せられた光が火柱を凍らせた。

「なぬっ！？ 火柱が凍った！？」

「不覚にも幻覚にかかっちゃまったぜ、コラ！」

「俺もだ。さすがバイパー^{マーモン}だな」

「幻術とは人の知覚すなわち五感を司る脳を支配するということ。術者の能力が高ければ高いほど支配力は強く、術にかかる確率も高まり、より現実味^{リアリティ}をもつ。そして、術士にとって幻術を幻術で返されるということは知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示す」

ビキビキ。クロームの足が凍っていった。

「ああ！」

「・・・。(クローム。もう少し、もう少し耐えて。そうすれば)」

「どうだい。忌まわしきアルコバレーノの力は。さあ、君の正体を聞こうじゃないか。何を念じても無駄だよ。君はもう僕の幻覚世界の住人なんだからね」

ブウン。

「キャア」

クロームがマ^{バイパー}ーモンを吹っ飛ばした。

「ヤベーぜ、コラ」

「ああ」

「うっ」

クロームが三叉^{トライデント}槍を必死に抱えた。

「むむ。どうやらその武器大事なもののようだね」

「！ ダメ。ダメー！」

バキィン。クロームの三叉槍トライデントがマーモンによって破壊された。

「！！！！ え？ え？」

「お、おい。 見てみる」

「腹が……。 腹が陥没していく」

「ひい！ これも幻覚！？」

「ムム。これは現実だ。 どうなっている。 何なんだ、この女」

「クロームは、事故に遭ったんだ」

「え？」

美琴の口からあることが伝えられた。

「その時、内臓のいくつかと右目を失ってしまった」

「ムムム。にわかには信じがたいが、彼女は幻覚でできた内臓で延命していたらしいね」

「それで幻覚のコントロールを失い、腹が潰れたんだな」

「骸・・・様。力に・・・なりたかった」

（上出来だよ、クローム。これで、XANXUSの目的が分かった。もう、眠っていてもいいよ。クローム）

「あり……がとう」

クロームの口から感謝の言葉が小さく誰にも聞き取れないほどの大きさに漏れた。

「……。XANXUS。何を考えている」

美琴も小さくポツリと言った。

クフフフ。上出来でしたよ、クローム。君は少し眠りなさい。

カチ。美琴は後ろで、ボックス匣を霧のリング（精製度Bのイリュージョンリング）で開匣した。

クロームの周りを霧が包んでいった。

「なーに。最後の力を振り絞って自分の醜い死体を隠そうとする女術士によくあるパターンさ」

「どうした、ツナ」

「・・・来る」

「おい、ツナ？」

「あいつが来る！」

「あ、あいつ？」

「六道骸が来る！」

シューアアアア。

「ムム！？」

クロームの右目の眼帯が外れた。

「クフフフ」

標的33 霧戦、クローム髑髏VS・マーモン（後書き）

初期設定↪美琴編2↪

美琴の初期設定では、光の守護者ではなく、門外顧問のサポート役でした。彼女とは別に光の守護者が出る予定でした。

標的34 骸来る！

「クフフフフ」

「「「「！？」」「」」

「ムム？ 男の声・・・？」

ターゲット
標的34 骸来る！

霧の中心をみると、三叉槍の柄の部分が体育館の地面に突き刺さっていた。

ボコボコボコ。

そこから地面がめくれ上がり、マーモンに向かって行った。

「ムギヤー!!」

「クフフフ。随分いきがっているじゃないですか。・・・マフィア風情が」

「だ・・・誰だ・・・？」

「間違いありません、あの姿・・・」

「骸・・・。無事だったんだ」

「クフフフ。お久しぶりです。舞い戻ってきましたよ。・・・輪廻の果てより」

。。。骸。。。

「奴が霧の守護者の正体なのかコラ」

「。。。ウム。六道骸。。。どこかで聞いた名だと思ったが、思い出したよ」

「。。。え。。。？」

「確か、一か月前に復讐者^{ヴァインディチエ}の牢獄を脱走を試みた者がいた。そいつの名が六道骸」

「なっ！」

「骸、また脱走しようとしたのー！？」

「あの鉄壁といわれる復讐者^{ヴィンディチェ}の牢獄を」

「だが、脱走は失敗に終わったはず。更に脱走の困難な光も音も届かない最下層の牢獄にぶち込まれたと聞いたよ」

「「「「!!!」」」」

・・・骸。

「クフフフ。ボンゴレが誇る特殊暗殺部隊ヴァリアーの情報網もたかが知れてますね。現に僕はここに在る」

「面倒くさい奴だなあ。いいよ。はつきりさせよう。君は女にいた幻覚だろ」

ゴツ。マーモンのフードの下から猛吹雪が吹き荒れ始めた。

「
おや
」

骸の足元から凍り始めた。

「
おやおや？
」

「幻覚でできた術士に負けてあげるほど僕はお人好しじゃないんだ」

ピキピキピキ。ピキーン。

骸が完全に凍ってしまった。

「ああ！」

「完全に凍ってしまったぞ！！」

「じゃああの骸は・・・幻覚！？」

「そんな・・・」

「さて化けの皮をはがそうか」

マーモンのフードの下から巨大なハンマーが出てきた。

「・・・」

「最も、砕け散るのはさっきの女の体だろうけどね」

ものすごい勢いで骸に向かってマーモンが突進していった。

ヴヴ・・・ン・・・。骸の右目の六の数字が一に変わった。

ズバン。地面の下から鳶が出てきて、マーモンを巻きつきはじめた。

「ムグ。こ、これは」

「蓮の・・・花・・・」

「クフフフ。誰が幻覚ですか？」

「ムグ。何て・・・力だ・・・！く・・・苦しい・・・」

「うわ・・・。あいつ何者？」

「あのバイパーを圧倒してるぜ・・・」

「あれがツナの霧の守護者六道骸だ」

「やっぱり本物なんだ・・・」

「しかし・・・だとしたらさっきまでの女はどうなるんですか」

獄寺とツナが困惑している。

「ツナ。クロームと骸を別に考えちゃダメなんだよ。クロームがいるから骸は存在し骸がいるからクロームは生きているんだ」

「！？ 意味が分かんないよ」

「さぁ・・・どうします？ アルコバレーノ。のろのろしているとグサリ・・・ですよ」

「ムウ！！」

コオオオオオ。マーモンの藍色のおしゃぶりが輝き、蓮の花が枯れ落ちた。

「図にのるな！！」

「情弱な」

骸の右目の数字が一から四に変わり、四の数字に炎が灯った。

ズババツ！

「！！！」

三叉槍を華麗に操り、マーマンの幻覚を切りつけた。

「あの目の炎は！！ 格闘能力スキルの修羅道だ！！」

「ムムウ！！ 格闘のできる術士なんて邪道だぞ！！ 輪廻だって僕は認めるものか！！」

「ほう」

「人間は何度も同じ人生を無限にくり返すのさ。だから僕は集めるんだ！！金をね！！」

マーマンが力を解放した。

グニャアア。

「わあ！」

「うおっ床が！」

「バイパーの奴力全開だぜ」

「そーするしかねーだろーな」

「クハハハ！ 強欲のアルコバレーノですか。面白い……。だが・
……。欲なら僕も負けません」

「なに！？」

火柱に蓮の花が巻きついて大量に出現した。

「す……。すんげっ」

「夢でも見ているのか……。」

「ぐむ……。ふらつく……」

「……吐き気が……。するぜ……」

「……（幻覚汚染……。か）」

周りで幻覚汚染が始まっているのに、何も影響を受けていないかのように美琴は涼しい顔をしている。

「幻覚汚染がはじまっているぜ」

「ああ。脳に直接作用する幻覚をこれだけたてつづけにくらってんだからな」

「ムッ。これほどの幻覚能力……。おまえどこで……」

「クフフ。地獄界にて」

「ふざけるな!!」

ピキイイイン。マーモンの幻覚で、骸の火柱が凍った。

「骸……」

ドドドドド。マーモンの幻覚が骸に総攻撃をしかけ、骸が三叉槍で防いでいた。

「とつた」

「!!」

「死ね!」

ブワッ。パケンツ。マーマンが骸を飲み込んだ。

「ああ!!」

「お・・・おい!!」

「骸さん!」

「・・・・・・・・!!」

「・・・・・・・・!! バカな!!」

「墮ちろ……。そして……。廻れ」

マーモンの幻覚を脱して骸が現れた。

標的34 骸来る！（後書き）

・・・はい、こんにちは。お久しぶりです。

遅くなりました。たったこれだけの文章なのに、時間がかかってしまいました。

今回は、裏話的なものはなしです。

ではでは。また次回。

標的 3 5 4 対 4

ターゲット
標的 3 5 4 対 4

「ば、バカな……。あのマーモンが……」

「勝った……」

「圧倒的だぞ……」

「これが……。骸だ……」

「このリングを1つに合わせるんですね？」

骸の手には2つの霧のハーフボングレリングが握られていた。

「は、はい」

「まだだよ!!」

「ハア・・・ハア・・・。少し遊んでやれば図に乗りやがって!!」

「ハア・・・ハア・・・。僕の力はまだまだこんなものでは・・・!!」

「マーモン！ お前は・・・!!」

「余計な手出しは無用ですよ、西城美琴」

美琴がマーモンに何かを言おうとしたら、骸に止められた。

「・・・。ご存知ですよね？ 幻術を幻術で返されたということは知覚のコントロール権を完全に奪われたことを示している（ただ・・・。それすらも効かない人はいますがね）」

「！！！？」

シユルルル。マーモンの頭上にいたファンタズマがマーモンの首を絞め始めた。

「グゲツ。やめろ！ ファンタズマ！！」

「さあ力とやらを見せてもらいましょうか。・・・さあ！！」

「ムギヤ！！！！」

骸の幻覚で体育館の地面が突然割れた。

「クハハハハ！！ どうですか？ アルコバレーノ。僕の世界は！！！！」

ズボツ。骸がマーモンの体内に入った。ギョルルルル。シュポツ。

「んぷつ。ンムーッ！！！！」

ボゴボゴボゴ。

「ムムム！！！！ やめろ！ 死ぬっ！ 死ぬっ！！！！」

「君の敗因はただ一つ。僕が相手だったことです」

「ギャ」

ドンッ！

マーモンの体が破裂した。

「！！！！」

「これで・・・いいですか？」

チエルベツロが互いに顔を見合わせ、

「霧のリングはクローム髑髏のものとなりましたので、この勝負の勝者はクローム髑髏とします」

「あのバイパーが」

「粉々かよ」

「え．．．ちょ．．．っ。そんな．．．そ．．．そこまでしなくても．．．」

「この期に及んで敵に情けをかけるとは．．．。どこまでも甘い男ですね、沢田綱吉。心配無用．．．といっておきましょう」

「!？」

「あの赤ん坊は逃げましたよ。彼は最初から逃走用のエネルギーは使わないつもりだった．．．。抜け目のないアルコバレーノだ」

「ゴーラ・モスカ。争奪戦後、マーモンを消せ」

プシュウウウウ。XANXUSの指示を聞き、佇んでいるゴーラ・モスカ。

「まったく君はマフィアの闇そのものですねXANXUS」

「君の考えている恐ろしい企てには僕すら畏怖の念を感じますよ。なに。その話には首をつっこむつもりはありませんよ。僕はいい人間ではありませんからね。ただし、君より小さく弱いもう1人の後継者候補をあまりもてあそばない方がいい。そして、歴代最強と謳われる、あそこにいる幻覚の守護者もですがね・・・」

骸が美琴の方を向いてそう言った。

（さすが骸。やっぱり気がついていたか）

「え！？ 幻覚！？ 美琴が！？」

「正確には思念波の類ですが」

「骸さま！」

「すんげー！！ やっぱつえー！！」

「てんめー！ どの面下げてきやがった！！」

「おい！ 獄寺！！」

「それくらい警戒した方がいいでしょう。僕もマフィアとは馴れ合
うつもりはない」

「僕が霧の守護者になったのは、君の体をのっとするのに都合がいいからですよ、沢田綱吉」

「骸……。と、とりあえず……。ありがとう」

骸が不敵に笑った。

「少々……。疲れました……。この娘を……」

ドサッ。骸ではなく、その場にクロームが倒れた。

「ツナ、同情すんなよ」

ギクッ。

「お前は骸のやったことを忘れちゃならねーんだ」

「勝負は互いに4勝ずつとなりました」

「引き続き、争奪戦を行います」

「明日はいよいよ争奪戦守護者対決最後のカード、雲の守護者の対決です」

「ヒバリの出番だな」

「ああ」

「おいXANXUSどーすんだ？」

「次に雲雀が勝てばリングの数では5対4となり、既にお前が大空のリングを手に入れているとはいえ、ツナたちの勝利は確定するぞ」

「XANXUS・・・。その時は約束通り負けを認め、後継者としての全ての権利を放棄するんだろうな」

「あたりめーだ。ボンゴレの精神を尊重し決闘の約束は守る。雲の対決でモスカが負けるようなことがあれば、全てをためーらにくれてやる」

「「「「!!!!」」」」

「あと一つか!!」

「認めたくねーがあいつなら・・・」

「そいつは甘いぜ」

「あのXANXUSがここまで言い切るということは、あのモスカ
って奴が絶対に勝つという自信があるからだ」

「それって・・・雲雀さんが・・・」

「よっ。おまえの勝負は明日になりそーだぜ。調子はどーだ？」

「試してみなよ」

標的36 最後の守護者戦（前書き）

当分の間、原作漫画に沿った内容で話を進めています。
それにより、若干短くなることがございますが、予めご了承ください。

標的36 最後の守護者戦

ガキン。雲雀のトンファーが弾き飛ばされ、地面にたたきつけられた。

「ヒ・・・ヒバリさん！！！」

ジャコ。ゴーラ・モスカの手に内蔵されたバズーカ砲のようなものが雲雀に向けられた。

「殺れ」

「や、やめろ！！！」

ズガガン。雲雀に向かって銃が連射された。

「やめろー!!!」

ターゲット
標的36 最後の守護者戦

「うわっ」

ガバッ。

「ハア・・・ハアハア・・・。な・・・なんて夢だよ・・・」

夢落ち・・・。

「あのヒバリさんが戦いで負けるわけないのにリボーンがあんなこと言うからだよ」

―昨日のリボーン言葉―

「モスカって奴が絶対に勝つという確信があるからだ」

―終了―

「ったく。あと1時間は寝れるじゃん」

再び布団をかぶって寝ようとしたが

「心配で寝れなくなったよ!! ったく、自分はゆーゆーと寝やがって!!」

仕方がないので、制服に着替えて、家を出た。

「ディーノさんならヒバリさんのこと知ってるよな」

―中山外科医院―

「昨日は用があつたみたいだけど……。帰ってきてるかな……？」

ガンツ。突然開いたドアにツナは頭をぶつけた。

「いでっ」

「……ボス」

「あ！（そーいえば戦いの後気を失って運ばれたんだ）」

ツナの前に現れたのは、霧の守護者クロームだった。

「えと・・・あの・・・な・・・何て呼べばいいかな。クロームさん・・・？ ドクロ・・・さん？」

「どっちでも」

「あ、あの・・・どこ行くの？」

「犬と千種がどっか行っちゃって」

「え・・・（そーいや置き去りにされてたもんな）。そ、そっか・・・。あの・・・昨日は戦ってくれて・・・」

タタタタ。

「聞いちゃいねえ！！ しかも全速力ー！？」

―中山外科医院・内部―

「えーっと・・・」

「どーだロマーリオ」

「変化はねーな・・・。だがボス。どのみちこれ以上ここには・・・」

「わーってる！ 今日中・・・いや昼までには何とかする」

（ディーノさん仕事かな・・・。何か忙しそうだな）

キ……。ツナが声のする方の扉をあけると、中にはディーノとロマリオがいた。

「誰だ！？」

「え……。あの……。さ……。沢田……。です」

「なんだよツナか！ 早えじゃねーか！」

「おはようございます！ 眠れなくて……。あの……」

「どーせオレから恭也の調子でも聞き出そうってんだろ？」

ディーノが鋭くツナにそう言った。

「こい。茶でも入れてやる」

「え。でも、忙しそうだし・・・」

「心配すんな。弟分と話す時間ぐらいはある。そりゃあ恭也が負けたら全てが終わっちまうんだし心配だよな。こいつらも暇なのか心配なのと同じこと聞きに來たぜ」

「んなー！ さ、3人とも！」

「安心したのか寝ちまいやがった」

「え、じゃあ」

「ああ。恭也は完ぺきに仕上がってるぜ。家庭教師としての贔屓目なしにも強えぜ、あいつは」

「よ、よかった」

「おめーは修行だぞ」

ギクッ。

「今日中に死ぬ気の零地点突破を完成させるぞ」

「リボーン！　つか、何言ってるんだよ！　今日の勝負で全部が決まるんだぞ。もう俺が修行する意味なんてないんじゃないか・・・」

「最終決戦だからこそだぞ。おまえもしもの時どーすんだ？」

く並盛山く

ボウッ。

「ああっ!!」

「さ、沢田殿!! 大丈夫ですか!!」

「あ・・・あつぶね」

「ヘタしたら死ぬところだったぞバカツナ」

ガッ。リボーンの蹴りがツナの顎にクリーンヒットした。

「余計なこと考えてたな」

「いでっ！！ 追い打ちかけんなよ！！ つーかまだやんの！？
もう行かないとヒバリさんの試合始まっちゃうよ！！」

「ヒバリの勝負は獄寺や山本達に任せてお前は技を完成させること
だけに集中しろ」

「そんな・・・！ 本気で言ってるのか！？」

「オレはマジだ」

「え・・・？ リボン・・・」

く並中く

「いいかてめーら！！ 何が何でも勝つぜー！！」

「おい何言ってるんだ？ 戦うのはヒバリだぜ」

「お前がいきりたつてどーするのだ？」

「んなこたわーってんだよ！！ 10代目は俺らを信頼して留守に
してんだ。俺らの目の前で黒星を喫するわけにはいかねーだろーが
！！」

「ハハハ。変な理屈だな」

「てめーには一生わかんねーよ！！ このっバカッ！！」

「タコヘッド！ オレもわからんが何故か極限に燃えてきたぞ！！」

「お、主役の登場だぜ」

校舎の方をみると、雲雀がこちらに向かって歩いてくるのが見えた。

「君たち・・・何の群れ？」

「んだとてめー！」

「まーまー。えーとオレ達は・・・」

「応援に来たぞー！！」

「ふうん。目障りだ。消えないと殺すよ」

「何だ、その物言いは！！！！ 極限にプンスカだぞ！！！」

「まーまー落ち着けて。オレ達はぐーぜん通りかかったただけだから、気にすんなヒバリっ。なっ」

ザシュツ。ヒバリのいる位置からおよそ数十メートルの位置にゴ―ラ・モスカが現れた。

「ふうん。あれを咬み殺せばいいんだね」

標的36 最後の守護者戦（後書き）

・・・あれ？ 今回、美琴出番なし・・・？

ところで、ボンゴレ本部突入の話はカットしています。

標的37 雲のリング、雲雀恭也VS・ゴーラ・モスカ

ターゲット
標的37 雲のリング、雲雀恭也VS・ゴーラ・モスカ

「……………ここが……………」

「そう。これが雲の守護者バトルの戦闘フィールド」

「クラウドグラウンドです」

「何ということだ……。運動場が……！」

「ガ……。ガトリング!？」

．．．。これが雲戦のフィールド．．．。思ったよりも大変そうだな．．．。

「雲の守護者の使命とは」

「何ものにもとらわれることなく独自の立場からファミリーを守護する孤高の浮雲」

「故に最も過酷なフィールドを用意しました。四方は有刺鉄線で囲まれ、8門の自動砲台が30M以内の動く物体に反応し攻撃します。また地中には、重力感知式のトラップが無数に設置され、警報音の直後爆発します」

「まるで戦場ではないか!!」

「怖けりや逃げろ。てめーらのボスのようにな」

「ふざけんな！！ 10代目は逃げたんじゃねえ！！！」

「ツナは来る必要ねーのさ」

獄寺の肩に手を置き、獄寺を制止する山本。

「ヒバリはうちのエースだからな。あいつは負けねーって」

「何を？」

「・・・フツ・・・エース・・・。ぶはーはっはっ！！ そいつぁ
楽しみだ！！！」

「・・・」

「！」

「あの野郎！」

大声で笑うXANXUS。

く並盛山く

ボウッ

「そこだぞツナ」

ドオン。ガラガラガラ。

「沢田殿！！　しっかりしてください！」

「だいぶよくなったぞ」

「リボンさん、もう限界です！　これ以上は沢田殿の体が壊れて
しまいます！」

「今・・・炎が・・・」

「？」

「な・・・なんとなくけど・・・初代がこの技でやろうとしたこ
とが・・・わかった気がした・・・」

「沢田殿・・・」

「そーか・・・」

既に疲労困憊のツナ。

「どーすんだ？　これで切り上げるか？」

首を横に振った。

「だって・・・リボーンの言うとおりだよ・・・。こんなこと・・・考えたくないけど・・・。もしも・・・もしもヒバリさんが雲戦で負けたりしたら」

「沢田殿・・・」

「そ・・・その時は・・・」

く中山外科医院く

「受け入れの準備はできている」

「そんじゃ始めっか」

「ボス、そろそろ勝負の時間だぜ？　いくら恭也が強くなったって
いっても開いてはヴァリアーのボス補佐だ……。ハンパねーぜ。
見に行つてやんなくていいのかよ」

く並盛町南山く

「ふう……。疲れた」。さすがにイタリアから飛んできると、疲
れるな」

「・・・見つけた・・・」

「!?!」

美琴が後ろを振り向くと、1人の男がいた。

「き、君は・・・？」

「君はボンゴレ光の守護者かい？」

「・・・。だったら・・・？」

「それなら、貰おう」

「・・・何を？」

「・・・。君の中の力を」

「・・・？」

謎の男が目の前に手を掲げた。

カッ！

「！！！！」

「フフフ」

「な、何をする・・・」

「お前の体内に眠る、あるものを頂く」

「な、何の話だ・・・ぐっ・・・」

「やはりな。おまえは知らないだろうな」

ギョオオオオオオオ！！！！

「うわああああ!!!!」

シューウウウウウ。

「ふ、ふふふ。ふははははは!!!!　これが、これが伝説の力、
7?の核となる究極の力か!!!!　これさえ、これさえあれば!!!!」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・。究・・・極の・・・力・・・?
」

「これさえあれば、・・・を・・・」

!!!!　な、なん・・・だ・・・と・・・。

「くっ」

ドサッ。謎の男は美琴に気を触れず、どこかに飛び去り、美琴はその場に倒れこんでしまった。

〽中山外科医院〽

「あんな、ロマーリオ。恭也にはゴーラ・モスカなんて奴、眼中にないみたいだぜ」

〽並中〽

「それでは雲のリング 雲雀恭也VS・ゴーラ・モスカ。勝負開始^{バトル}」

ガシャンッ、ドウッ。

「な!?! 飛んだ!?!」

ズガガガ。ガキィィ。ゴキヤツ。ピシピシ。ドオン！！！

ゴ―ラ・モスカは一瞬で雲雀に倒された。

カチ。雲のリングを雲雀は完成させた。

「な・・・」

「え・・・」

皆が皆、キョトンとしている。

「これじゃない」

「へ？」

ガゴン。

「あの・・・」

「さぁおりておいでよ。その座っている君」

「!!!!」

「サル山のボス猿を咬み殺さないと帰れないな」

雲雀がXANXUSに対して喧嘩を吹っ掛けた。

「なぬ!」

「なぬじゃねーよタコ。それ以前にこの争奪戦、俺らの負け越しじやん。どーすんだよボースー」

「・・・」

標的37 雲のリング、雲雀恭也VS ゴーラ・モスカ（後書き）

次回、久々のオリジナル回・・・かもしれない。

標的38 闇

ターゲット
標的38 闇

く並中く

ガッ

「悪いな。足が滑った」

「ふうん」

「勘違いするな。俺は、
ゴ―^{あれ}ラ・モスカを回収しに来ただけだ」

突如、ゴーラ・モスカが暴れだした。

「な、何だと!？」

「おいおい。どうしてくれる。お前が邪魔したせいで暴走しちまったじゃねえか」

「あいつ!」

カッ!

ドオオオオン! ゴーラ・モスカのもう片方の腕が何者かにもぎ取られた

「!?!」

「じ、10代目!」

「・・・。沢田・・・綱吉・・・」

「何があつた」

「そ、それが・・・」

——獄寺説明中——

「と、いうわけなんっす」

「そうか。それなら、あのデカブツを倒せばいいんだな」

ゴーラ・モスカがツナに向かって回転し、体内に埋め込まれた武器で攻撃しながら飛んできた。

「来い・・・」

ゴッ！

「「「「！！！！」」」」

ゴーラ・モスカが上空からの攻撃により、地面にたたきつけられた。

「な・・・」

「何が起きたんだ!？」

シューウウウ。

「・・・」

「くっ・・・」

「・・・。沢田・・・綱・・・吉・・・」

「誰だ!」

煙がはれて、ゴーラ・モスカと謎の人物の姿が現れた。

「あ、あれは……！」

「み、美琴……？」

ゴーラ・モスカの傍らに、美琴が立っていた。

「ん？ 美琴……。おいツナ。様子がおかしいぞ。気をつけろ」

「え？」

ゴッ。

「ぐあ」

すぐ横にいつの間にか移動してきていた美琴の肘撃ちでツナが校舎に向かって吹っ飛んだ。

「み、美琴さん！」

「……。黙れ、クソガキ」

「!？」

「おめー、美琴じゃねえな？」

リボーンが美琴に銃を向けた。

「アルコバレノ……。呪われし赤ん坊か……。ふん。貴様程度じゃアタシは止められないよ」

「あの2人、なんて殺気だ……。」

「……。どうなっている。ちつ。あのクソバカまた暴走してるのか」

「み……。美琴……。」

ドグッ。

「ぐっ……。あ……。」

美琴は再びツナに対して攻撃をして、ツナは上空に吹っ飛ばされた。

「クソガキ」

その横に美琴が瞬間移動した。

ガッ。ドガッ。ドゲッ。

美琴の三段攻撃がツナに命中し、ツナは地面にたたきつけられてしまった。

「ぐあー！」

「10代目……！」

「おいおい。やべーんじゃないの？」

「美琴さん。いくら美琴さんでも、これ以上は俺が許しません！
3倍ボム！」

獄寺が3倍ボムを美琴に向かって投げた。

ドォーン！

「何？ 今の攻撃。それで攻撃のつもり？」

「き、効いていない・・・」

「ちっ。心配になって来てみればやはりこうなっていたか・・・」

「「「「!!!」」」」

足元にいつの間にか人がいた。

「真っ白い・・・おしゃぶり・・・?」

「まさか・・・。
アルコバレーノ最強の赤ん坊!?!」

「リボン・・・。あれって・・・」

「おめーは、光のアルコバレーノ、セレナード」

「なんだとコラ。お前、死んだんじゃなかったのか」

「やだな。現にここにいるじゃない」

光のアルコバレーノ、セレナード。8つ目の炎の番人にして、9つ目の炎を操る。

「それより、本当に暴走しているとはね」

「暴走……だと」

標的38 闇（後書き）

次回もオリジナルストーリーでいきます!!!

（裏設定3）

光のアルコバレーノは、7?の監視者でありながら、復讐者の牢獄の門番でもあります。

標的39 暴走

「・・・。へえ。上手く暴走させられたじゃない。彼」

「・・・。白蘭様、何をなさっているのですか？」

「ん？ ああ。君たちか」

「・・・」

「はは。そんな目で見なくてもいいじゃないか。ただ単に、”過去”を見ているだけさ」

「過去を、ですか？」

「うん」 彼が、僕のあげた力を上手く使いこなせているか、疑問になってね」

「……。白蘭様、あまり過去に干渉なさるのはどうかと思います
が」

「はは。そうだね。んじゃ、これっきりにしようか」

「並中」

「リボーンSide」

「暴走ってどうゆゝことだ?」

「人というのは大概、裏と表を持っている。それは、表裏という」

「・・・は？」

「人の表とは光、裏とは闇を指すんだ。人はそれぞれ、光の面と闇の面を持つているってことさ。太陽と月、表と裏、天と地」

こいつ、何言つてやがるんだ？・・・いや、待てよ・・・！！
そーいうことか！

「・・・気づいた？ リボーン」

「ああ。人は必ず光と闇を持っている。それはつまり、人がいいことをするのは光の面が強い時、人が悪いことをするのは闇の面が強い時ということだ。」

本来の人間は、光の面が強い。だが、光の守護者たる人間は、光の面と闇の面が共に強力であり、力は拮抗している。

だが、本来なら光の面が少しながら勝っている。しかし、今の美琴を見てもわかるように、明らかに闇の面が強くなっている」

「それはつまり、光が弱くなっているってことだ」

「じ、じゃあ美琴は・・・」

しかし妙だな。見聞きした限りじゃあ光が無くなるなんてことはねーはずだが・・・。

「・・・。吸い取られたのさ、光がね」

「!？ どういうことだ!」

「ネイリス・・・。奴は、他人の力を吸収する力を持っている」

「な、何だと！」

だがそれだとしても、人格が変わるのは納得がいかなーな。

「おい」

「「「「！！！」」」」

「何をくつちゃべっている？」

「西城・・・美琴・・・！」

「どうしたの？ かかってこないの？」

「くっ・・・」

「クスクス。そうよねえ、あなた達にとって西城美琴はボンゴレ光の守護者。でも、私にとってはただの入れ物でしかないのよ？ だから・・・」

ヴウン。どこからともなく、小型のナイフを取り出した。

「こっぴどいっていいのやよ？」

スッ。美琴（？）は自分の腹にナイフを当てた。

「「「「！！！」」」」

「おめーは何者だ」

「・・・。私は、美琴の闇の人格」

「闇の人格、だと？」

「ああ。そうさ。クスクス」

「・・・」

スツット、獄寺の横に移動した。

「ねえ、死にたい？」

「な、何だと・・・？」

ドグッ。

「ぐあ
」

「クスクス。脆いね、人間って」

「止めんか！」

「・・・。あなたも死にたい？」

「ぬっ。話を通じんぞ」

「おやめ下さい。いくら守護者同士でも、これ以上戦ったら、沢田綱吉氏側を負けとします」

「何だ。これからが面白くなるのに・・・」

「落ち着いたとみなします」

「待て。さっきお前たちは、『これ以上戦ったら、沢田綱吉氏側を負けとします』といったな、どういうことだ、コラ」

「そのままの意味です。残り一戦、大空戦があるからです」

「何だと！？ ヴァリアーとの戦いは、俺達の勝ちだったではないか！」

「XANXUS様からの指示です。従わなければ、あなた方を失格とし、XANXUS様を後継者とするまでです」

「くっ・・・」

標的39 暴走（後書き）

さあさあさあ！

40話という大台まで残り一話！

次回から、大空戦が始まります！ 多分。

標的40 9代目

ターゲット
標的40 9代目

ドオオオオン。突如、後ろの方で爆発音が聞こえた。

「何なのだ！」

「はあ・・・はあ・・・はあ・・・」

「！！！！ 沢田殿！」

「ば、バジル・・・くん」

「大丈夫ですか、10代目！」

立膝をついているツナのもとにバジルと獄寺、そして、リボーンが駆け付けた。

「これは一体どうしたんだ？」

ツナの足元に転がっているゴーラ・モスカを見てリボーンが聞いた。

「突然動き出して攻撃をしてきたから、反撃したんだ・・・」

「なるほどな」

ガコン。ゴーラ・モスカの腹が開いて、中から男の人が倒れてきた。

「「「「！！！」」」」」

「何だ！？ 腹から人が出てきたぞ！」

「あ、あれは！」

バジルとリボンがすごく驚いていた。

「き、9代目！！！！」

「ど、どついつこと!？」

「どついつこと、じゃねえだろ。誰だ？ 9代目の腹を攻撃しまくったのは。誰だ？ 9代目の腹を焼き切ったのは」

「お、俺が9代目を・・・」

うなだれるツナ。

「ち、違う・・・」

「え．．．？」

「！」

「違う。悪いのは君じゃない。悪いのは、この私だ．．．」

「き、9代目！」

9代目が目を覚ましていた。

「おい、大丈夫なのか？」

「リボーン。私は大丈夫だ。君が、綱吉くんだね。リボーンから聞いているよ。いつも眉間にしわをよせ、祈るように拳を振るうと」

「え．．．？」

「なるほど．．．。君は．．．」

ポウッ。9代目の指に小さな死ぬきの炎が宿り、ツナの額の近くに充てられた。

「．．．。（俺、知ってる．．．？この人の事を．．．）」

ユラユラと揺れる死ぬきの炎は次第に弱々しく小さくなっていた。

「ああ！死ぬきの炎が！」

ポス。 9代目の手が地面に落ちた。

「
！
おい、しっかりしろ」

標的40 9代目（後書き）

さあ、大台ですが、少し短いです。

標的41 8つの属性と1つの炎

「9代目！！！」

「ふん。くたばったか、クソジジイ」

「てめえ！」

「おやめ下さい。このリング争奪戦は、9代目の死炎印により、全て我々に委ねられています。よって、リング外でのバトルは我々が認めません」

「白々しい！！！！ その死炎印は、9代目に無理やり押させたものだな！」

「想像でモノを言うのはおやめ下さい」

抗議するツナ側をのりくらりとかわすチエルベツロ。

「好きにしゃがれ」

「！ リボーンさん」

「ありがとうございます」

「ふん。てめーは手出ししねーのか？ アルコバレーノ・リボーン」

「・・・」

「ふふ。ははは。どうしたの？ リボーン。あんたらしくないじゃ

ない」

黙り込むリボーンと高笑いしながらリボーンに話しかける美琴。

「黙りやがれ。俺はもうキレてんだ」

ゾクツ。リボーンの殺気で、みんなが怖気づいた。XANXUSと美琴を除いて。

「ただ、9代目との誓いを守って、俺は手出ししねーぞ。そうは言っても、戦いの嫌いな俺の生徒はどうするかしらねーがな」

「・・・XANXUS・・・」

「ああ？」

「・・・そのリングは返してもらつ。お前に9代目の後は継がせない！」

リボーンが若干笑つたような気がした。

「お待ちください。9代目の弔い合戦は我々が仕切らせてもらいます」

「「「「！！！」」」」

「この弔い合戦を、大空戦と位置づけます」

「大空戦・・・？」

「はい」

チエルベツロがとんでもないことを言い出した。

「ふん。いいだろう」

ピン。XANXUSがツナに大空のハーFRINGを投げてきた。

その瞬間、XANXUS達の姿がその場から消え去った。

「おい、帰るぞ」

「あ、う、うん」

「ツナの家」

「・・・。大丈夫かな」

「何がだ」

「美琴だよ」

「あいつなら心配いらねーだろ」

「で、でも・・・」

ふう、と、一息ついて、リボーンが口を開けた。

「そんなに気に何のか？」

「そりゃそうだよ……。美琴のあんな姿見たことないから……」

「そうだな……。話してもいいかもしれねーな」

「え？」

「美琴についてだ」

リボーンが美琴について話し始めた。

「・・・美琴は、ある事情から、第二の人格を持つてんだ」

「第二の・・・人格・・・？」

「そうだぞ。おめーに、光属性について話したか？」

「う、うん」

「そうか。・・・。それなら、美琴の過去から話し始めた方がいいかもしれない。ただ、その前に1つだけ話しておくことがある」

ツナとリボーンの間、静かな時が流れた。

「光属性は、裏の属性が存在すんだ」

「裏の・・・属性・・・？」

「ああ。そーだぞ。光属性の裏の属性は、
”闇”属性だぞ」

「闇属性？」

「ああ」

標的41 8つの属性と1つの炎

標的41 8つの属性と1つの炎（後書き）

次回に続く。今回は、美琴の過去について、詳しく書こうと思います。

標的42 真実

「闇？」

「ああ。そうだぞ。しかし、妙な話だ」

「妙？」

「ああ。いくらなんでも、美琴ほどのやつが、あそこまで暴走するとは思えねーんだ」

「どういふことなんだろう。……。俺の知らない、美琴の過去……。それとも……。」

「あ、それなら、あれは美琴の芝居だったんじゃない……。」

「いや。それは考えられねえ。あれは、闇の残忍さそのものだ」

「でも・・・」

「俺が驚いてんのは、美琴の暴走じゃねー。美琴が操っている”闇の炎”のほうだ」

「”闇の炎”・・・？」

「ああ。そうだぞ。確かに美琴の暴走が気にならないといえは嘘になるが、今は”闇の炎”が先決だ」

先決・・・。

「闇の炎が実在していることは知っていたが、まさか美琴が暴走するとは俺も思わなかったからな。何も対策ができてねーんだ」

「え、じ、じゃあ・・・」

「・・・。そうか・・・。その手があんな」

「え・・・？」

「ツナ、零地点突破を早く完成させるぞ」

「え・・・？」

「初代が用いた零地点突破は・・・」

「リボーン説明中」

「そ、そうなんだ・・・」

「ああ。そうだぞ」

「なら・・・」

「ああ」

二人の修業が再開された・・・。

く???く

「クフフフ。面白くなってきましたね……。西条美琴……。お前の力、特と見せてもらいますよ」

く???く

「ん？ 帰ってきたんだ」

「はい。白蘭様のために、”光の炎”を持ってまいりました」

「ん。ご苦労様。それで？ 彼女には何をプレゼントしたんだい？」

「白蘭様のおっしゃったとおり、”闇の炎”を与えてきました」

「ふん。それで？ となったの？」

「白蘭様のおっしゃったとおり、暴走をしました」

「はは。さつすが。まあ、頑張ってきたよ。ヴァリアーの勝利は目に見えているけどね、もしもボンゴレ側に勝たれては困るからね」

「白蘭様の意のままに」

「ん。頑張りなよ。ネイリスくん」

標的42 真実（後書き）

いや、本当にすみません。予告通りにすすまなくて・・・。
色々と大変でして・・・。
まあ、みてくだせー

標的43 大空戦

ターゲット
標的43 大空戦

翌日・・・

「う、うん・・・」

ふう、あんまり寝れなかったな・・・。美琴、帰ってきてるのかな・・・。

自分の部屋の窓から隣の美琴の家を見る。が、明かりは当然ついて
いるわけもなく、カーテンも完全に閉め切られており、人気はな
かった。

「おい、ツナ。今日こそは、零地点突破を完成させるぞ」

「・・・うん。・・・美琴のためにも」

「夜」

「お、獄寺！」

「げっ。山本……」

「あ、山本殿！ 獄寺殿！ 笹川殿！」

「おう。バジルじゃねーか。ん？ ツナたちと一緒に来るんじゃないのかなのか？」

「それが、沢田殿とは現在別行動をとっているのです」

「そっか。まあいいや。いこうぜ」

一行は雑談しながら並中を目指していたが、途中でふとバジルが口を開いた。

「以前・・・」

「「「ん？」「」」

「7年前までは、沢田殿を含めて、合計6名の10代目候補がいたそうです。そのうち4人は突出してボスとしての器があり、才能にも恵まれ、最も10代目に近い4人と言われていました。そして、その4人の中でも一番で、9代目と門外顧問を除く全員が認めていたのは、XANXUSだったそうです。それほどまでに、XANXUSにはボスとしての器はあったんです」

「・・・。なあ、その4人ってーのにツナは入ってたのか？」

「・・・いえ」

「だろーな」

「あのなあ、新入り。うちのボスは、凄すぎて、誰にも分んねーんだよ。入って来たばかりの奴にはな」

「そうか？　そうでもねーと思うぜ。ツナのすごさは、たまに凄すぎて、見落としちゃうこともあるぜ」

「というか、沢田は凄いのか凄くないのかときわからぬことがあるぞ！」

「んだと！　てめーら！」

ああ。そういうことですね。この方々は、拙者たちよりも、沢田殿の平凡な非凡さに気が付いているんですね。

……。恐らく、美琴殿も同様。美琴殿ほど沢田殿を気にかけて、気に留める者はこの御三方とリボンさん、沢田殿の母上様と、親方さま以外にいないのでしょうね。

それにしても、凄い信用のされ方です……。

「……にしてもよお、昨日の美琴さん、どことなくおかしくなかったか？」

「ああ。いつもの美琴からは感じられねーほどの殺気と怨みの念がビリビリと感じられたぜ」

「一対何が起きているというのだ？」

「さあな」

ドゴオオオオオオン！！！！！！

突如、並中から爆発音が聞こえた。

「な、なんだ！？」

「「「「！！！！」」」」

「XANXUS！！！！」

「どーやら、あっちも準備は万端のようだな」

!!!! り、リボンさんに沢田殿……。いつの間に……。

「ふん。逃げずに来たか、クソカスども」

「……XANXUS……」

「ボス……」

「!!!! クローム!? どうしてここに!?!」

突如ツナたちの目の前に現れたクロームに驚くツナ。

「守護者は全員集合って……」

「何の用？」

「ヒバリさん……！」

「！　どうやら、アイツもいるみてーだな」

「え？　あ！　マーモン……！」

ヴァリアー側を見ると、逃走したはずのマーモンが鳥籠に入れている。

「ん？　おい、スクアーロは？」

「雨戦の顛末はご存じのはずです。スクアーロの生存は否定されま
した」

「あれ？ でも、守護者は全員集合って・・・」

周りを見渡すと、チエルベツロに抱えられているランボの姿が見え
た。

「お、おい！ 何やってんだよ！ ランボは絶対安静なんだぞ！？」

「それは向こうも同じです。尚、今回は、命ある全ての守護者に集
合をかけました。じきに光の守護者も到着します」

「ふん」

「！！！！　ネイリス・・・！！！！」

「やーごめんごめん。遅くなっちゃった」

その場に現れたのは、いつもと変わらぬ雰囲気的美琴だった。昨日までの殺気や怨みの念は何一つ感じられない。

というよりも寧ろ、”闇の炎”を扱い、ツナをタコ殴りにした”美琴”と今の”美琴”が同一人物なのかどうかも疑わしかった。

「それでは、どちらもこのリングボックスにリングを収めてください」

「ぬっ。この命がけでとったリングを返せというのか」

「再び入手するのならば、関係はないはずです。それに、リングは本来の持ち主の下へ行くものです」

「ぬう」

「無くしたよ」

「すでに預かっております」

「……。ヴァリアー側、雷・嵐」

「……。沢田氏側、雨・晴・霧・雲・光」

チエルベツロの1人がリングボックスを持って何処かへ去っていった。

「それではルールを説明する前に、守護者及びボスは、これをつけてもらいます」

「なんだこりゃ」

「リストバンド型小型カメラです」

「それでは、まず、各々が戦った場所に移動して下さい」

「ぬ？ 前戦ったフィールドに行けということか？」

「異論は認めません。従わなければ、失格とします」

冷たく、冷酷に言い放つチエルベツロ。

「それぞれのステージに巨大なポールがあり、その上に守護者のリングがおりてあります」

「ん？ つーことは、リングを奪い合えってことか。ししし。王子、暇なくてすみそう」

「但し、出来れば・・・ですが」

グサツ。守護者全員のリストバンドから全員に強力な毒が投与された。

「ぐあ」

「み、皆!？」

「皆さんに打たせてもらいましたのは、デスヒーターと呼ばれる、猛毒です。巨大な象ですら、30分で死に至ります」

「な、何で皆まで!」

「それが大空の使命だからです」

「え?」

「大空の使命は、『全てに染まりつつ、全てを包み込み抱擁する大

空となること』です。それはつまり、守護者の命を預かるということとです」

「も、もっいいよ!」

「尚、今回の大空戦の勝利条件は、大空のリングを含、全8つのリングをそろえることです」

「は、早く始めよう!」

「また、試合開始後は、場外からの一切の干渉を禁止致します。特殊弾も然りです」

ドゴオオオオン!!!!

「XANXUS様！ ま、まだ・・・！」

「早く始めようと言ったのはそっちだぞ？ それとも、特殊弾を打つ前じゃマズかったか？」

「俺の腕をなめんなよ。ツナ、こいつは片手間じゃー相手になんねー。守護者を助けながらなんてムリだぞ」

「ああ。わかってる・・・。こいつを先に片づける！」

ボウッ！ ツナの額とグローブにオレンジ色の死ぬ気の炎が灯った。

標的43 大空戦（後書き）

いやー。長かった。今回から、大空戦がいよいよ始まります。
美琴や色々な引きが長かった！

標的44 XANXUS VS 沢田綱吉

「それでは、見学の方は、あちらの観覧席にお入りください」

「はん。よく耐えた、とだけ言っておこう」

「XANXUS・・・。俺は、お前には絶対に負けない。お前に9代目の後は継がせない！」

「^{スタート}それでは、大空のリング、XANXUS VS 沢田綱吉、^{バトル}勝負開始！」

^{ターゲット}標的44 XANXUS VS 沢田綱吉

その声と同時にツナは高速で移動して、XANXUSの目前に迫った。

「！ は、速い！」

ドガッ。XANXUSがツナの攻撃で校舎に向かって吹っ飛ばされた。

「油断すんなよ、ツナ」

そのまま追い打ちをかけるかのように校舎の瓦礫の許に向かっていった。

「！？」

ドゴオオオン。

刹那、ツナの脇を巨大な火の玉が通り過ぎていき、その火の玉はツナの後ろ側にあつた校舎に直撃した。

「な、なんだ！？ あの大火の玉は！」

「XANXUSのそれじゃねーな」

「どういふことですか？ リボンさん」

「XANXUSの扱う炎はお前も知つてのとおり、2代目が激昂したときのみ使われたとされる、“憤怒の炎”だ。だが、あの炎は、“憤怒の炎”が見せるような独特な力はねー」

「ああ。確かにな」

問題なのは、XANXUSが放ったか誰が放ったかじゃねー。あの異様なまでの光球だ。確かに”憤怒の炎”が発生させるのも光球だが、それとは似てもつかねえ。どちらかというと・・・。

「ははは。やってくれるじゃない」

「「「「「!?!?!?!?!」」」」」

校舎の瓦礫の下から、XANXUSではない誰か別の人の声がした。

「痛いな」

「ね、ネイリス!!!」

「まったく、死んだらどうしてくれるの？ 沢田綱吉」

・・・・ネイリスの様子がおかしい。さっきまでとは別人みてーだな。普段の美琴と似てやがる。

「おい、クソカス。リングはどうした」

「ほら、この通り」

瓦礫の中にいたXANXUSがそうネイリスに尋ねると、ポケットから、光のボンゴリングを取り出し、XANXUSに手渡した。

「ひ、光のリング！ み、美琴はどうした！」

「はは。どうしたもこうしたも、君が殺したんじゃないか。幸い、僕は助かったけどね」

「こ、殺した・・・？」

！ ツナ、挑発に乗るな。

「ああ。そうさ。あれ？ 知らなかったわけじゃないよね？ 今君が、XANXUS様をブツ飛ばして破壊したこの場所って、光戦が行われてた場所だよ？」

「な、なに・・・!？」

「ど、どういことですか!？ 確か、光のリング戦は」

「嵌められたな」

「そ、そんな・・・」

「おい、クソガキ。てめーは、守りながら戦うんじゃなかったのか？ はん。殺してんじゃねーか。自分の守護者をてめーの手で！」

「お、俺が・・・。殺した・・・」

うまくいったようだな、ネイリス。

ああ。まだ彼女の中には”例の炎”が眠っているからね。それを取り出すまで、彼女は死んだことにしておくのさ。

その炎があれば、俺はボンゴレ10代目になれるんだな？

ああ。間違いない。

と、いうようなやり取りがXANXUSとネイリスの目配せで行われていた。

「沢田。てめーの守護者は、あのクソ女だけなのか？」

「！・・・。ああ。違う。俺の守護者は、美琴だけじゃない！」

ボウッ！ ツナの炎がより一層大きくなった。

XANXUSのやつ、どういっつもりだ？ 態々ツナの戦意を回復させるなんて・・・！ まさか・・・。いや、そんなはずはねえ。

「はん。今更てめーがやる気を出したところで、何も変わらねーんだよ」

「いや、変えてみせる！」

ゴッ。鈍い音がして、ツナが後方に吹っ飛ばされた。

「ぐあ
」

「ぼ、ボス……。助けてよ……。」

「ぼ、ボス……。」

「大空の施しだ！　ありがたく思え！」

上昇したXANXUSは、銃を取り出して、ポールを破壊した。

「……！　し、守護者のポールが！」

「ぬっ
」

「しっし」

このままでは敵の守護者が野放しに！

「心配はいらねー。XANXUSもただものじゃねーが、ツナの守護者もそう簡単にくたばるやつはいねー」

「こっからだと、体育館が近いか」

ビュッ。ガキン。ベルフェゴールが持っていた嵐のリングが校舎に投げ出された。

「！？」

「ひ、雲雀殿！」

「あ、ありません！ 立ち上がるのですら困難な毒のはずです！」

「ポールを見てみる」

一斉にみんながポールを見ると、ポールが倒されたいた。

「ふっ。束縛されるのを嫌う、あいづらいな」

標的45 嵐を巻き起こす雲

ターゲット
標的45 嵐を巻き起こす雲

「んん？ お前、相手の雲の守護者じゃん」

「ねえきみ、天才なんだって？」

「ししし。俺のこと知ってんのか？ なら話がはえーや。雲のリングを超越しな。天才の俺にはかなわねーぜ」

「ふうん。君、そんなに自身があるんだ」

ビュビュ。ヒバリの言葉を待たずに、ベルフェゴールはヒバリにナイフを投げつけた。

「へえ、ナイフを使っただ。当たらないと意味ないよ」

ブシュッ。

「！」

「ししし。どーした」

「ヒバリ殿！」

「あいつもしかして、ベルフェゴールがナイフとワイヤー使いだっ
てしらねーんじゃねーか？」

ドサッ。カラン。

ヒバリが座り込んで、トンファーを取りこぼしていた。

「ヒバリ殿！」

「ししし。とどめ」

ビュッ！ ベルフェゴールがヒバリに向かってナイフを投げつけた。

「！」

「と、止めた！」

「ふうん。ナイフの柄にワイヤーがついているんだ。まるで弱い草食動物が生き残るための浅知恵だね」

ヒュンヒュンヒュン。手に取ったトンファーを振り回し、自分の体の近くにあったワイヤーを切り落とした。

「げげげ。やっべー」

ビュッ。もう一度ナイフをヒバリに投げつけた。

キン。はじかれた。

「待ちなよ」

「しし。それだけ傷つけられれば、勝ちなようなもんだ」

ヒュ。キン。

「・・・」

ドサ。

壁に寄りかかって態勢を崩すヒバリ。

く別Sideく

「ありがたき幸せ」

レヴィがゆっくりと立ち上がり、ランボのほうにゆっくり歩いて行った。

「この牛ガキ・・・。死ね」

「待ちやがれ！」

ビュッ！ ドーン

「ぬお！ 爆弾だど・・・？ 爆弾小僧！」

レヴィが振り返ると、そこには獄寺が立っていた。

標的46 嵐と雨と雷

ターゲット
標的46 嵐と雨と雷

く アクリウムく

「はは。助けてくれてありがとな」

「別に。校内で死者を出したら、風紀が乱れるからね」

「はは。なんじゃそりゃ」

その時、ヒバリがよろけて、壁にもたれかかった。

「おいおい。大丈夫かよ……」

「何が」

「何がって……。しっかりしろよ。残りは俺が行ってやつから」

「……。ふん」

ピン。

ヒバリが雲のリングを山本に投げてきた。

「んじゃ、お前はここで待ってるんだぞ」

く屋上く

「ぬう。爆弾小僧・・・」

「んだ？ てめーは。俺とやる気か？」

「俺の仕事の邪魔をしておって・・・」

「どうした？ ただ単に図体がでかいだけか？ お前は」

「ぬう！ 愚弄する気か！」

レヴィの頭に血が上ってきているのが、手に取るようにわかる。

いや、まだだ・・・。

「はん。どうせてめーのあのパラボラも雨ん時しか使えねーんだろ？」

「ふん。貴様、俺を挑発しているな？ この俺の技が雨天時しか使えないと思うな！ 雨天時しか使えぬ技で、ヴァリアーの幹部になどなれるものか！！！」

「バツ！！！！ レヴィが手を広げると、背中にあったパラボラが空中に飛んで行って、八方に散らばった。」

「俺の技は、レヴィ・ボルタは全天候型だ！！！」

「だろーな」

「なぬ！？」

「この時を待っていたぜ！ 全てのパラボラが開くこの時を！！！」

ビュッ!!!

獄寺がダイナマイトを取り出して着火し、八方に投げた。

「行け!」

【ロケットボム!!!】

「なぬっ!」

ドオオオオオン!!! 獄寺の放った、ロケットボムが見事に全てのパラボラに命中して、全てのパラボラを粉碎した。

「逃がすかよ!」

ビュッ！

逃げ出そうとしていたレヴィにとどめの一撃。

「む……無念……」

ドサッ。

獄寺のロケットボムにやられ、倒れこんでしまったレヴィ。

「オラ、アホ牛。雷のリングはおめーのだぜ」

カチッ。

リストバンドに雷のリングをセットし、解毒剤を投与した。

く観覧席く

「う、獄寺殿・・・」

ホッと胸をなでおろすバジル。

く雷戦・ステージ エレットウリコ・サーキットく

ドオオオオオン！！！！　　すぐそばでは、ツナとXANXUSが戦っていた。

「10代目・・・。この大空戦、10代目のために、余計なもの音は1つも立てない！！！！」

標的46 嵐と雨と雷（後書き）

今回は、短いです。

さあ、そして話数が間違っていました。すいません。

標的47 極限太陽（前書き）

思ったんですよ、最近更新が滞ってるなって。

標的47 極限太陽

ターゲット

標的47 マキシмум・キャノン
極限太陽

「はあ．．．はあ．．．はあ．．．。くっ．．．」

「どういうことだ？ ツナのやつ、徐々にスピードが落ちてきてるぞ」

「ちげーな。あれは、XANXUSが徐々に徐々にスピードを上げてんだ」

「！」

その時、空中でツナがXANXUSの攻撃を喰らい、地面にたたきつけられた。

「ぐあ！」

「ツナ！」

「ふん。その程度か」

「・・・。おい、ツナのやつ、もう気力が限界なんじゃねーのか？」

「ああ。みてーだな」

だが、いくら気力の限界だとは言っても、いまのおれたちにできることは何一つねーんだ。ツナを・・・あいつらを信じるしかねーんだ。

「！ 誰だ！」

「獄寺！」

「山本……」

「そっちはどうだ？」

「ああ。芝生頭とアホ牛のリングは預かってきた」

「こっちは、雲と雨だ」

「てことは、あとは……。霧と光だな」

そういわれて、山本ははっとした。

「いや、光のフィールドに行ったが、誰もいなかったぜ」

「……。そうなのか」

「てーことは残るは……あの娘か！」

く体育館く

「おいおい、大丈夫か？ 獄寺……。辛そうだぞ？」

「へっ。そういうお前こそ」

ガラガラ。扉を開けて、クロームがいるであろう体育館に足を踏み入れた。

「おっ。来たね」

「!!!! ベルフェゴール!」

「ししし。それ以上こっちに来んなよ」

ツィ。ベルフェゴールがクロームの頬にナイフをあて、そこから血が少し流れていた。

「・・・」

「さあ、お前たちの持っているリングを全てここに渡してもらおうか」

「てめ・・・!」

「いいぜ」

「山本！」

「ただし、条件がある。まず、その娘の解毒をしてくれ。そうしたら、このリングを全て渡してやる」

「ししし。何言ってるの？ 主導権はどっちにあると思ってんの？」

当然の言いぐさ。確かにこの状況では、山本達ではなく、ベルフェゴールたちに主導権がある。

「ま、いいさ。リングがすべて手に入るならね」

プシュッ。

マーモンに促されて、クロームの解毒をベルフェゴールがした。

「行くぜ」

5つのリングを手に、ベルフェゴールたちに近づく。

「そっから投げな。お前の刀の届く範囲にははいらねーぜ」

「ああ。・・・。とと」

こけるふりをして、背負っていた刀を取出し、足でその刀を蹴り飛ばした。

【時雨蒼燕流攻式三の型「遣らずの雨」！！！！】

ガッ。

「いて」

「形勢逆転・・・だな」

ベルフェゴールが怯んだ隙に、刀を拾って、ベルフェゴールの背後に回り込み、のど元に刀をあてていた。

「ムム。やはり侮れない相手だったね。保険をかけておいて正解だったよ」

ウン。

ベルフェゴールとマーモンの姿が消え、マーモンが大量に現れた。

「なに!?!」

「ふふふ。これで完成……。所詮あなたなんて、ただの操り人形に過ぎないんだから、大人しく従ってくればいいのに、抵抗なんてするもんだから、傷がついたじゃない」

「……。な、なぜこんなことを……」

「決まってるでしょ？ 復讐よ、復讐。その為にアタシはこの力を手に入れた……」

「誰に復讐をするつもり？」

「決まってるじゃない・・・」

そう言って、一呼吸おいてもう一度口を開いた。

「・・・。XANXUSとボンゴレ^{（イ）}？世、沢田家光そして、貴女よ・
・・・。西条美琴」

626

「！！！！ それって・・・9年前のあの事件の関係者・・・！」

「その通り」

「！ まさか貴方は・・・」

「残念だけど、アタシはあの事件の生き残りじゃなければ、あの村に住んでいたわけでもないわ……。ただ、あの瞬間を除いてね」

「……」

美琴は少し考えた末に、ある答えにたどり着いた。

「ま、まさか……！」

「ふふふ。やっと気が付いたみたいね」

「ば、馬鹿な！ 9年前のあの事件の生き残りは0人だったし、全ての亡骸は焼却されたはず！ それに、村は完全に焼き払われていた！……。！ そうか！ 白蘭！」

「あら。白蘭様の名前を軽々しく口にしないでくれる？」

「白蘭が絡んでいるとすれば、全ての説明がつく！ 貴方が何者なのかもね」

「口が過ぎるみたいね……。少し眠っててくれる？」

美琴にスタンガンをあてつけ、気絶させた。

「……ボンゴレ……。アタシがぶっ潰してやる。その為に、この体を……。この力を手に入れたのだから……。……そのために、あんたにも協力をしてもらわないとね……。」

（体育館）

「くっ……。どうすれば・・・」

来たぜ、極限ともいうべきピンチが。お前の力がこのピンチを救うんだ！

マキシマム・キャノン
「極限太陽！！！！」

ドゴオオオオオオン！！！！！！！！

外からの衝撃で、体育館が完全に崩壊した。

「な、なんだ？ この力は・・・」

「
いったい誰が」

「
すまん。まどろっこしいのは嫌いでな」

「
芝生頭！」

「
笹川先輩！」

標的47 極限太陽（後書き）

あれ？ 新キャラ？

まだまだ続きます。次回は、本当に大空戦を中心に話を構成していきます。なんか、見返してみると、大空戦なのに、戦っている描写が少ない気がしてたんですね。まあ、次回は大丈夫でしょう！

ところで、美琴を縛り付けたこの人、誰だか聡明な読者の皆様にはもうすでにお分かりですよ？

標的48 零地点突破

ターゲット
標的48 零地点突破

「おい、どうした。その程度か？」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。くっ」

地面に片足を付き、膝に腕を置いて、肩で息を切るツナと、まだまだ余裕なXANXUS。

くっ・・・。っ、強い・・・。

「ツナのやつ、どうしたんだ？」

「恐らく、疲労が溜まってんだろーな」

「疲労って、何故です？」

「あんなにXANXUSと交戦をしてんだ。XANXUSとツナとでは、気力の量もちがいし、使い方も異なるんだ。ツナの方が戦いが不慣れってこともあってどう考えてもツナの方が不利なんだ。」

「それに、ツナの奴、テンばってるしな」

「沢田殿・・・」

「このままでは……。アレをやるしか……。」

「……」

スツとツナは立ち上がり、謎の構えをとった。

ボツ。ボボボツ。ボツボツボツ。

「おいおい、何やってんだ？　アイツ。あんなところで炎を垂れ流すのは自殺行為だぜ！」

「沢田殿……。まさか」

「ああ。あれをやる気だ」

ポッポッポッ。

ツナの額の炎が不規則にノッキングを始めた。

「……まさか……あのノッキングするような不規則な炎の動き……。零地点突破！」

「零地点突破？ ツナが取得を目指していた、あの技か？」

「ああ。そうだぞ」

だが、何故アイツが知ってんだ？　．．．。まさかな．．．。

「させねえ！」

「！」

ドンッ！　XANXUSの炎がツナに直撃をした。

「くっ．．．。はぁ．．．はぁ．．．はぁ．．．」

ポウ。

「死ね！
炎の鉄槌！！！」

コルボ・デューロ・ディ・フリーコ

「！！！！」

ドドドドド。XANXUSが空中から怒涛の攻撃を仕掛けてきた。

「！！！！」

「！！！！」

「はぁ・・・はぁ・・・はぁ・・・。クソが。てめーでてめーの寿命を縮めやがって」

「沢田殿・・・」

「ん？」

ユラッと、ツナの額に小さな炎が宿った。

「なに！？」

ボウッ！

「やった！」

「ああ。成功だな」

「・・・。それが初代の使ったという零地点突破か」

「そうだ」

「はん！ 誰に吹き込まれたか知らんが、零地点突破はそんな技じやねえ！」

「アイツ！」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4915t/>

家庭教師ヒットマンREBORN！ 光の守護者

2011年11月17日19時35分発行